

第二部 令和元年度SGH研究開発の成果と課題

I スーパーグローバルハイスクール構想（概略）

1 研究開発構想名

「食を活かした地域創生」をテーマにしたグローバル人材の育成

2 研究開発の目的・目標

（1）目的

世界の様々な地域が抱える課題の解決に向けて、持続可能な地域創生モデルを世界に示すため、高知県が官民あげて取り組んでいる「食を活かした地域創生」をテーマに、世界の標準的な考え方や文化の多様性を踏まえつつグローバルな視点から様々な事例を学び、地域が持つ価値を最大限に活かした、持続可能な「地域創生モデル」を探究する。その過程を通して、高知県のみならず世界のローカルな地域の活性化に貢献することのできる将来のグローバル人材を育成する教育プログラムを開発する。

（2）目標

① 成果目標（アウトカム）

- ア 在学中に自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒の割合を、80%以上とする。
- イ 高校卒業までに自主的に留学又は海外研修に行く生徒の割合を、50人以上とする。
- ウ 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合を、80%以上とする。
- エ 公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数を、15名以上とする。
- オ 卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合を、80%以上とする。
- カ 将来に渡って国際的な視野でグローバルな地域課題を解決したいと考える生徒の割合を、80%以上とする。

② 指定4年目以降に検証する成果目標（アウトカム）

- ア 文部科学省が支援する、国際化に重点を置く大学へ進学する生徒の割合を、30%以上とする。
- イ 海外大学へ進学する生徒の人数を、4名以上とする。
- ウ SGHの課題研究が大学の専攻分野の選択に影響を与えた生徒の割合を、100%とする。
- エ 大学在学中に留学又は海外研修に行く卒業生の数を、1学年につき1年間で20名以上とする。

3 研究開発の概要（研究開発1～4年目の課題を踏まえて、一部変更）

食に関する課題や地域活性化事例を収集・分析し、グローバルな視点から地域創生モデルを提案する取組を通して、課題発見力、創造的思考力、課題解決力を身に付けたグローバル人材を育成する。探究活動「グローバル探究Ⅰ～Ⅲ」及び英語授業を中心に研究を進め、国内・海外でのリサーチ活動や国内外の高校生との討論等の負荷の高い活動を生徒たちに課すことによって、課題を発見し、理解し、まとめ、その結果を日本語や英語で発信する力を養成する探究型カリキュラムを実施する。

1年次は、課題発見力及び質問力の向上のために、地域の抱える課題に関する様々な事例や情報を収集・分析して論理的思考力を磨き、課題への積極的姿勢を身に付けさせる。その際、専門的アドバイザーとして地域の企業の方々を定期的に招聘し、年間を通じた指導・助言を生徒たちが受けるプログラムを設定する。2年次は、SDGsが提示している諸課題について課題探究を行い、創造的思考力及び課題解決力を育成する。同時に、文化や宗教との関係やフェアトレードの観点から、英語で課題探究を行い、グローバルな視点を獲得させる。また、海外リサーチや討論等の体験活動で知識とスキルを活用する経験を積ませることで、チャレンジ精神と行動力を養う。3年次は、世界に向けて地域創生モデルを展開し、課題と自己の関係性を明確にして課題論文を完成させる。

（1）研究開発の仮説

海外インターンシップなどの負荷の高い国際体験活動を通して、グローバルな観点から、地元資

源である「食」を活かした地域活性化を考察する活動を行うことで、深い地域理解と日本人としてのアイデンティティを身に付けたグローバル・リーダーを育成することができる。

仮説1

身近な課題を調査・探究し、課題解決モデルを作成したうえで、課題に対し自己を位置付け、グローバル展開する探究活動を行うことで、グローバル・リーダーに必要とされる社会性や課題発見力、創造的思考力、課題解決能力が身に付く。

仮説2

英語科で実施している英語による探究型授業を普通科でも行い、仮説1の探究活動と関連付けることで、国際的な場面において世界の人と英語で対等に意見交換をすることができるコミュニケーション能力が身に付く。

(2) 課題研究について

① グローバルな探究力の育成

ア 1年次

「グローバル探究Ⅰ」で、「生産流通」「六次産業」「食と健康」「食と観光」等のサブテーマを探究の基本的な観点とし、小グループで事例を収集し、調査・探究活動を行う。この中で、課題の意義や課題発見の仕方等を学び、課題発見力や創造的思考力を養う。リサーチや課題発見のためのフィールドワークを県内外で行う。

海外リサーチ（香港、台湾）を通して、食が市場に供給されるまでに、どのような付加価値がどのように付けられているか、また六次産業化に向けての取組の可能性や食と観光を結びつける方策等について、従業員へのインタビューを交えながら企業内部からの視点で考察させる。この活動を通して、チャレンジ精神と行動力を養わせるとともに、以降の探究活動において中心的役割を担わせる。香港は、アジアにおける貿易のハブであり、食に関しても流通拠点として機能している地域であるため、食の流通や食と健康、食と観光について考察するうえで最適である。台湾は、経済や観光面で日本との交流が盛んでありながら独自の文化を持ち、日本のアジア進出の手掛かりが得られる国である。

イ 2年次

「グローバル探究Ⅱ」で、1年次のサブテーマに基づいて新たなグループを構成し、探究活動を深化させ、それぞれの地域活性化モデルづくりに取り組む。収集した事例から分析した要因等を組み合わせ、グローバルな価値を付加した新たなモデルの作成を通して課題解決能力を養成する。探究結果を、グループでのプレゼンテーションおよびリサーチペーパー（論文）にまとめる。

リーダー性の高い生徒を海外リサーチ（シンガポール、タイ）に派遣する。シンガポールは、外食産業が盛んであり、食に対する国民の健康志向が非常に強い。また、食と観光を連動させた取組も日常的に行われている。タイでは、四国銀行が主催する「四国インバウンド商談会 in バンコク」に参加し、実際の誘致活動を学ぶとともに、現地でアンケート調査等を行い、探究活動に役立てる。

※訪問国のオーストラリア、インドをタイに変更。（平成29年度より）

ウ 3年次

関心・意欲・能力の高い生徒は「グローバル探究Ⅲ」で、課題探究を深化させる。さらに「課題論文」で、自己の位置付けを明確にして課題論文を書き、プレゼンテーションを行う。

英語科の生徒および「英語課題探究」を選択した普通科文型の生徒は、本校主催の国際シンポジウムにおいて、英語で地域創生モデル案を発表する。

② 英語活用力の育成（オールイングリッシュで探究活動を行う）

ア 2年次

「英語表現Ⅱ」「グローバル・エデュケーションⅠ」で、「信念／信仰と食」、「食とフェアトレード」、「言語／習慣と食文化」のサブテーマに基づいて、少人数編成講座で海外とのインターネットでのディスカッション等も活用して探究活動を深化させると共に、実践的な英語活用力を向上させる。

イ 3年次

関心・意欲・能力の高い生徒は「英語課題探究」、「グローバル・エデュケーションⅡ」で、課題に対する自己の位置付けを明らかにして英語課題論文を書き、国際シンポジウムにおいて英語でプレゼンテーションを行う。

4 研究開発成果の普及に関する取組

(1) 「食と地域創生」国際シンポジウムの開催

地元企業や大学関係者ならびに海外連携校生がを招いて国際シンポジウムを開催し、ディスカッションを通じて、地域創生モデルを国内外に提示する。

(2) 提言と意見交換ウェブサイト立ち上げ

専用ウェブサイトを立ち上げて、世界に向けて提言し活発な意見交換の場を設ける。

(3) 小中学校でのプレゼンテーション

県内小中学校に出向いて「グローバル探究Ⅰ～Ⅲ」の授業内容を紹介し、県全体のグローバルな社会意識の早期醸成に向けて一翼を担う。

(4) 公開授業、研修会、ワークショップの実施

年間2回の公開授業を行い、取組内容を県内外の高等学校等、教育関係者に公開する。

県内外の教員を対象として研修会を実施し、探究活動の指導方法を共有する。

(5) 大学・企業・自治体関係者を招いて報告会実施

毎年1回、全校生徒・連携先等関係者・県内外の高等学校・近隣中学校を対象にSGH対象生徒による報告会を行う。

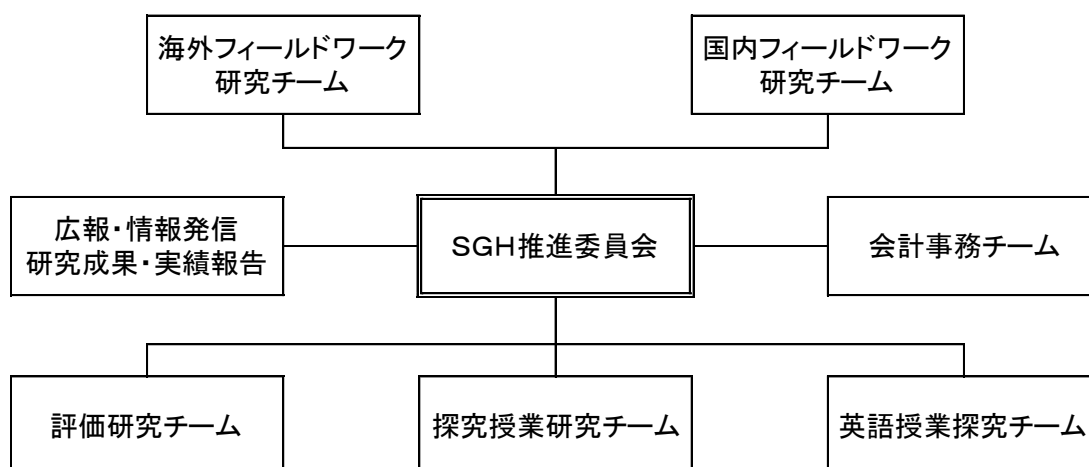
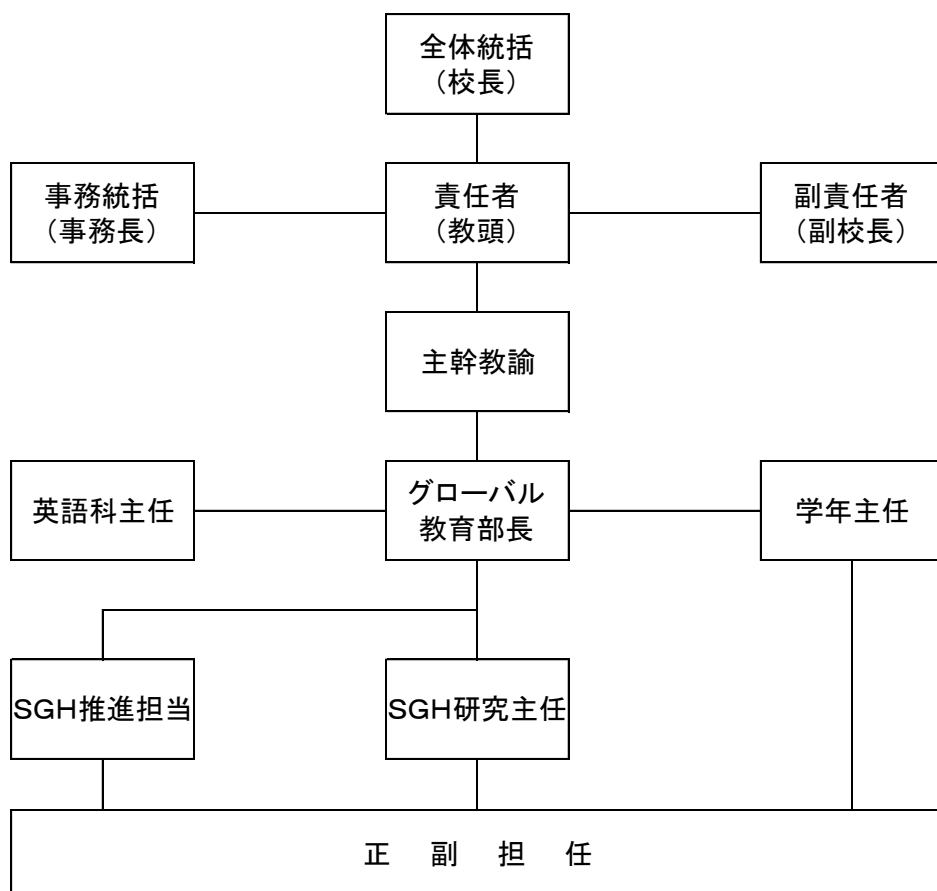
(6) 県外への研究開発内容の普及

毎年1回、県外の高等学校を対象に「グローバル探究Ⅰ～Ⅲ」の授業内容を紹介する。本校SGH事業の研究開発の成果を発信することで、他校間連携を強める。

Ⅱ 令和元年度SGH推進機構体制

1 令和元年度SGH推進機構組織図

令和元年度 SGH推進体制



2 令和元年度SGH研究開発組織及び担当者

令和元年度高知西高等学校SGH研究開発組織および担当者					
	名称	主な業務		構成員	担当
1	SGH推進委員会	・SGH方針決定 ・具体事業の決定 ・各研究チームへの指導 ・事業の評価検証	校長 副校長 教頭 事務長 主幹教諭 グローバル教育部長 教務主任 1年学年主任 2年学年主任 3年学年主任 SGH研究主任 SGH1年推進担当 SGH2年推進担当 SGH3年推進担当 各教科主任	竹村 謙 森 隆彦 中山 直之 安田 健太 谷内 俊二 岡村 幸広 南 和宏 白石 洋一 中内 貢 川本 洋史 岡村 幸広 藤澤 誉文 西村 芳江 米村 佐智子 澤松玲子・南進・村上和大・米村佐智子・川北ルナ・寺尾拓・堀地和佳・前野佐希子	◎副校長
2	探究授業研究チーム	・グローバル探究の具体授業案の作成と学年団への指導	副校長 教頭 主幹教諭 グローバル教育部長 1年学年主任 2年学年主任 3年学年主任 SGH研究主任 SGH1年推進担当 SGH2年推進担当 SGH3年推進担当 1年学年担当 2年学年担当 3年学年担当	森 隆彦 中山 直之 谷内 俊二 岡村 幸広 白石 洋一 中内 貢 川本 洋史 岡村 幸広 藤澤 誉文 西村 芳江 米村 佐智子 藤澤 誉文 西村 芳江 岡村 幸広	◎グローバル教育部長
3	海外フィールドワーク研究チーム	・海外連携組織との協議及びフィールドワークの具体内容の決定	副校長 教頭 グローバル教育部長 グローバル教育部英語科チーフ SGH研究主任 SGH1年推進担当 SGH2年推進担当 SGH3年推進担当 英語科主任 外国人教員	森 隆彦 中山 直之 岡村 幸広 川田 千砂 岡村 幸広 藤澤 誉文 西村 芳江 米村 佐智子 川田 千砂 ソニア・キンタナー クリス・ライオンズ	◎教頭
4	国内フィールドワーク研究チーム	・県内外の連携組織との協議及びフィールドワークの具体内容の決定 ・留学生との連携推進	副校長 教頭 主幹教諭 グローバル教育部長 1年学年主任 SGH研究主任 SGH1年推進担当 SGH2年推進担当 SGH3年推進担当	森 隆彦 中山 直之 谷内 俊二 岡村 幸広 白石 洋一 岡村 幸広 藤澤 誉文 西村 芳江 米村 佐智子	◎主幹教諭
5	英語授業研究チーム	・英語授業及び他教科における英語活動の具体授業案の作成と授業者への指導	教頭 英語科主任 グローバル教育部英語科チーフ 英語科担当 外国人教員	森 隆彦 川田 千砂 川田 千砂 松浦 亜季 ソニア・キンタナー クリス・ライオンズ	◎グローバル教育部英語科チーフ
6	評価研究チーム	・効果的な評価方法の研究 - ルーブリック評価表の作成 - グローバル・リーダー尺度の改善 - 振り返りシートの活用 ・記録	副校長 教頭 主幹教諭 グローバル教育部長 1年学年主任 2年学年主任 3年学年主任 SGH研究主任 SGH1年推進担当 SGH2年推進担当 SGH3年推進担当 SGH評価担当 1年学年担当 2年学年担当 3年学年担当	森 隆彦 中山 直之 谷内 俊二 岡村 幸広 白石 洋一 中内 貢 川本 洋史 岡村 幸広 藤澤 誉文 西村 芳江 米村 佐智子 藤澤 誉文 西村 芳江 岡村 幸広	◎グローバル教育部長
7	会計事務チーム	・SGH事業にかかる会計事務全般	事務長 事務職員	安田 健太 岸田 千鶴	◎事務長
8	広報・情報発信(日本語・英語)		教頭 グローバル教育部長	中山 直之、岡村 幸広	◎グローバル教育部長
9	研究成果発表会・公開授業(2回)		グローバル教育部長	岡村 幸広	
10	研究開発の成果・実績報告(文部科学省)		副校長 グローバル教育部長	森 隆彦、岡村 幸広	
11	海外リサーチ引率(オーストラリア、シンガポール、香港、台湾、インド)				
12	国内リサーチ引率				

Ⅲ グローバル探究Ⅰの取組

1 年間計画

令和元年度グローバル探究Ⅰ年間指導計画

水曜 14:40～15:30 15:40～16:30

学期	回	月日	中単元	小単元	場所/形式	内容	備考	目標/評価のポイント	招聘者等
1 学期	1	16	G探Ⅰとは	ガイダンス	アリーナ	・ G探Ⅰ 担当者が生徒全体に説明する。 ・ 生徒は、SGH事業の目的およびグローバル探究Ⅰの授業の流れを理解する。	45分授業・1時間	SGH事業への理解	
	2	4 17		仲間づくりワークショップ「コンセンサス」	各教室	・ 各ホームで合意形成ゲームを行う。 （月で選んだ宇宙船から持ち出せる20品目を合意形成により選択する） ・ 生徒は、議論することの大切さを理解する。	45分授業・2時間	協働スキル	
	3	24		地方の地域に求められていることとは	各教室	・ 各ホームでグループになり、『里山産業論』から学んだことをもとに、地方公共団体職員の立場になって、街づくりを考える。 ・ それを発表しあう。	2時間 準備:『里山産業論』、 模造紙、ポストイット、 A4用紙	情報リテラシースキル(分析・順位付け) 協働スキル	
	4	8		講演「G探Ⅰを始めるにあたり」	アリーナ	・ SGHの学びの意義及び「探究の手法と手順」について学ぶ。 ・ 講話の講師の希望を募る。	45分授業・2時間 準備:演題 30秒講師紹介ビデオ	グローバルに考えることの意義及び、研究のプロセスの理解	高知大学地域協働学部 准教授 石簡寛 氏
	5	5 22	情報収集 情報整理 ①	地域課題に取り組む人々の講話	1～7H 家庭講義室 正副担任	・ アンケートをもとに構成された各グループがそれぞれ講師のいる教室に移動し、8名の地域で活躍する企業人や行政人の話を聞き、地域の現状及び、それに対する取り組みについての情報収集をする。	2時間 準備:講話の教室1つ 各教室のプロジェクト ター等 講師案内役 ワークシート	情報リテラシースキル(収集) コミュニケーションスキル	地域で活躍される方々計10名8部屋
	6	29		講話のまとめ ①	トレ室 1～7H 家庭講義室 正副担任	・ 今後の流れと、まとめ方について学習する。 ・ 講師自身についてと、地域について、KJ法を利用して、関係図を作成する。 ・ その際に、さらに質問のあるグループは質問を挙げる。	2時間 準備:模造紙、ポストイット、 マーカー	情報リテラシースキル (KJ法、分析)	
	7	12		講話のまとめ ②	1～7H 家庭講義室 正副担任	・ 講師自身についてと、地域についての関係図を完成する。完成しているグループは、2つの関係図をさらにドッキングさせて、地域と講師の大きな関係図を作成する。 ・ グループで、最も興味のある関係や気になる関係を上位3つ挙げる。 ・ 各自が最も興味を持った関係1つについて、その関係の原因や意義、それを選んだ理由について、600字程度にまとめる。	2時間 準備:模造紙、ポストイット、 マーカー、原稿用紙、 A3用紙	情報リテラシースキル (KJ法、分析、順位付け) コミュニケーションスキル	
	8	6 19		講話のまとめ ③	1～7H 正副担任	・ 講師の話を自分のこととして考えるために「西高校で学びたいこと」「参考にしたい講師の生き方や考え方、取り組み」「自分の住んでいる地域をどう考える」の3つを、グループで考えさせる。	2時間 自分事ワーク 準備:模造紙、マーカー	情動スキル 協働スキル 転移スキル	
	9	26		講話のまとめ ④	1～7H 家庭講義室 正副担任	・ 講話についてまとめた関係図をもとに、発表の準備及び予行演習をする。3つの関係の中から、最も関心のある関係について、その関係の原因や意義、それを選んだ理由についてグループで考えたとともに、この話を聞いてグループとして考えたことをまとめる。	2時間	協働スキル コミュニケーションスキル	
	10	3		講話のまとめ ⑤	各教室	・ 発表の準備をする。 ・ 各グループで発表する。 ・ 各グループで質問を考える。	2時間	コミュニケーションスキル	
	11	7 4		国際シンポジウム	かるぽーと	・ 3年英語課題探究班と英語科の探究活動の発表と海外校の生徒とのシンポジウム。	1日		
	11	10	情報収集 情報整理 ②	県内リサーチ準備	トレ室 1～7H 家庭講義室 正副担任	・ G探Ⅰ 担当者が生徒全体に県内リサーチの注意事項を説明する。 ・ 質問する事項を作る。	2時間 準備:県内リサーチppt 質問用紙、予備の 模造紙、マーカー等	コミュニケーションスキル 振り返りスキル	
	2 学期	8 23		県内リサーチ	県内8か所	・ 講話の講師にまとめを発表するとともに、疑問等について答えてもらう。 ・ 地域で活躍する方々にインタビューし、その地域の現状とそれに対する取り組みを探究する。	1日 準備:筆記用具、手帳 質問用紙、発表資料 等	情報リテラシースキル (収集) コミュニケーションスキル	

学期	回	月	日	中単元	小単元	場所/形式	内容	備考	目標/評価のポイント	招聘者等
2 学 期	12	8	28	情報収集 情報整理 ②	県内リサーチまとめ	トレ室 1～7H 家庭講義室 正副担任	・ G探 I 担当者が生徒全体に県内リサーチのまとめ方 及びテーマ設定について説明する。 ・ 各講話グループで、リサーチのまとめを行う。	1時間 今後のまとめの説明 1時間 リサーチのまとめ	情報リテラシー スキル (分析) 協働スキル	
	13		13	情報の分析 仮説の設定	課題の発見	1～7H 家庭講義室 正副担任	・ まとめたものをもとに、課題を抽出する。 ・ 課題同士の関係性やそれらを解決するための方策 を考える。	2時間	情報リテラシー スキル (分析) 協働スキル	
	14	9	18		仮説の設定①	各教室	・ 県内リサーチのお礼状を作成する。 ・ どの解決案を採用するか考える。	2時間	情報リテラシー スキル (仮説の設定等) 協働スキル	
	15		25 26		仮説の設定②	各教室	・ タブレットを使いながら、地域の状況やインタビュー した方の情報を付け加えて、「私たちの地域創生案プラン」 を完成する。 ・	1時間(45分) 準備:まとめの資料 タブレット	情報リテラシー スキル (仮説の設定等) 協働スキル	
	16		2		東京リサーチの企業 調べ、選択 中間発表資料の作 成	各教室	・ 東京リサーチの企業を調べ、行き先の候補を決定す る。 ・ 終わった班は中間発表に向けて、プレゼン資料を作 成する。	1時間 東京リサーチ企業決 め 1時間 発表資料作成	情報リテラシー スキル 協働スキル	
	17	10	23	ストーリーの 作成 仮説の強化	中間発表①	1～7H 家庭講義室	・ グループの地域創生モデル案の構想について中学1 年生にプレゼンテーションする。質疑応答あり。	1時間 準備 1時間 発表会	コミュニケーシ ョンスキル 批判的思考	
	18		30		大阪・海外リサーチ の発表	トレ室	・ 大阪リサーチや海外リサーチを通して明らかになっ たことに加え、それらを今後の探究にどのように活かそ うとするのか、ビジョンを発表する。 ・ 発表に対する質問や、意見をまとめる。ものづくり総 合技術展の組織・企業調べをする。	1時間 大阪リサーチ、海外リ サーチ発表会 1時間 発表会での質問の振 り返し	情報スキル 転移スキル	高知大学地域協 働学部 准教授 石筒寛 氏
	学校行事③		8		平成31年度第8回も のづくり総合技術展	ちばさんセ ンター	・ 高知県内での企業の取り組みを探究し、地域創生 案に生かす。 ・ 東京リサーチの予行演習をする。	3時間	コミュニケーシ ョンスキル 情報スキル	
	19		13		東京リサーチ訪問企 業事前調査	各教室	・ 東京リサーチの行き先について調べ、事前質問を作 成する。 ・ 東京リサーチの行程表を作成する。	2時間 資料作成	情報リテラシー スキル 協働スキル	
	20	11	20	ストーリーの 作成 仮説の強化	地域創生モデル案 の作成1	各教室	・ 東京リサーチに向けて、企画書の作り方の資料等を もとに、どのようなストーリーを作れば良いかを考える。 ・ 発表ストーリーを考え、東京リサーチの資料を作成 する。	2時間 資料作成	情報リテラシー スキル 協働スキル	
	21		27		地域創生モデル案 の作成2	各教室	・ 東京リサーチの資料を作成する。	2時間 資料作成	情報リテラシー スキル 協働スキル	
	22		11		地域創生モデル案 の作成3	各教室	・ 東京リサーチの資料を作成する。	1時間 資料作成 1時間 早くできている班は中 間発表	コミュニケーシ ョンスキル 情報リテラシー スキル 協働スキル	
	23	12	18		中間発表② 東京リサーチに向け て	各教室	・ ある程度資料が完成しつつある班から、発表をし、 評価基準をもとにアドバイスをする。	2時間 準備:各ホームにプロジェク ターと映写用シート	コミュニケーシ ョンスキル 情報リテラシー スキル 協働スキル	
3 学 期	24		15	地域創生モ デルを考 える	地域創生モデル案 完成	各教室	・ 地域創生案を完成させる。	2時間	コミュニケーシ ョンスキル 批判的思考ス キル	
	25	1	22		地域創生モデル案 発表リハーサル	各教室	・ 発表資料を印刷し、スカイネットに保存する。 ・ 終わった班同士で発表のリハーサルをする。	2時間 準備:各ホームにプロジェク ターと映写用シート	コミュニケーシ ョンスキル 批判的思考ス キル	
	学校行事④		30	東京リサ ーチ	グローバル企業訪 問	修学旅行	・ グループの地域創生モデル案のプレゼンテーション を行う。 ・ 企業が社会をどのように捉え、その中でどのような 活動を行っているのかを理解する。	食関連企業 公社・商社等 研究機関等	コミュニケーシ ョンスキル 批判的思考ス キル	
	26		5	地域創生モ デルを考 える	地域創生モデル案 のブラッシュアップ	各教室	・ グローバル企業等の訪問から得られたことを、地域 創生モデル案に反映する。 ・ 地域創生モデル案をまとめ、発表の準備を行う。	2時間	情報リテラシー スキル 協働スキル コミュニケーシ ョンスキル	
	27		12		ポスターセッション の準備及びリハーサル	アリーナ 各教室	・ 各グループでポスターセッションのリハーサルを行 う。	2時間	コミュニケーシ ョンスキル 批判的思考ス キル	
	学校行事⑤		13	グローバル 探究 I の総 括	ポスターセッション	アリーナ トレ室	・ 午前は2年生の代表グループの発表を見る。 ・ 午後は1年の各グループが地域創生モデル案を発 表する。発表者に対する質問を行う。 3回発表→入替3回発表	13:00～14:45	コミュニケーシ ョンスキル 批判的思考ス キル	大学教員 地域で活躍され る方々
	28		19		振り返り 次年度に向けて	トレ室	・ 来年度のガイダンスを行う。 ・ グローバル探究 I の年間の振り返りを行う。	2時間	振り返りスキル	

2 趣旨及び目的

「グローバル探究Ⅰ」（総合的な学習の時間）で、「生産流通」、「六次産業」、「食と健康」、「食と観光」のサブテーマの下、グループで事例を収集し、調査・探究活動を行う。これらの活動を通して課題発見・課題解決の仕方等を学び、課題発見力や創造的思考力を養う。

リサーチ活動や課題発見のためのフィールドワークを国内外および海外で行い、それらの活動を参考に「食を活かした地域創生モデル」を作成することを通して、思考力・判断力・表現力を養う。

3 取組内容

(1) 1学期

① 第1回：学年全体でのガイダンス

グローバル探究の3年間の授業の流れを説明するとともに、グローバル探究Ⅰの授業の目的、流れなどの概要を説明した。また、グローバル・リーダーとはどのような人間なのかも考えた。



② 第2回：仲間づくりワークショップ「コンセンサス」

人間関係作りをするとともに、合意形成・協力・討議の重要性を理解させる目的で、コンセンサスゲームを各ホームで実施した。

「コンセンサスゲーム ～月～」を用いて、生徒はグループ討議を通じてコンセンサスを行うと最適解に近づくことを実感した。



③ 第3回：地方の地域に求められていることとは

入学前の課題であった『里山産業論』を活用し、今後の地域創生モデル案作成の練習を行った。各ホームでグループになり、『里山産業論』から学んだことをもとに、地方公共団体職員の立場になってまちづくりを考え、それを発表しあった。



④ 第4回：講話「G探Ⅰにあたり」

（講師 高知大学 地域協働学部 准教授 石筒 寛 氏）

高知大学 地域協働学部 准教授 石筒 寛 氏を招聘し、「グローバル」とはということなのか、「探究」とはということなのか、ということを中心にSGHの学びについての講演をしていただいた。また、講演をしてもらう県内8か所の地域の方の紹介もしていただき、それをもとに、どの地域の講演を聞くか生徒が選択した。



⑤ 第5回：講話「地域課題に取り組む人々の講話」

（講師 地域で活躍する方々10名）

アンケートをもとに各ホーム5人で構成された8班に分かれ、8名の地域で活躍する企業人や行政人の講話を聞き、それに対して質問をした。地域の現状及び、それに対して地域で活躍されている人はどのようなことを考え、どのような取組をしているのかについての情報収集を行った。次ページの表が、講師一覧である。

⑥ 第6～10回：講話のまとめ

生徒全体に講話のまとめ方及びまとめたものの発表の仕方や評価について説明をした。

生徒は講師自身と地域とについて、KJ法を利用して関係図を作成した。完成後、二つの関係図をさらにドッキングさせて、地域と講師についての関係図を作成した。各班で、最も興味のある関係や気になる関係の上位三つを挙げた。それをもとに、各自が最も興味を持った関係一つについて、その関係の原因や意義、それを選んだ理由について600字程度にまとめ、発表しあった。



1 龍河洞 CAFE AYAM 代表 白鳥 恵利子 氏 株式会社龍河洞みらい マーケティングユニットマネージャー 中村 大輔 氏	2 久礼 道の駅なかとさ 取締役 駅長 高橋 大弐 氏	3 梶原 梶原町役場 産業振興課 立道 斉 氏	4 土佐山 特定非営利活動法人 土佐山アカデミー 事務局長 吉富 慎作 氏 ディレクター 佐竹 祐次郎 氏
			
5 香北 株式会社わらびの 代表取締役 畠中 智子氏	6 須崎 有限会社丸共味噌醤油醸造場 4代目 ママ女将 竹中 佳生子 氏 特定非営利活動法人 暮らすさき 事務局長 大崎 緑 氏	7 大野見 大野見七面鳥生産組合 組合長 松下 昇平 氏	8 日高 特定非営利活動法人 日高わのわ会事務局 事務局長 安岡 千春 氏
			

⑦ 第11回：県内リサーチの準備

生徒全体に県内リサーチの注意事項を説明した。その後、生徒はホームに戻って、インタビューで聞くことをまとめたり、タブレットPCで地域のことについて調べたりして、県内リサーチの準備を行った。



(2) 2学期

① 学校行事：県内リサーチ

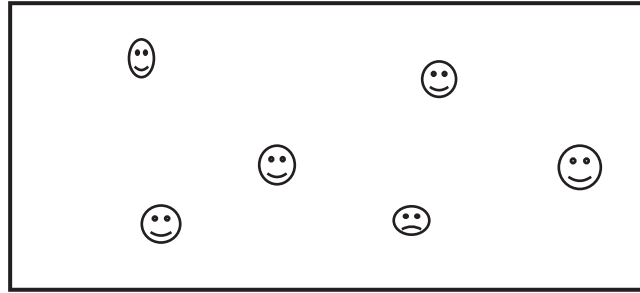
講話の際にお世話になった講師の方に、地域の方々に呼び掛けてもらい、講師の方々が活躍する8つの地域でそれぞれ、フィールドワークやインタビューを行い、地域の課題についての情報を収集した。8つの地域を合わせると、総勢51名の方にインタビューをさせていただいた。

② 第12回：県内リサーチのまとめ

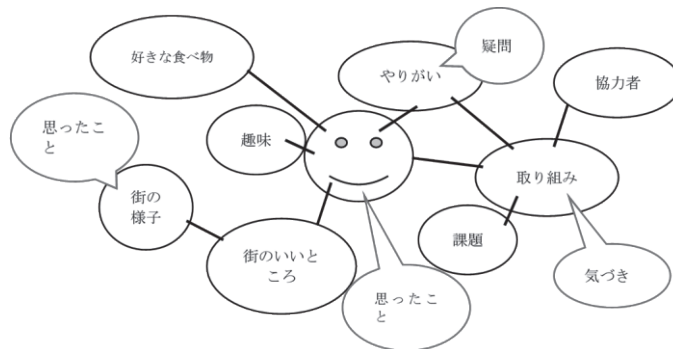
県内リサーチのまとめかたについて生徒全体に説明をした。その後、まとめ作業を行った。生徒は、県内リサーチの際に撮影させていただいたゲストスピーカーの方々の写真を切り取り、模造紙に貼り、そこにインタビューで獲得した情報をマッピングしていった。マッピングの手順は以下のとおり。



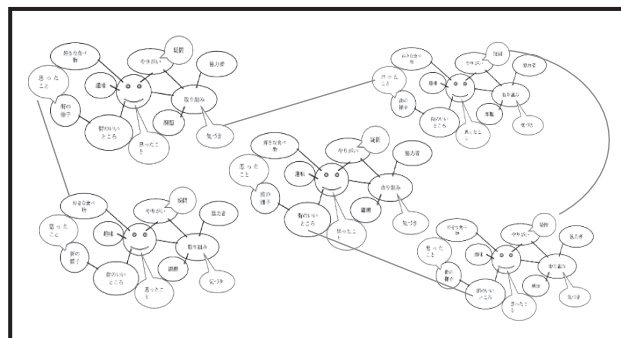
- a 模造紙に次のように、一人一人の間隔をあけて貼り付ける。



- b 一人一人は、些細な情報でも良いので、どんどん書き込み、写真を中心にマッピングをする。気付きや思ったこと、新たな課題や疑問は色を変えて記入する。



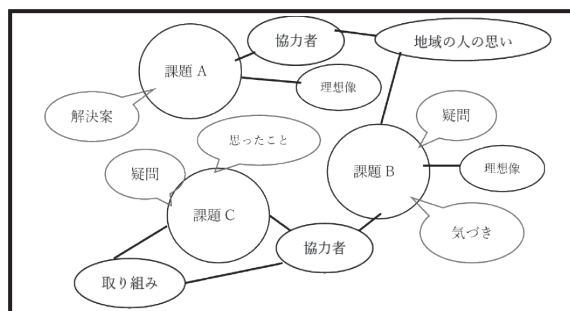
- c インタビューを全員分作成したら、ゲストスピーカー同士の関係も探してみる。最後に、空いたところに思ったことや気付いたこと、課題などをメモして終わる。



③ 第13回：課題の発見

生徒は、前回まとめたものをもとに地域の課題を抽出した。この抽出した課題を中心にして、さらに、マッピングを行い、課題同士の関係性やそれらを解決するための方策を考えた。まとめの手順は以下のとおり。

前回マッピングから課題のみを抽出し、その課題のつながりやその課題について感じたことや考えたこと、疑問、解決方法、解決されたらどうなるかなどを書き込む。



④ 第14～15回：仮説の設定

生徒は、県内リサーチのお礼状を各自 600 字で作成し、Classi に入力した。

また、マッピングから出てきた地域の課題について、どの課題を解決したいのか明らかにした。それについて次の図のようなデザイン思考フレームワークを利用して、解決策を自分事とするとともに、具体的にどのように解決をしていくか考えた。



私たちの地方創生案プラン No. _____

班			
課題 (What)			
誰に働きかける? (Who)		どうして? (Why)	
・具体的に何を する? (Do) ・必要な ものは? (人・物・ 場所・など…)	Do		必要なもの
こんな状態が			
こんな状態にな るはずだ			
これ(Do)を行う 必要性は?			

⑤ 第16回：東京リサーチの企業決め

生徒は、東京リサーチで訪問する企業について、タブレットPCを利用して調べ学習をして訪問する企業の候補を決定するとともに、それをClassiに入力した。本年度はIT関連の企業を訪問先として増やすことができ、生徒の興味関心に沿った形での選択が昨年度よりもできるようになった。



⑥ 第17回：中間発表

生徒は、「講話～県内リサーチのまとめ～仮説の設定」までの内容を、中学1年生に発表をした。目標は、自分たちの探究の過程を振り返るとともに、中学1年生という自分たちよりも知識や経験の少ない聞き手にも、しっかり理解してもらえるような発表をする力を身に付けることであった。

教員側は、以下の発表の内容を提示した。

ア メンバーと発表の見どころの紹介。

イ 今の地域創生案を設定するまでのリサーチ活動の流れとそこで獲得した情報や学び。



- ウ その情報をどのように整理し、その結果としてどのようなこと（地域やそこで暮らす人々の状況等）が分かってきたか。
- エ そこからどのような課題が生じているか。
- オ それらの課題の中で解決したいものはどれか、またその理由。
- カ この課題を今後どのように解決しようと考えているか、「私たちの地域創生プラン」のフレームワークを使用して考えたことの説明。具体的に今後どのようにしてこの地域創生案を説得力のあるものにしていくかの説明。
- キ 最後の挨拶。

⑦ 第18回：大阪・海外リサーチ報告会

体育館アリーナで、大阪リサーチおよび台湾リサーチの参加生徒が成果発表を行った。発表時間は各グループ10分程度とした。保護者へも発表会の案内文を配付した。大阪リサーチで学んだこと、台湾リサーチの現地リサーチおよび探究の進捗状況についての報告会を行うことによって、地域以外での探究活動を通して得られた知識や考え方、スキルを共有することを目指した。聞き手の生徒は、発表を聞いて学んだことや感想を、Classiに入力した。講師として高知大学 地域協働学部 准教授 石筒 寛 氏を招聘し、講評をいただいた。



⑧ 第19回：東京リサーチ訪問企業事前調査

生徒は、東京リサーチの訪問先について調べ、各班訪問先企業について7つの事前質問を作成した。また、宿泊ホテルから訪問先企業へどのように移動するかを示す行程表を作成した。



⑨ 第20～23回：地域創生モデル案の作成

生徒は、地域創生モデル案の具体化を図るとともに、東京リサーチに向けてのプレゼンテーション資料の作成を行った。途中、教員への中間発表を交えながら、具体的なストーリーを作成していった。提示された東京リサーチでの発表のループブックをもとに、発表資料及び原稿を作成していった。ループブックは、以下のものである。



発表の評価基準

【発表の姿勢】

発表の態度	
3	発表原稿を ほとんど見ず、自分の言葉で 聴衆に 聞こえる音量 で、聴衆の方を見ながら 自信をもって 発表している。
2	発表原稿を 見ることもあるが、割と自分の言葉で 聴衆に 聞こえる音量 で、聴衆の方も見ながら発表している。
1	発表原稿を 結構見ているが 、聴衆に 聞こえる音量 で、発表している。
0	発表原稿 ばかり見て、声も小さい 。

【説明の方法】

用語の説明	
3	高知県の内容や専門的な用語について、分かりやすく言い換えたりして、高知県出身ではない人や初めて話を聞く人にも、 完璧に理解できるように説明できている 。
2	高知県の内容や専門的な用語について、分かりやすく言い換えたりして、高知県出身ではない人や初めて話を聞く人にも、 大体理解できるように説明できている 。
1	高知県の内容や専門的な用語について、分かりやすく言い換えたりすることが あまりできておらず 、高知県出身ではない人や初めて話を聞く人に、 理解しづらい説明になっている 。
0	高知県の内容や専門的な用語について、分かりやすく言い換えたりすることが 全くできておらず 、高知県出身ではない人や初めて話を聞く人には、 理解できない説明になっている 。

図表や絵の利用	
3	プレゼン資料で <u>図表や絵、写真などを十分に活用し</u> 、地域の場所や現状、今後の取組等について <u>分かりやすく示す</u> とともに、その <u>図表や絵、写真などについても説明がしっかりできている</u> 。
2	プレゼン資料で <u>図表や絵、写真などを活用し</u> 、地域の場所や現状、今後の取組等について <u>大体分かりやすく示す</u> とともに、その <u>図表や絵、写真などについても説明ができている</u> 。
1	プレゼン資料で <u>図表や絵、写真などがあまり活用できておらず</u> 、地域の場所や現状、今後の取組等について <u>あまり分かりやすく示されず</u> 、その <u>図表や絵、写真などについても説明があまりされていない</u> 。
0	プレゼン資料で <u>図表や絵、写真などが活用されていないため</u> 、地域の場所や現状、今後の取組等について <u>分かりやすく示されず</u> 、その <u>説明も不十分</u> である。
学問的誠実性の厳守	
3	引用してきた図表や絵には <u>全て</u> 引用を示すとともに、説明の中でも <u>全て</u> の引用部分で「〇〇によると」等の言い方ができるとともに、 <u>全ての</u> 参考文献等が最後に示されている。
2	引用してきた図表や絵には <u>大体</u> 引用を示すとともに、説明の中でも <u>大体</u> の引用部分で「〇〇によると」等の言い方ができるとともに、 <u>大体</u> の参考文献等が最後に示されている。
1	引用してきた図表や絵に <u>あまり</u> 引用が示されておらず、説明の中でも <u>あまり</u> 引用部分での「〇〇によると」等の言い方が <u>できなく、あまり</u> 参考文献等が最後に <u>示されていない</u> 。
0	引用してきた図表や絵には引用が <u>示されてなく</u> 、説明の中でも引用部分で「〇〇によると」等の言い方が <u>できておらず</u> 、参考文献等も最後に <u>示されていない</u> 。
説明の論理的な構成	
3	地域創生モデル案について、目次を作成し、目次に沿って <u>完全に</u> 論理的に説明が展開できている。
2	地域創生モデル案について、目次を作成し、目次に沿って <u>大体</u> 論理的に説明が展開できている。
1	地域創生モデル案について、目次が <u>あいまいで、あまり</u> 論理的に説明が展開 <u>できていない</u> 。
0	地域創生モデル案について、目次を作成 <u>できておらず</u> 、論理的に説明が展開 <u>できていない</u> 。

【説明の内容】

地域の課題はどのようにして浮かび上がってきたのか	
3	地域の課題がどのように出てきたのかについて、そこまでのリサーチ活動の流れ（講演やインタビューを通してどのような情報を得、それをどのように整理し、その結果としてどのようなことが分かってきたのか）を <u>丁寧に説明できている</u> 。
2	地域の課題がどのように出てきたのかについて、そこまでのリサーチ活動の流れ（講演やインタビューを通してどのような情報を得、それをどのように整理し、その結果としてどのようなことが分かってきたのか）を <u>大体説明できている</u> 。
1	地域の課題がどのように出てきたのかについて、そこまでのリサーチ活動の流れ（講演やインタビューを通してどのような情報を得、それをどのように整理し、その結果としてどのようなことが分かってきたのか）を <u>あまり説明できていない</u> 。
0	地域の課題がどのように出てきたのかについて、そこまでのリサーチ活動の流れ（講演やインタビューを通してどのような情報を得、それをどのように整理し、その結果としてどのようなことが分かってきたのか）を <u>全く説明できていない</u> 。
地域創生モデル案が高校生のできることになっている	
3	地域の課題の解決の方法が、自分たち高校生か地域の高校生が実施出来ることに <u>完全</u> になっている。
2	地域の課題の解決の方法が、自分たち高校生か地域の高校生が実施出来ることに <u>大体</u> になっている。
1	地域の課題の解決の方法が、自分たち高校生か地域の高校生が実施出来ることに <u>あまり</u> なっていない。
0	地域の課題の解決の方法が、自分たち高校生か地域の高校生が実施出来ることになって <u>いない</u> 。
地域創生モデル案を実施すると地域がどのように変化して行くのかを説明できている	
3	地域の解決策を行うことによって、地域がどのような地域になっていくかが <u>明確</u> に示されている。もしくは、地域の理想の姿が <u>明確</u> に描かれている。
2	地域の解決策を行うことによって、地域がどのような地域になっていくかが示されている。もしくは、地域の理想の姿が描かれている。
1	地域の解決策を行うことによって、地域がどのような地域になっていくかが <u>あまり</u> 示されて <u>いない</u> 。もしくは、地域の理想の姿が <u>あまり</u> 描かれて <u>いない</u> 。
0	地域の解決策を行うことによって、地域がどのような地域になっていくかが示されて <u>いない</u> 。もしくは、地域の理想の姿が描かれて <u>いない</u> 。

(3) 3学期

① 第24～25回：地域創生モデル案発表リハーサル

生徒は、東京リサーチの発表資料を各班で完成させ、発表資料を共有フォルダに提出するとともに、手持ち原稿を印刷した。その後、余裕のある班は、各班で東京リサーチに向けて、空き教室などを利用しながら発表のリハーサルをした。



② 東京リサーチ（詳細は後述）

修学旅行の4日目の午後に、生徒は訪問学習を実施した。訪問企業による講義やそれに対する質疑応答及び班で作成した地域創生モデル案の発表を行った。

③ 第26回：地域創生モデル案のブラッシュアップ

生徒は、東京リサーチで得られたことを参考に地域創生モデル案のブラッシュアップを行った。また、配付されたポスター発表のための原稿作成の手順や注意点を説明したレジュメを参考にして、発表資料の精選や発表原稿の再構成を行った。



④ 第27回：ポスターセッションの準備及びリハーサル

生徒は体育館アリーナにて、作成したプレゼンテーション資料をボードに貼り付け、ポスターセッションの準備を行った。それができたら、本番の場所に分かれてリハーサルを各班1回行った。

⑤ 第28回：令和元年度SGH成果発表会

午前中、1年生は2年生代表グループのステージ発表を見た。午後は体育館アリーナとトレーニング室の2か所に分かれて前半29グループ、後半29グループで地域創生モデル案の発表をポスターセッション形式で行った。時間設定は発表8分、質疑応答4分、振り返りシート記入および移動に3分で、各グループ合計3回ずつ行った。



⑥ 第29回：振り返り、次年度に向けて

生徒全体に本年度の取組を説明し、振り返りをするように指示をした。生徒はホームに戻って、1年間の授業についての総括をClassiに入力した。

4 成果と課題

(1) 成果

- ・新1年生の入学前に出している『里山産業論』の活用について

昨年度までは、入学までに本を読んで、ワークシートにまとめるだけであったが、本年度は授業でのグループ協議の練習に取り入れることができた。

- ・職業人講話・県内リサーチの位置付けについて

職業人講話を5月に実施するようにし、県内リサーチは職業人講話で話をしてもらった地域のフィールドワークやそこでのインタビューを通して、地域の情報を収集する機会とした。それによって地域創生モデル案を考えるために必要な地域に関する情報の収集や情報の整理をしっかりと行うことができ、地域での人々のつながりや地域の課題との関係性がマッピングを通じて明らかになった。

- ・中間発表について

本年度は、地域の方の講話のまとめ、講話からインタビューまでのまとめ、プレゼンテーション資料完成の三つの時期で、中間発表を行った。それぞれ、クラスの生徒、中学1年生、担当教員を対象として発表をし、どのような対象に対しても対応するような発表を心掛けさせるようにした。

また発表に関しては、パフォーマンス評価を取り入れ、どのように発表すればよいのかに関して

も、生徒にしっかり意識をさせて発表させることができたため、多くの班で事実に基づく論理的な説明やパフォーマンスのできる発表ができた。

- ・東京リサーチについて

運営指導委員の合田氏にご協力をいただき、本年度東京リサーチで協力いただける企業を8社増やすことができた。どの企業も大変協力的に関わっていただき、新たに事前学習でテレビミーティングを行っていただける班もあった。また、食関連だけでなく多様な生徒の興味関心に対応できるようになってきた。

- ・大阪リサーチについて

本年度は、窓口となっていた方が転勤となり、サントリーの訪問は叶わなかったが、代わりに江崎グリコとのつながりができ、本年度も1日目は県外での高知県の取組、地方の状況を、2日目は時代の先端を行く企業の取組等を学習することができた。

- ・海外リサーチについて

台湾リサーチは、例年通り台湾でのリサーチ活動を地域創生モデル案に生かすことができた。香港リサーチは、香港の情勢不安により実施が不可能になったが、交流予定であった現地のルター高校とは、テレビミーティングを行うことができ、そこで互いの学校や地域のことについての情報交換や、それについての意見交換を行うことができた。

- ・各種プレゼンテーション大会について

本年度も1年生が積極的に県外、海外のリサーチ活動やプレゼンテーション大会への参加を希望したことで、選考会を多く開催することができた。また、その中で積極的にプレゼンテーションをする多くの生徒の姿が見られた。

- ・成果発表会について

各地域で講師をしていただいた方々を招き、各発表にコメントをいただいた。今後も地域で活動したら面白くなりそうな発表を選んでいただいた。

(2) 課題

- ・職業人講話・県内リサーチ・東京リサーチについて

この1年間で訪問させていただいた県内8地域で、総勢51名の地域の方にお世話になった。各地域1名の方にコーディネートをしていただいたが、それでも県内リサーチの計画を立てるまでのやり取りが非常に煩雑になった。

同じく、東京リサーチに関しても、組織・企業を増やすと必然的にリサーチ当日に向けての打ち合わせと、リサーチ後の振り返り作業で、やり取りが煩雑になってくる。

県内リサーチ担当や東京リサーチ担当などの役割分担を行いながら、実施していかなければならない。

また、今後も、東京リサーチの質の向上のためにも地方創生に関わっている組織・高い志を持った組織・企業、時代の最先端を行く組織・企業等、東京リサーチで協力していただける組織・企業を増やしていきたい。東京リサーチでの訪問先が、生徒の探究テーマと乖離している状況を解消するように、新たな訪問先の開拓を継続的に行う。

- ・大阪リサーチについて

どうしてもタイトなリサーチ時間設定になってしまうことや、帰着時間が遅くなってしまうこともあり、大阪に行かなければ出来ない取組に精選することや、行った際のリサーチ活動をより有意義なものにするための事前学習を充実させること等を図っていきたい。

- ・海外リサーチについて

引き続き香港は中国との関係で情勢不安が続くことが考えられる。また、台湾も総統選挙で中国との関係が議論の中心に来ており、今後の情勢が心配される地域である。今後は海外リサーチ活動の地域を検討することが必要になるのではないかと考えられる。

- ・各種プレゼンテーション大会について

生徒のモチベーションをあげ、取組の目標の一つにするためにも、1年生のスタート当初に、どのようなプレゼンテーション大会があり、そこではどのような力を習得しておかなければならないか等をきちんと説明することが必要であると感じた。

Ⅳ グローバル探究Ⅱの取組

1 年間計画

回	月	日	中単元	小単元	場所・形式	内容	備考	つきたい力	招聘者等	TA
1		11		G探究Ⅱ 授業ガイダンス	トレ室にて 一斉講義	グローバル探究Ⅱにおける探究活動で養いたい力、年間計画と評価表の提示を行う。探究と論文の関係をガイダンスする。	45分授業	目的を理解する力(課題発見力) 全体を見通し年間の計画をする力(思考性)	なし	
2	4	19	ガイダンス	専門家の体験を知る。	アリーナにて講演	国際貢献がどういふものかを、SDGsと世界の問題と実際の国際支援までの具体事例を講演してもらい、知識を得るとともに、志をつける。振り返り(気持ちの部分)と探究分野のアンケートを取る。(グループ分けするためのアンケートとなる。)	この探究を行いたい諸問題の分野によってグループ分けを行う。	知識を得る(課題発見力/思考性)	高知大学国際連携推進センター 新納宏先生	
3		10		アイスブレイク/SDGsの背景にある問題探し	新グループによる各教室の一斉授業 タブレット、コンピューター室使用	クラスの新メンバーで、どの問題解決に取り組むのか決定させる。〈前半40分〉SDGsの興味ある内容(春休みの課題)を用いて、興味のある問題について交流する。問題に興味がない理由を述べ、問題の説明をし、質問を受ける。〈後半70分〉SDGsのさらに169のターゲットを提示し、より具体的にどのターゲットに取り組みたいか話し合い、ターゲットが決まったら、その目標が立てられた背景となる具体的な社会問題(社会現象)を調べていく。	各クラス4・3人1グループ	現状を分析し、目的や課題を明らかにする(課題発見力/思考性) グループ内での主体性(主体性) 他者の指摘から自己改善(自己管理能力)		
4	5	17		問題の絞り込みと具体化①	各クラス タブレット、図書室、コンピューター室を利用して調べ活動	具体的な社会問題(現象)がどのようなものであるのかを整理する。どこで発生しているのかは、問題について触れてある書籍、論文、インターネットの情報の引用元の公的なデータを検索する。いつ、誰が、何をしているのか、ワークシートを書き込みながら、具体的に調べていく。(その時、事実整理シートを用いて、出典の記録を残していくようにする。)		現状を分析し、目的や課題を明らかにする(課題発見力/思考性) グループ内での主体性(主体性) 他者の指摘から自己改善(自己管理能力)	アドバイザー 本校教諭 教科の特性を生かす	
5		31	課題設定	問題の絞り込みと具体化②	各クラス 定義を調べたりもして、授業の最後に自分たちが何の問題に取り組もうとしているのかを、具体的に言いかえる。	辞書やインターネット、先輩の論文を活用し、問題の定義を調べたりもして、授業の最後に自分たちが何の問題に取り組もうとしているのかを、具体的に言いかえる。		目的に合わせた情報の選択(情報活用力) グループ内での主体性(主体性)	アドバイザー 本校教諭 教科の特性を生かす	
1学期中間試験										
6		14		問題の絞り込みと具体化③	6限前時間の続き 7限発表の準備の仕方と目指すもの	〈6限〉問題の原因がどこにあるかを調べる。〈7限〉6月28日の途中発表に向けて、パワーポイントのスライドの作り方、口頭発表の仕方、目指すべき発表の姿を説明。	担当者会議では、論文のアウトラインと今回作成するスライドの順は一致しないことを説明しておく。	現状を分析し、目的や課題を明らかにする(課題発見力/思考性) 目的に合わせた情報の選択(メディアリテラシー/情報活用力) 個人での主体性(主体性)		
7	6	21	課題設定	論理的な発表に向け(発表準備)①	各クラスにて 発表資料作成	スライドの作成、原稿の作成、発表練習。	発表はグループ内で分担してよい。45分授業	目的に合わせた情報の選択(メディアリテラシー/情報活用力) 論理的な文章を書く力(論理的な構成/発表資料) グループ内での主体性(主体性) 個人での主体性(主体性)		
8		28		論理的な発表に向け(途中報告)②	各クラスにて 口頭発表	探究過程の途中経過を口頭で発表(スライド発表)現在までに調べて分かったところまでをまとめて発表する。進んでいる班は、問題が何で、その原因が何かまでが発表できる。 大学教員には、どこが調べ足りないのか、またどこを調べればそれが分かるのかを助言いただく。→アクションプランの参考	グループで口頭発表3分以内、質疑応答2分以内。	情報源の明記(メディアリテラシー/情報活用力) 目的に合わせた情報の活用(メディアリテラシー/情報活用力) 説得力のある表現力(発表態度) 論理的発表(発表態度) ディスカッションする力(発表態度) 他者の指摘から自己改善(自己管理能力)	高知大学大学教育創造センター 堀崎俊成先生 高知大学人文社会科学部 岩佐和幸先生 教育学部 森田美佐先生 佐竹泰和先生 農林海洋科学部 田中壮太先生 森牧人先生 高知工科大学 経済・マネジメント学群 中村直人先生 上條良夫先生	
学校行事	7	4		国際シンポジウム	県民文化ホール	3年英語課題探究班と英語科の探究活動のオール発表とタレマー校生とのシンポジウム		語学力 質疑応答する力		
9	7	5	アクションプラン計画	アクションプランの具体的な計画①	各クラス タブレット、コンピューター室を利用して調べ活動	6限22日にもあった助言から内容をさらに調べ進める。 7限はアクションプランの計画説明(実行時のルール)と、計画を練る。自分たちは何を明らかにするために、何を調べれば良いのかを議論する。	プランが決まった班から、クラス担当の許可を取り、電話をかけても良い。	現状を分析し目的や課題を明らかにする力(課題発見力/思考性) グループ内での主体性(主体性) 他者の指摘から自己改善(自己管理能力)		
1学期末試験										
夏季休業 アクションプランの実行										
10	8	30	リサーチ結果分析	データ処理と分析	各クラス タブレット、図書室、コンピューター室を利用して調べ活動	得たデータ整理とその考察を話し合い、次の問いを立てる。		目的に合わせた情報の活用(メディアリテラシー/情報活用力) 情報処理力(メディアリテラシー/情報活用力) グループ内での主体性(主体性) 個人での主体性(主体性)		
11	9	6		アクションプラン後の方向相談	ブース形式で専門分野の先生に相談	リサーチして得たデータについての解釈や、探究内容の方向性、新たな情報源について、専門的な相談をする。	専門分野別に、相談したい講師の希望を取り、加えて、生徒の質問をあらかじめ返す。	説得力のある表現力(発表態度) 論理的発表(発表態度) ディスカッションする力(発表態度) 他者の指摘から自己改善(自己管理能力) 原因を解決する力(問題解決力/思考性)	高知大学教育学部 森田美佐先生 人文社会科学部 岩佐和幸先生 農林海洋学部 永田信治先生 小野寺健一先生 飯田光和先生 松川 和嗣先生 鳴門教育大学教育学部 近森 憲助先生	
12		20	解決策の提案	解決策の提案にむけて	6時間目アリーナで一斉説明 7時間目各クラス タブレット、図書室、コンピューター室を利用して調べ活動	前半 探究過程で、探究が困難になっているポイントについて全体に向け解説を行う。 後半 前回の授業で、各専門家にもらったアドバイスを整理し、再度、自分たちの探究へ落とし込む。		説得力のある表現力(発表態度) 論理的発表(発表態度) ディスカッションする力(発表態度) 他者の指摘から自己改善(自己管理能力) 原因を解決する力(問題解決力/思考性)		
13		27		解決策の提案にむけて	各クラス タブレット、図書室、コンピューター室を利用して調べ活動	解決策として取り組んだ事例を参考に、解決策も考え試みる。		原因を解決する力(問題解決力/思考性) 新しい価値を創造できる力(創造的思考力/思考性) グループ内での主体性(主体性) 個人での主体性(主体性)		

14	10	4	中間発表準備	中間発表にむけての準備	各クラス タブレット、コンピューター室を利用して準備	パワーポイントのスライドを直しながら、原稿作り、発表練習。		書式、書体の適切性(論文作成) 新しい価値を創造できる力(創造的思考力/思考性) グループ内での主体性(主体性) 個人での主体性(主体性)		
2学期中間テスト										
15		18	中間発表	進捗状況の整理	各クラスにて 口頭発表	現時点での探究の進捗状況をスライドを用いて口頭発表	グループで発表。6月22日使用のパワーポイントに付け加える。	論理的な構成(発表資料) 分かりやすいデザイン(発表資料) 説得力のある表現力(発表態度) 論理的発表(発表態度) ディスカッションする力(発表態度) 他者の指摘から自己改善(自己管理能力)	高知大学地域協働学部 石簡寛先生 高知大学教育学部 森田栄佐先生 佐竹素和先生 高知大学人文社会科学部 岩佐和幸先生 農林海洋科学科 長崎駿三先生 市来智明先生 高知工科大学 経済・マネジメント学群 中村直人先生 上條良夫先生	
16		25	論文作成	リサーチペーパーガイダンス	6限アリーナで一斉説明 7限各教室にてアウトラインの作成	論文の書き方について理解し、アウトラインを書いてみる。	放課後にワード、エクセルの使用講座(自由参加)45分授業	目的に合わせた情報の選択(メディアリテラシー/情報活用力) 現状を分析し目的や課題を明らかにする力(課題発見力/思考性) グループ内での主体性(主体性) 個人の計画力(思考性)		
17		1		リサーチペーパー作成①	各クラス タブレット、図書室、コンピューター室を利用して	論文の打ち込みと並行して、更に調べる。		目的に合わせた情報の選択(メディアリテラシー/情報活用力) 現状を分析し目的や課題を明らかにする力(課題発見力/思考性) グループ内での主体性(主体性) 個人の計画力(思考性)		
18		6		リサーチペーパー作成②	各クラス タブレット、図書室、コンピューター室を利用して	論文の打ち込みと並行して、グラフの作成など。		原因を解決する力(問題解決力/思考性) グループ内での主体性(主体性) 個人の計画力(思考性)		
19	11	15		リサーチペーパー作成③	各クラス タブレット、図書室、コンピューター室を利用して	論文の打ち込みと根拠を提示するのに必要な情報が集まっているかチェックする。		新しい価値を創造できる力(創造的思考力/思考性) グループ内での主体性(主体性) 個人の計画力(思考性)		
20		22		リサーチペーパー作成④	各クラス タブレット、図書室、コンピューター室を利用して	論文の打ち込みと並行して、引用の整理など。		目的に合わせた情報の活用(メディアリテラシー/情報活用力) グループ内での主体性(主体性) 個人の計画力(思考性)		
21		29	リサーチペーパー作成⑤	各クラス タブレット、図書室、コンピューター室を利用して	論文の打ち込みと並行して、引用の整理など。		原稿用紙A4 6枚 一次完成(論文作成) グループ内での主体性(主体性) 個人の計画力(思考性)			
2学期末テスト										
22	12	13	論文作成	リサーチペーパー作成⑥	各クラス タブレット、図書室、コンピューター室を利用して	授業終わりに一次提出。		原稿用紙A4 6枚 一次完成(論文作成) グループ内での主体性(主体性) 個人の計画力(思考性)		
冬季休業 担当教員は、冬休み中に一次提出された論文を添削し、1月11日に各グループに返却。担当の先生が、12月27日にはクラスの代表論文をグローバルに提出										
23	1	10	論文直し	返却論文の直し①	各クラス タブレット、図書室、コンピューター室を利用して	背景の充実・根拠の調べ直し・引用の直し/(クラス代表組は口頭発表用スライドかポスター発表用ポスターづくり)		根拠の提示(論文作成) 課題の無き(論文作成) グループ内での主体性(主体性) 個人の計画力(思考性)		
24		17	ポスター交流	ポスター交流準備	各クラス タブレット、コンピューター室を利用して	使用スライド直し、原稿作り、リハーサル/(クラス代表組は口頭発表用スライドかポスター発表用ポスターづくり)		序論、本論、結論を通した一貫性(論文作成) 題目と内容の一致(論文作成) グループ内での主体性(主体性) 個人の計画力(思考性)		
25	1	24		校内ポスター交流	1〜7Hと海外研修組、クラス前後半でポスター交流	グループ論文の内容を個人でポスター発表し、自分の発表時間外は、他の発表を聞き、自分たちの研究がどんな意義があるか・相対的に知る。	1回発表で、7回聴講する。	論理的な構成(発表資料) 分かりやすいデザイン(発表資料) 説得力のある表現力(発表態度) 論理的発表(発表態度) ディスカッションする力(発表態度) 他者の指摘から自己改善(自己管理能力)		
26		31	論文直し	返却論文の直し②	各クラス タブレット、コンピューター室を利用して	ポスター交流の振り返り(30分程度) 背景の充実・根拠の調べ直し・引用の直し/(クラス代表組は口頭発表用スライドと原稿作成)	2月1日の1週間程度で、アンケートを取る。	序論、本論、結論を通した一貫性(論文作成) 題目と内容の一致(論文作成) グループ内での主体性(主体性) 個人の計画力(思考性)		
27	2	7		返却論文の直し③と振り返り	各クラス タブレット、コンピューター室を利用して	論文の最終直し(体裁なおし)/(クラス代表組は別室でリハーサル) 活動録(探究活動の)作成	成果発表組は2月15日が最終論文の提出	序論、本論、結論を通した一貫性(論文作成) 題目と内容の一致(論文作成) グループ内での主体性(主体性) 個人の計画力(思考性)		
学校行事		14	成果発表	成果の公表	アリーナにて口頭発表	SGH成果発表(午前:パワーポイントにて口頭発表 2年シンガポールA、タイ、2年クラス代表班、203班、405班 706班午後 ポスター交流 1年全グループ)		論理的な構成(発表資料) 分かりやすいデザイン(発表資料) 説得力のある表現力(発表態度) 論理的発表(発表態度) ディスカッションする力(発表態度)		
28	x	G探Ⅲの準備	G探Ⅲに向けて①	アリーナにて20分は説明 各教室で1時間はアンケート	G探Ⅲテーマ選択についての説明と、テーマ選択、G探Ⅲのテーマ決定に向けての調べ活動	タブレットを最初1時間は1234Hで、2時間目に567Hで活用。				
29	x	G探Ⅲの準備	G探Ⅲに向けて②	各教室	G探Ⅲテーマ決定提出(授業終了後)	タブレットを最初1時間は1234Hで、2時間目に567Hで活用。				

2 趣旨及び目的

「グローバル探究Ⅱ」では、将来グローバルな視点で地域を創生する、または国際的に貢献できる生徒を育成することを目的とし、世界の諸問題を探究する。国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の17の「持続可能な開発目標(SDGs)」に基づいて、世界の現状を知り、整理し、問題の所在を明らかにし、解決策の模索を行う。その過程で、文献調査、国内外リサーチ活動、中間口頭発表、リサーチペーパー作成、ポスター交流など様々な活動を通して、グループ探究によるコミュニケーション力や表現力、リーダーシップ、幅広い知識と教養を基盤にした課題発見力、課題解決力、創造的思考力、メディアリテラシーや情報活用能力を育成する。

3 取組内容

(1) 1学期

① グローバル探究Ⅱ担当教員全員へのガイダンス

より一層の組織的な指導を推進するために、本校SGHの目的、グローバル探究Ⅱの目的・目標・育成する能力、年間指導計画、評価対象物、評価基準、評価方法等について、2年生担当教員17名(学年主任、正副担任)で共有した。

令和元年度グローバル探究Ⅱ案 評価基準 () 班 氏名()			
各項目で、左の枠へ行くほど、グローバル探究Ⅱの探究活動でみなさんに最終的に目指してほしい姿です。これが点数化されて、成績点になります。			
①	主体性	相手の立場と自分の立場の違いを理解した上で、相手の言った内容に共感しつつ、目的達成に必要な情報を加えた発言ができる。	相手の立場と自分の立場の違いを理解した上で、相手の言った内容に共感した発言ができる。
		目的を理解し、目標を達成する目的意識の強いアイデアの提案ができる。	目的を理解し、目標を達成したアイデアの提案ができる。
		目標達成を助けた仲間と協力したグループの進行管理ができる。	目標達成を助けたグループの進行を管理する発言はするが、仲間を助けていない。
		グループでの議論を1つ上の段階から見て、グループの最もメリットのあるものにまとめることができる。	グループの議論をまとめるが、グループの多数によってメリットのあるまとめるを行う。
②		どのような事態が生じていても、目標(探究)を追求し続けることができる。	失敗しても、目標(探究)を追求し続けることができる。
③	自己管理	他者からの指摘を冷静に受け止め、原因を特定できかつ改善策を講ずる。	他者からの指摘を冷静に受け止め、分析するが原因を特定できない。
④	思考性	発表や論文提出のための準備計画を作成し、週間予定表を用いることができ、計画を達成することができる。	発表や論文提出のための準備計画を作成し、週間予定表を用いることができるが、計画は達成できない。
⑤		調べて得た事柄が、他の事柄にどのような影響を及ぼしているか説明することができる。	調べて得た事柄について説明しつつ、どこで、それが、なぜ、どのように、何をしたかすることができる。
⑥		原因を明らかにする手段を考えることができる。計画が立て、提案の実行可能である。	原因を明らかにする手段を考えることができる。実行可能である。
⑦		調査結果、調べた内容をまとめることができ、妥当な分析(考察)ができる。	調査結果、調べた内容をまとめることができるが、分析(考察)できない。
⑧		解決策の提案が、独自のものがある。	解決策の提案が、既存の改良案である。
⑨		メディアを通じた情報にも、編集や加工による多段階のものがあることを知っていて、目的に合わせた情報を意識して見つけだし、関連づけることができる。	メディアを通じた情報にも、編集や加工による多段階のものがあることを知っていて、元の情報を知っているが、目的に合わせた情報を使用する。
⑩		使用する情報の情報源が書かれており、再度同じ情報を入手することができるような記載ができています。	使用する情報の情報源が書かれているが、追跡できない。
⑪		多項目で複数の多い数値を表計算アプリケーションで処理でき、統計として使用できる。	数値を表計算アプリケーションで処理できる。
⑫		根拠としてのデータを用いるか理解し、探してきたデータが条件に合わせて整理して使うことができる。	根拠としてのデータを用いるか分かっていないが、探してきている。
⑬	発表資料発表態度	目的を含む問題提起、仮説検証、結論が含まれており、根拠として論議の必要とデータが示されている。	目的を含む問題提起、仮説検証、結論が明示されていない。
⑭		1シート(項目)の文字数、フォントサイズ、色が適切に使われ、写真、図、グラフが使われ、仕切り線など整理されている。	1シート(項目)の文字数が適切で、フォントのサイズ、色が適切に変わっている。
⑮		適切な速度、適切な声の大きさでかつ重要な部分で、抑揚をつけ、聴衆の注意を引くことができる。アイコンタクトやデジタルハンドをつづけることができる。時間内に話せている。	適切な速度、適切な声の大きさで話している。
⑯		探究仮説と現状、なぜそれに取組むか、研究方法、具体的な調査手立てが示されている。	探究仮説と現状、なぜそれに取組むかを示している。
⑰		相手の発言に反応するだけでなく、新たな情報の提示までできている。	相手の発言に対応した応答が生じている。

② 第1回：学年全体でのグローバル探究Ⅱについてのガイダンス

今後30年後の世界や日本の状況を踏まえて、グローバル探究Ⅱで本校が育成したい「主体的、能動的に生涯学び続けられる能力」とそれを育成するための探究活動について具体的に説明した。また、年間指導計画と活動に伴う成果物についても言及した。



③ 第2回：専門家の体験を踏まえた講義～世界を知る～

(講師 高知大学国際連携センター センター長 新納 宏 氏)

JICAで長年ご活躍後、地域大学で国際連携を推進されるようになった講師を招聘し、前半は「持続可能な開発目標(SDGs)」が採択された背景や目標の分類、今現在の達成度合いをご教授いただいた。後半は、講師ご自身が大学で推進されている世界各国への技術移転や、地域連携センターとして支援している高知県の特化した技術移転による国際貢献の講演をお聞きした。日本が国際支援を行う意義、課題とやりがいについて学んだ。講演後に、生徒たちが解決したいと考える世界の社会問題に関するアンケートを取った。



④ 第3回：課題設定の手法を学ぶ～事実を深く調べるために～

第2回授業後アンケートを整理し、希望するSDGsのターゲット目標によりクラスで新しいグループを結成した。グループ内では、希望するターゲット目標が少しずつ違ったので、議論し一つの目標に設定しなおす議論を行った。後半では、探究するためには、何をすることが必要かを、グループでKJ法を用いて出し合い、発表を行った。

⑤ 第4/5回：課題設定の手法を学ぶ～問いと仮説の整理～

疑問作成シートを活用し諸問題を深く調べるための疑問文作成を行った。調べた内容は、事実整理シートに記録し、出典も残す指導を行った。授業内の調べ活動で困った事項をクラスで共有後、先行論文に行き当たることを推奨し、C i N i i を活用する方法も教授した。検索媒体は、インターネット、図書室の書籍を活用した。深く調べた内容から、問題の原因と思われる仮説を立てるため、現在までの内容を探究過程プレゼンテーションシートに整理した。第8回の途中発表に向けての発表資料としての役割も兼ね、リサーチペーパー作成時のアウトラインとしても活用する。昨年度の探究活動が先行事例として活用できるように、昨年度のリサーチペーパーを各クラスに配置し、自由に閲覧できるように整えた。

G探Ⅱ 第4回 「課題設定」事実整理シート 例

組 番 班 名 _____ 氏名 _____

事実整理

① どこで飢饉が生じているのか

出典 世界の食料不安の現状 2015 年報告, FAO, 2015 要旨 [URL<http://a.wfp.org/hunger-in/estate>]

世界中でおよそ7億9,500万人の人々が飢えに苦しんでいるが、2015年では南アジア、オセアニア、カリブ海地域、南部アフリカ、東アフリカで、改善は多少見られるものの、ペースは遅く慢性的な栄養不足人口を半減させることはできていない。地域別の飢饉人口の人数は、アジアが最大（全世界の3分の2）で、近年、南アジアでは、飢饉人口が減少しているが、西アジアではわずかに増加している。地域別でも飢饉人口の割合が高いのは、サハラ砂漠以南のアフリカで、この地域では、4人に1人が栄養不良である。➡アフリカで本当に飢饉が生じている。

② だれに飢饉が起っているのか。

出典 世界子供白 2014 統計編 unicef 2014 p23, 26

どの年齢層に最も飢饉が起っているのかを調べたかったが、そのデータを見つけれなかったため、体力的にも経済的にも弱者である、子どもに注目した。栄養不足の状態を示す数値として5歳未満児の死亡率が高いと推測して、どの国かを調べた。

ユニセフによる地域グループ	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010	2013	国と地域の分類	
サハラ以南のアフリカ	242	216	199	185	177	170	165	150	106	98	14の国は食料の不足に陥り、以下のように分類された国：低所得国・中所得国・高所得国
東部・南部アフリカ	309	190	182	172	163	155	150	111	65	77	
東部・中部アフリカ	216	246	217	203	186	180	174	161	127	118	サハラ以南のアフリカ
中央と北アフリカ	202	165	125	90	71	61	50	41	32	30	東部・南部アフリカ：南アフリカ、ジブチ、スーダン
東アジア	211	163	170	149	129	111	94	78	65	60	東部・中部アフリカ
東南アジアと太平洋	114	92	76	60	50	41	30	25	23	20	アンゴラ、ボツワナ、ブルンジ、コロンビア、エリトリア、エチオピア、ケニア、レソト、マダガスカル、マリ、モリタニア、モザンビーク、ナミビア、ニジェール、ジンバブエ
ラテンアメリカとカリブ海	118	102	84	67	54	43	30	25	23	19	東部・中部アフリカ
OECD*	97	74	60	55	47	47	30	27	21	19	ペナン、ブルキナファソ、カメルーン、中央アフリカ共和国、チャド、コンゴ、コートジボワール、コンゴ民主共和国、赤道ギニア、ボツワナ、ジンバブエ、ガーナ、ギニア、ギニアビサウ、リベリア、マリ、モリタニア、ニジェール、ナイジェリア、セネガル、スーダン、タンザニア、トーゴ
OECD以外の国	239	207	209	189	172	156	139	114	63	66	
世界	145	128	116	99	86	75	63	52	48		

出典 世界子供白 2014 統計編 unicef 2014 p24

グローバル探究Ⅱ【タイトルシート】

探究過程プレゼンシート 見本

例「サヘル地域における安全な水の確保を考える」

〇〇〇班

班員：〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇 〇〇〇〇

1. 背景(調べた現状、事実、きっかけ)

2015年現在、世界では6億6300万人が安全な水を利用できていない。そのうち約半数は、サハラ以南のアフリカで暮らしている。そこでは、不衛生な水や生活環境に起因する下病性疾患によって年間18万人(1日におよそ500人)の5歳未満児が命を失っている。

特にサハラ南縁のサヘル地域では、乾燥と土地劣化が急速に進み、人々の生活は、水や食料の慢性的な不足、疾病の蔓延など深刻な危機にさらされている。

(※ユニセフ「ニュース2015年12月15日」)。(環境省「フォレスト パートナリシップ プラットフォーム」)
http://www.env.go.jp/nature/shinri/fpc/database/mjcompo_casae/sahelgreen.html

5 H	高知大学	教育学部	佐竹 泰和 先生
6 H	高知大学	地域協働学部	塩崎 俊彦 先生
7 H	高知大学	教育学部	森田 美佐 先生
海外リサーチ	高知大学	人文社会科学部	岩佐 和幸 先生

⑨ 第9回：アクションプランの思案、計画と諸注意

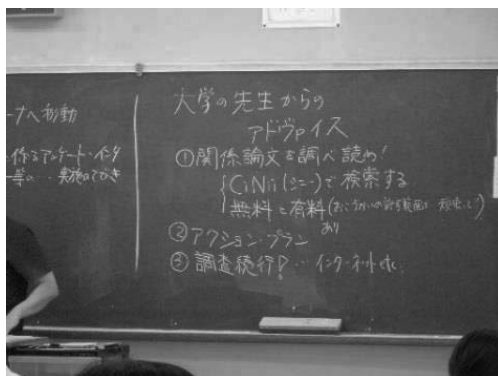
前授業でいただいたアドバイスをもとに、何を明らかにする必要があるのかを考え、そのための調査について話し合った。また、調査活動前の諸注意を「G探Ⅱに係る調査活動実施のてびき」を用いて受け、アポイントメントの取り方や事前準備などの確認を行った。夏季休業期間に実施する調査活動の具体的な計画を立てることができた班は、アポイントメントを取ったりした。

グローバル探究Ⅱ 調査シート		令和 年 月 日
氏名		MEMO
相手先		
住所		
連絡先		
メールアドレス		
実施予定日／場所		
インタビュー・アンケート・文献調査等の目的		
主な聞き取り内容の質問項目、または質問そのもの		
①		
②		
③		
④		
⑤		
⑥		
⑦		
※アポイントを取る前に担当教員に確認印をもらう。アンケートを実施する場合は、アンケート用紙も添付して提出すること。		
提出締切：7月19日(金)までに担当教員へ提出	アポ前担当印	

R1.7.5作成版
生徒用

G探Ⅱに係る調査活動実施のてびき

- アンケートを実施する場合。
 - ①グローバル探究Ⅱ調査シートを作成する。
 - ②同時に、生徒は担当教員(担任の先生)に、アンケート実施の伺いをする。その際、「アンケート作成のてびき」を読み、「アンケート用紙」の裏を作成し、提出する。アンケート用紙には、下記の内容は必ず明記すること。
 - ・アンケートの実施の目的・用途
 - ・アンケートの対象者(例: 高知師範高校2年生、高知国際中学2年生、師範校教員など)
 - ・アンケート調査期間(アンケート提出期間)
 - ③担当教員がグローバル探究Ⅱ担当の先生や管理職の先生たちに確認をとってくれる。
 - ④アンケートを実施の許可をもらったら、担当教員から指摘された修正箇所を直し、アンケートを実施する。
 - ※アンケート用紙の印刷や回収方法については担当教員に相談する。
 - ⑤アンケートの許可が下りなかった場合は、調査の趣旨や、対象者、アンケートの用途などを考えなおして、担当教員に再提出する。
 - ⑥外部へのアンケートの場合は、「電話のかけ方」を読み、アンケートの相手先と連絡を取り、実施目的を説明し、協力を得るための交渉をする。
 - ⑦丁事を傳えたら、アポイントメントを取った日に、「アンケート」を持参し、もう一度、アンケートの目的を説明し、協力のお願いをする。
 - ⑧いつまでに実施してほしいか、回収日時は確実に伝える。※アンケート実施期間は、相手の都合も考慮し、2週間ほど余裕をもたせて、相手と打ち合わせる。
 - ⑨実施後は、アンケートの集計や分析を行い、「調査完了報告書」を担当教員に提出する。
- 聞き取りを実施する場合。
 - ①グローバル探究Ⅱ調査シートを作成する。その中に質問項目を作成し、担当教員に提出して確認してもらう。
 - ただし、マイナスイメージを問う時には、相手の心情にも配慮し、質問の仕方に配慮する。
 - (例) 乳児死亡率が高い国にふみふみにふみする理由(アングラ大使館にて)
 - 生徒: 韓国では、乳児死亡率が世界一となっていますが、理由は何かと思いますか?
 - 生徒: 乳児死亡率が高い国を調べたところ、○○国や○○国、そして韓国などが高いようにふみふみしました。この3国に聞いているところですが、主な理由としては、どのようなことが考えられますか。
 - ②担当教員から指摘された修正箇所を修正する。
 - ③「電話のかけ方」を読み、ふみふみにふみする相手先と連絡を取り、実施目的を説明し、協力を得るための交渉をする。
 - ④丁事を傳えたら、約束した日に質問したい内容をすべてまとめて持参し、日時を設けていただいたお礼を述べ、質問等を開始する。



G探Ⅰ～Ⅲに係るアンケート・インタビュー等の調査のてびき

P7

電話やメールを送る場合は、担当の先生や学年団の先生のもとで、学校の電話から電話します。メールは担当の先生のアドレスから送ってもらう。

⑩ 夏季休業期間：リサーチ活動

各班で、県内外の企業やNPO、大学、研究機関への聞き取り調査を行ったり、アンケートを実施したり、参考文献の検索を行ったりした。

(2) 2学期

① 第10回：リサーチ活動で得た情報の共有と整理

夏季休業のリサーチ活動を通じて得た情報を共有した。調査完了報告書を整理しながら、個人や特定機関で聞き取った情報を探究過程プレゼンテーションシートに反映した。その結果、生じたさらなる疑問や仮説の探究に向け、第11回の探究内容相談会に向けて、講師への質問内容の検討も行った。リサーチを行っていない班は、リサーチ活動のための準備や、計画などを改めて考えた。

② 第11回：探究内容相談会

リサーチ活動で仮説の検証ができた場合は解決策の提案に向けての助言をいただく目的で、また仮説の検証ができなかった場合は情報を得直す目的で、鳴門教育大学、高知大学から8名の講師を招へいして、講師の専門分野別の相談会を行った。各班で聞きたい内容を事前にまとめ、1班15分～20分で44グループが相談を行った。相談しないグループは、現時点での探究過程を論文アウトライン整理シートで図示し整理した。



【講師一覧】

氏名	大学	所属	専門
近森 憲助 先生	鳴門教育大学	名誉教授	環境教育、環境・理数教育における国際支援活動(南アフリカ)、食品ロスなど
森田 美佐 先生	高知大学	教育学部	少子化社会、男女共同参画社会、女性の地位向上
岩佐 和幸 先生	高知大学	人文社会科学部	アジア社会経済全般、アグリビジネス・農村経済について、地域経済論
永田 信治 先生	高知大学	農林海洋科部	食と健康に役立つ高知生まれの微生物、地域と連携して微生物を利用する取組、微生物を利用した環境問題への取組、食育啓蒙
小野寺 健一 先生	高知大学	農林海洋科部	サンゴ礁域動物と植物プランクトンの共生に関するトピック、水界微生物と環境問題、微生物が作る有機物質の精製や化学解析
阪田 光和 先生	高知大学	農林海洋科部	イネの新規系統開発、国際的な食糧問題の解決や国内の農業活性化の問題とその貢献 多用途利用米の開発
松川 和嗣 先生	高知大学	農林海洋科部	バイオテクノロジーを活用した家畜の繁殖、環境保全型(循環型)飼養システムの構築、希少種の保全、高知県特有の食肉、土佐赤牛の活用について
新納 宏 先生	高知大学	国際連携推進センター	国際協力、開発途上国論、移行経済国の市場経済化支援、中央アジアの地域開発

③ 第12回：相談会後の内容整理

前相談会で得た情報の整理を行い、班内で交流した。また、相談会に参加していただいた先生から聞き取った探究過程での躓きポイントを分類し、問いと仮説についての再度の解説や、探究の目的、目標の立ち返りを補足講義し、生徒へのフィードバックを行った。



④ 第13/14回：より伝わる中間発表に向けて

現時点までの探究内容の進捗状況を分かり易くプレゼンテーションして伝えることを目的として、第15回の中間発表会に向けての準備を行った。探究過程プレゼンテーションシートの改良、原稿の作成、発表練習を行った。

⑤ 第15回：中間発表会

第3回から進めてきた探究活動の進捗状況を、各クラスで口頭発表した。各班、説明と質疑応答を7分以内で行い、その後、3分で助言をいただいた。第一回目の発表会や相談会に参加いただいた講師には同じクラスに入っていたいただいた。また、新たな講師にも参加していただき、合計8名の先生方に発表し探究内容と発表の仕方の講評をいただいた。

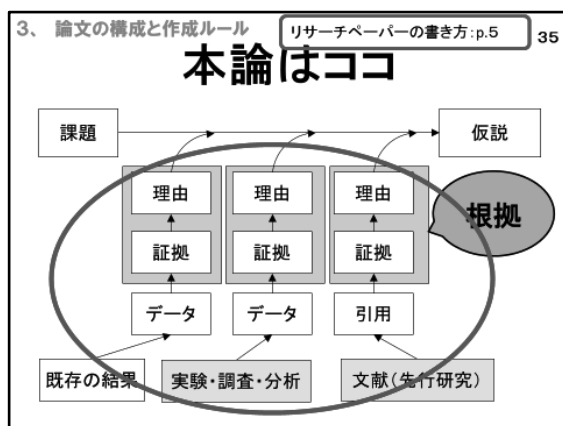
【講師一覧】

	大学	所属	氏名
1 H	高知大学	農林海洋科学部	市栄 智明 先生
2 H	高知大学	農林海洋科学部	長崎 慶三 先生
3 H	高知工科大学	経済・マネジメント学群	上條 良夫 先生
4 H	高知工科大学	経済・マネジメント学群	中村 直人 先生
5 H	高知大学	教育学部	佐竹 泰和 先生
6 H	高知大学	地域協働学部	石筒 覚 先生
7 H	高知大学	教育学部	森田 美佐 先生
海外リサーチ	高知大学	人文社会科学部	岩佐 和幸 先生



⑥ 第16回：リサーチペーパー作成に向けて

最初の問いに対する仮説の検証ができず調査を続行している班や、仮説の検証から新たな発見があり次の問いができた班、また、仮説の検証ができたため解決策の提案に進んだ班など、様々な進捗の状況であったが、リサーチペーパー作成開始のための論文作成の講義を学年全体に向けて行った。まず初めに、目指す論文の最終形態について、論文評価表を提示し、作成については、「R元年度リサーチペーパーの書き方～探究の成果をまとめよう～」を使いながら、論文の構成、書き方のルール、引用の重要性について重点的に講義した。特に研究倫理については、厳重に説明した。



3、論文の構成と作成ルール **研究倫理** 64

**引用作法に則ることは
研究をする者の基本的なルール
で（他人の成果を盗まない）
研究をしたり、論文を書く資格
を得るための最低条件である。
⇒先行研究に敬意を払おう！**

論文評価表 (班)

項目		評価		
テーマ設定	地域の設定	地域課題の解決や地域創生に直接関連するテーマを設定しており、具体的な地域に言及されている。	地域課題の解決や地域創生に直接関連するテーマを設定しているが、具体的な地域に言及していない。	地域課題の解決や地域創生に直接関連するテーマ設定がなく、具体的な地域にも言及していない。
	地域課題解決 地域性	地域課題の解決や地域創生に対し、様々な観点から考え、実行可能な提案がされている。	地域課題の解決や地域創生に対し、提案がされている。	地域課題の解決や地域創生に対し、提案がされていない。
倫理性	研究倫理	情報源、参考文献など引用元が明記され、規則に乗った引用を行っている。個人情報、著作権、肖像権にも配慮した資料使用ができています。	情報源、参考文献など引用元が書かれているが、不明瞭である。規則に乗った引用を行っていない。個人情報、著作権、肖像権にも配慮した資料使用ができていない。	情報源、参考文献など引用元がどこにも書かれていない。明らかに剽窃をしている。
研究の内容	目的の明示	先行研究、過去の歴史を踏まえ、研究の目的、意義が明確に述べられている。	研究の目的、意義が明確に述べられている。	研究の目的、意義が明確に述べられていない。
	現状分析	なぜそのようになるのか、現状を分析し、課題が明確に書かれている。	なぜそのようになるのか、現状分析はできているが、課題が明確に書かれていない。	なぜそのようになるのか、現状分析もなく、課題も書かれていない。
	研究方法の妥当性	必要な語や概念の定義があり、そこからどう考えて、その研究方法（アンケートやデータの比較など）を選んだのか述べられている。	必要な語や概念の定義があるが、そこからどう考えて、その研究方法（アンケートやデータの比較など）を選んだのか述べられていない。	必要な語や概念の定義もなく、そこからどう考えて、その研究方法（アンケートやデータの比較など）を選んだのかも述べられていない。
	解釈まとめ	参考資料や得たデータに基づいて客観的な解釈を行っている。予想や仮説と一致しない結果も、重要な結果と捉えている。	参考資料や得たデータが、あまりにも飛躍した都合の良い使われ方になっている。予想や仮説と一致しない結果は無かったことになっている。	参考資料やデータが使われていない。
研究の記述	資料図表の作成 配置	根拠となる資料、図表が適切に作成、配置されている。	根拠とは言い難い資料や図表が作成、配置されている。	資料や図表が作成も配置もされていない。
	形式の整頓	「だ。である。」という文体、明朝体での字体の統一ができ、指定文字数が守られている。図や表に番号や説明がつけられている。（リサーチペーパーの書き方に沿って書かれている）	「だ。である。」という文体、明朝体での字体の統一ができ、指定文字数は守られているが、図や表に番号や説明がつけられていない。（リサーチペーパーの書き方に沿って書かれている）	「だ。である。」という文体、明朝体での字体の統一ができておらず、指定文字数も守られていない。
論文作成過程	データ資料保管	論文に使われたデータや独自資料は、適切に保存され、後の紹介や検証に出せるように保管している。	論文に使われたデータや独自資料は保存しているが、後の紹介や検証に出せるようには保管できていない。	論文に使われたデータや独自資料は保存していない。
	情報機器の使用	情報化が社会に及ぼす影響について理解し、情報機器を活用することができている。	情報化が社会に及ぼす影響について理解しているが、情報機器を活用できない。	情報化が社会に及ぼす影響について理解していないし、情報機器を活用できない。

⑦ 第 17～22 回：リサーチペーパーの作成

リサーチペーパーの 1 次提出（第 22 回終了後）の内容として、今回探究した「諸問題の現状と課題を整理して書いてある」ことが最低限必要であることを伝え、A4 サイズ 6 枚以上のリサーチペーパーを作成させた。リサーチペーパーを作成しやすくするために、まず探究過程プレゼンテーションシートからアウトラインをまとめさせるとともに、文章化する時には「R 元年度リサーチペーパーの書き方～探究の成果をまとめよう～」を参考にするように再度指導した。また、クラスに配置した昨年度のリサーチペーパーも活用した。内容の修正も行えるように、リサーチペーパーが書きあがってしまう前に各クラス担当者に確認してもらった。使用するデータに関して、国や政府が公表している統計やデータを検索し直し、各自がグラフを作成するなど、内容の引用にも気を付けた。

班) 発表スライドからアウトラインをつくりましょう。4)

1. 序論

背景

問題点の指摘

本研究で解決したい課題(解決課題)

この問いを巡る理由(※何のためにこの研究をするのかと仮の答え)

定義

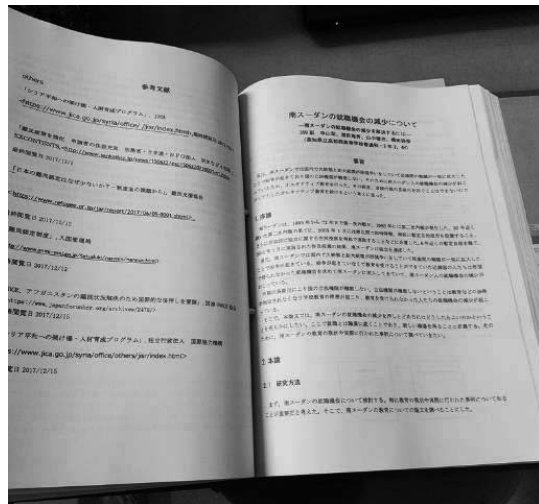
2. 本論

2.1 研究方法

研究方法

2.2 調査内容

調査内容とそこから分かった事(最終的に結論を導くための論拠)



(3) 3学期

① 第23/24回：1次提出の論文直しとポスター交流会の準備

第22回で提出されたリサーチペーパーを冬季休業中に指導教員が査読し、意見やコメントをつけ、第23回の授業内で返却した。それを受けて各班は訂正箇所の直しに取り掛かった。また、学年の全リサーチペーパーからSGH推進委員(18名)により、SGH成果発表会で口頭発表を行う代表グループを選出した(203班、405班、706班、シンガポールA班、タイ班)。第24回の授業では第25回に学年全グループにおけるポスター交流会を行うため、論文修正と同時進行で、探究過程プレゼンテーションシートを修正し、ポスター作成、原稿作成を行った。各クラス代表として選ばれた5つの班(102班、301班、504班、606班、シンガポールB班)は「国際問題を考える日(大阪大学、兵庫県教育委員会主催)」に参加するためのポスター作成と準備を行った。

② 第25回：ポスター交流会

他班の探究からたくさんの知識を得て、自分たちの探究と比較することで、自分たちの探究の意義を理解する目的で、2年生の全70グループを2グループに分け、前後半35グループずつとしてポスターセッションを行った。発表は10分で、1名で発表し質疑応答に対応することとし、4回繰り返すことによりグループの全員が一人での発表を経験した。また、自分の発表時間以外で7テーマを聴講した。

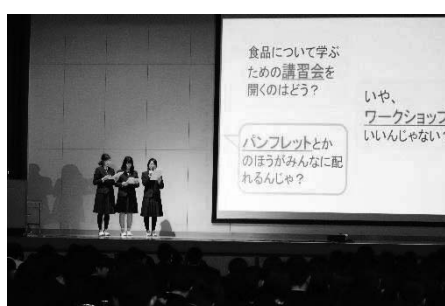


③ 第26/27回：論文修正と探究を振り返り「探究活動録」の作成

前時のポスター交流の振り返りをグループで行うと同時に、最終提出に向けリサーチペーパーの修正を行った。また、1年間の探究活動を振り返り、各自で探究活動録を作成した。活動録には、研究内容の要約と、①探究活動で苦労したこと、活動を通じて学んだこと（300字程度）、②これをやっておけばよかったこと（200字程度）、③参加した活動内容とそこからどんなことを学んだか（200字程度）、④探究活動を通じて、どのような手法や考え方が身に付いたか、また今後どのような場面で使えるか（200字程度）、⑤探究活動の結果、新たに生まれた疑問や興味（200字程度）を記入した。

④ 第28回：令和元年度SGH成果発表会

1年間の探究活動の総括として、本校体育館を会場に、2年生の代表5グループによる口頭発表と、1年生全グループによるポスター発表を行った。また、演劇部によるSDGsの目標となっている様々な社会問題を基調にした演劇があり、問題提起した。2年生は15分間の発表の後、発表者全員での質疑応答を30分行った。来賓やSGH運営指導委員の質問に対し、自らの意見をはっきりと述べていた。その後、近森憲助先生から改めて講評をいただいた。2年生の発表は、1年生に来年の自分たちのゴールを理解させる目的もあり、その目的が十分に果たせていた。



⑤ 第29回：個人探究に向けて

3年生から取り組む個人探究に向けてのテーマ選択について説明し、テーマ設定に向け各自が興味のある分野を詳しく調べ始めた。

4 成果と課題

(1) 成果

- 世界や地域の諸問題の解決に対して、探究の過程で、仮説を立て、それを支持する根拠となる情報を探し、仮説を証明し、再び新たな仮説を立てるという論理的な思考を繰り返させたことで、たくさんの情報や知識を得ることが思考を深めるということを生徒が認識した。2月に実施した「学校評価アンケート」のグローバル探究の活動を通じて、(社会の/自分の)問題を見つける力が身に付いていると思いますかという項目で89%、(社会の/自分の)問題を解決する力が身に付いていますかという項目で86%が肯定的な回答を行っている。また、高校生の問題解決意識と行動に関するアンケートでは、数ある質問項目の中でも、「私は、これからの時代に必要とされる教養を身に付けたい」という項目が93%と最も高く、今後大きく変化すると予想される社会で生きていくための課題発見能力や問題解決能力を積極的に身に付けようという意識も表れている。
- 理系クラス、文系クラスの特徴を探究内容に反映しやすいように、グループ決める時の希望するSDGsのターゲット目標をクラスで少し変更し提示した。また、1年次からの高知県の地域創生のテーマも選択しやすいように、高知県の抱える具体例をターゲットの例として書き加えた。昨年度と比較すると、環境問題や、医療問題、生物の多様性に関するターゲットに取り組む理系生徒が増え、理系の視野を広げる結果となった。
- グループは、希望するターゲット目標が違った生徒同士や、違う部活動や課外活動に所属する生徒の集まりで、一つの目標に設定し直したり、探究活動の過程で役割分担する中で、自分の意見を主張し、議論し、妥協する経験をした。自己犠牲を払いながらリーダーとして探究を推進する生徒や、多様な雑務を担当する生徒への感謝や、協力が不十分だった自身への反省が生まれていた。

- ・大学の先生方への相談会や、地元図書館での文献検索、アクションプランでの専門家へのインタビューを通して、自分たちの問題の本質に行きつくような重要な文献を紹介してもらえる機会に恵まれ、自分たちが取り組んでいる問題の実態を具体的に理解している班が増加した。
- ・各地域に関する状況が英語で書かれてある文献を、ALTや英語の先生の援助を受けながら読む班が増え、各地域に対する理解がより深まったグループが増えた。
- ・各クラスに配置した昨年度の2年生のリサーチペーパー集が、本年度生徒のリサーチペーパー作成時によく読まれ、作成の一助となっていた。
- ・3回の大学教員からの助言で、環境問題や飢餓や食料問題に取り組む生徒が増えたこともあり、農学部先生に多数ご参加いただいた。連続参加が可能で継続的な助言をいただけたクラスと、毎回先生が入れ替わったクラスの割合が1対2であった。継続的な探究内容に対する助言と探究方法や、効果的な発表方法への助言など、参加していただけた先生の得意分野の違いで、多様な意見がいただけた。
- ・大学教員から生徒の様子聞き取りを行い、生徒は統計情報が少ない国や日本語での情報があまり公開されていない国を設定し、情報収集が困難で、疑問質問があっても調べられない状態があることや、調べた結果をどう組み上げて、どのようなストーリーに展開していくのかを考えあぐねている様子も聞き取れた。それを受け、次の授業で生徒の困り点に対する対策が、全体講義で行えたので、探究がその後進んだ。
- ・担当者が、リサーチペーパー作成開始時から評価表を意識して指導してくださるだけでなく、生徒の中にも評価内容を理解し、評価内容に沿ってリサーチペーパーを書くグループが出てきた。1次提出後の論文訂正では、作成指導冊子やアウトライン作成資料を自分たちで何度も読み返し、論文構成や形式、引用の訂正を自ら行っていた。最初から、作成指導冊子の説明をよく読んでおくべきだったという反省が生徒に見られた。
- ・2年生全員によるポスター交流会で、自分が発表することで、グループの探究内容が初めて自分のものとなった。他グループの発表を聞き、他者の論理展開を知り視野が広がったと同時に、自分たちの探究内容の位置付けを知ることができた。その中で、もっと他者からの需要のある研究を行えば良かったという意見があった。どのような研究が有意義な研究なのかに気付く生徒も現れた。
- ・探究成果を校外で発表する機会をできるだけ多くのグループに与えるために、校内枠のある発表会に関しては立候補と予選を行った。「2019年度スーパーグローバルハイスクール全国高校生フォーラム」「第4回中四国高校生会議」「WWL・SGH×探究甲子園2019」「第7回高校生国際問題を考える日」「食品ロス削減全国大会 in 徳島」に出場した。発表に対して意欲的な生徒が多く、一度予選に落ちても、次の機会に再び挑戦するグループもあった。参加した生徒たちは、場数を踏んだこと、自分たちの探究に対する客観的な評価を得られたなどにより、度胸や自信がつくとともに目指す探究のレベルを知り、探究に対する意欲が一層向上した。
- ・学年団の協力もあり、継続的に担当者会を開催することができ、より一層、組織的に生徒の探究活動を支援できた。探究活動で大きな準備を伴う授業に関しては、最初の説明を1か月ほど前に行い、直前1週間前に再確認するなど、担当者の負担が軽減できる時期を考慮した。全体的には、大きな混乱なくすべての授業が展開できた。
- ・第7回国際問題を考える日で、本校のグローバル探究Ⅱの活動について、兵庫県を中心に全国の県立私立高校の教員に向け話ができた。

(2) 課題

- ・グループ決めの時のSDGsのターゲット目標の提示で、高知県の地域創生のテーマも選択しやすいように、高知県の抱える具体例をターゲットの例を書き加えたが、1年次から探究して来た高知県の地域創生に取り組む生徒はまだ少数だった。
- ・昨年の2年生のリサーチペーパーを活用する生徒が増えた分、その内容を正しいものとしてそのまま受け入れてしまう生徒がいるので、他者の論文を批判的に読める力の育成を行う必要がある。
- ・世界や地域の諸問題の解決に対して、問題の原因に即した提案を推奨しているが、大きな問題設定から、具体的な地域の具体的な現状に行き着くまで調査が進まない班もある。理由として、調べが進むたびに、パワーポイントへアウトラインとしてまとめて行くものの、グループ内での議論が深まっていない。なぜそうなるのか、そもそも正しいのか、などグループで疑問を投げかけあい、話

し合う時間が少ない。教員に対して、担当するグループが多く、生徒がどこで困っているのか、教員と班の話し合いの時間が取れない。グローバル探究の時間に、全てを担うことには無理があり、調べ事は各自で授業時間以外で行うことや、教科横断的に探究に必要な力を付けるカリキュラムマネジメントも必要である。

- ワードやエクセルなどのパソコン操作で苦労している部分も多く、放課後に基本操作の教授を行うことも考えたが、全員が一斉に基本知識を得ることが必要で、情報学習の時間を何時間か取り、しっかり教えることが必要である。同様に、必要な情報の調べ方も、題材を出して練習する時間が必要である。
- 探究内容を整理するために、年間3回の発表の場を設けているが、毎年ながら協力していただく大学教員の確保も難しく、生徒も議論をするより、その準備のために時間を割かなくてはならない。各クラスの担当と議論し助言をもらう時間を充実させる必要がある。
- クラス代表を選出する際に、選出者が探究活動全体に対する各グループの取組や、進路を加味した選定をすることがあるため、リサーチペーパーが論理的に書かれたチームが選ばれるとは限らない。また、選考委員の評価も分かれるため、選考評価の基準を考え直す必要がある。探究成果のすぐれたグループを選ぶことができる評価表に直す。
- ポスターセッションや発表で、まだまだ原稿の棒読みになっている生徒が多い。しかし、聞く立場も経験するため、それでは、内容が聞きづらいことにも気づいている。今後、グローバル探究Ⅱの授業以外でも発表活動を入れることで、発表する訓練を続ける。

V グローバル探究Ⅲの取組

1 年間計画

回	月日	中単元	小単元	場所/形式	内容	備考	目標/評価のポイント	招聘者等	
1	4	12	ガイダンス	ガイダンス	トレ室	・G探Ⅲのガイダンス ・探究の進め方	振り返りシート		
2		17	課題設定	課題設定 情報収集	各教室	・テーマ決め及び探究開始 ・情報収集の開始 (文献調査・インターネット調査等)	課題発見力		
3		24	情報収集	情報収集 情報分析	各教室	・情報収集の開始 (文献調査・インターネット調査等) ・情報分析	情報収集力		
4		8		情報分析 論旨(序論)作成	各教室	・情報分析 ・論旨作成	情報収集力 表現力		
5	5	22	論文作成	情報収集・分析 論旨(序論)作成 論旨説明(構想発表) 論文執筆	各教室	・情報収集と分析 ・論旨の作成 ・個別に論旨の説明を担当教員に行う。	・担当教員は論旨を見て、生徒にアドバイスを 行う。	情報活用力 論理的思考力	
6		29		論旨説明(構想発表) 論文執筆	各教室	・個別に論旨の説明を担当教員に行う。	・担当教員は論旨を見て、生徒にアドバイスを 行う。	課題発見力 論理的思考力 振り返りシート	
1学期中間試験									
7	6	12	論文作成	論文執筆	各教室	・論旨の修正を経て、論文作成に取り掛かる。 ・前期アンケート	前期アンケート	課題発見力 論理的思考力	
8		19	論文作成 および 論文提出	論文執筆	各教室	・論旨の修正を経て、論文作成に取り掛かる。		課題発見力 論理的思考力	
9		26	論文提出	論文完成・提出	各教室	・論文の完成をさせる。		理型: 2,000字以上の論文 文型・英語科: 4,000字以上の論文 振り返りシート	
10	7	3	論文修正 および 論文提出		各教室	・論文の加筆修正を行う。	・担当教員から評価が でる。	※課題論文について 評価基準に従って点数による 評価を行う。	
		4	国際 シンポジウム	かるポート				表現力 質問力(主体性・積極性) プレゼンテーション力	
11		10	進路探求		アリーナ	講演Ⅰ(外部講師) 自己分析	・進路実現のための自己分析「自分SWOT」 ・全ホーム7限目	・事前課題	濱松敏廣氏
1学期期末試験									
12	8	28	進路探求	WALKプラン	各教室他	探求学習①	・資料収集・問題研究・ 面接指導など	ポートフォリオ	
	9	2	LHにて		トレ室	センター試験願書の書き方			
13		4	進路探求	WALKプラン	各教室他	探求学習②	・資料収集・問題研究・ 面接指導など	ポートフォリオ	
14		13	進路探求	WALKプラン	各教室他	探求学習③	・資料収集・問題研究・ 面接指導など	ポートフォリオ	
15		18	進路探求	WALKプラン	トレ室	講演Ⅱ(外部講師) 面接対策	・面接での好感度がある「劇団四季流ヴォイストレーニング」 ・全ホーム7限目	振り返りシート	清水美也子氏
16	10	2	進路探求	WALKプラン	トレ室	講演Ⅱ(校内教員) 自己管理	・よりよい進路実現のために心身を健康に 保つ重要性を認識する「ココロとカラダ」 ・全ホーム7限目	振り返りシート	学年主任 サポート部 生徒指導部 家庭科教員
17	10	23	進路探求	WALKプラン	各教室他	探求学習④	・資料収集・問題研究・ 面接指導など	ポートフォリオ	
18		30	進路探求	WALKプラン	各教室他	探求学習⑤	・資料収集・問題研究・ 面接指導など	ポートフォリオ	

19	11	8	進路探求	WALKプラン	各教室他	探求学習⑥	・資料収集・問題研究・ 面接指導など	ポートフォリオ	
20		13	進路探求	WALKプラン	各教室他	探求学習⑦	・資料収集・問題研究・ 面接指導など	ポートフォリオ	
21		20	進路探求	WALKプラン	各教室他	探求学習⑧	・資料収集・問題研究・ 面接指導など	ポートフォリオ	
22		27	進路探求	WALKプラン	各教室他	探求学習⑨	・資料収集・問題研究・ 面接指導など	ポートフォリオ	
2学期期末試験									
23	12	11	進路探求	WALKプラン	各教室他	探求学習⑩ 後期アンケート	・後期アンケート ・資料収集・問題研究・ 面接指導など	ポートフォリオ	
24		18	進路探求	WALKプラン	各教室他	探求学習⑪	・資料収集・問題研究・ 面接指導など	ポートフォリオ	
25	1	8	進路探求	WALKプラン	各教室他	探求学習⑫	・センター試験対策 ・注意点確認		
26		15	進路探求	WALKプラン	各教室他	探求学習⑬	・センター試験対策 ・注意点確認		

2 趣旨及び目的

1年次の「グローバル探究Ⅰ」、2年次の「グローバル探究Ⅱ」において学習した内容や成功事例をもとに、地域課題やグローバル 이슈の解決になる地域創生モデル案を作成したり、自身の関心の高い課題について探究し、「リサーチペーパー（論文）」を個人で執筆する。

リサーチ活動や課題発見のためのフィールドワークを国内外で行うとともに、進路決定の意識付けに付与するように探究を深化させる。

3 取組内容

(1) 1学期

① 第1回：ガイダンス

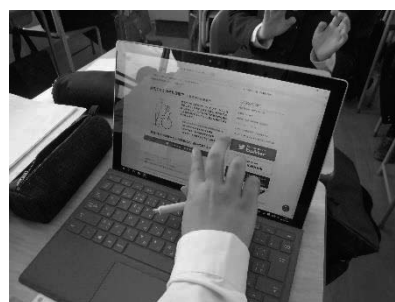
年間の授業の流れとねらいを理解するためのガイダンスを実施。探究テーマの設定やリサーチペーパー（個人論文）作成の手順、方法、注意点について解説を行った。
振り返りシートを書き、探究活動の進め方について整理した。

「グローバル探究Ⅲ」と「課題論文」 2. 授業内容について 個人で「リサーチペーパー」を執筆 理型2000字以上 文・英4000字以上 3. リサーチペーパーの提出日について 6月26日（水）	探究テーマ： 「個人にとって必要なもの」 ①パターン：1、2年次に探究した内容を深める。 ②パターン：自身の興味に基づいた各分野の内容。
---	---

ガイダンス内容（抜粋）

② 第2回～第3回：課題設定・情報収集・情報分析

探究テーマの設定と探究活動を開始した。文献やインターネットを活用して、情報収集・情報分析を実施し、探究の準備を行った。



③ 第4回：リサーチペーパー（個人論文）作成開始

リサーチペーパー（個人論文）の執筆を開始した。その中で最初の項目である「序論」を作成し、論文作成の目的を明確にすることで、作成の見通しを立てた。

また、作成の上での評価基準を提示し、各項目に留意して論文作成を進めた。



リサーチペーパー（論文）（50点） 評価基準 for「課題論文」

()年()組()番 氏名()

領域	評価項目	評価の観点	10	8	6	4	2
主体性	① 関心・意欲等	探究活動に主体的に取り組んでいる。	生徒は、適切な数の図書文献やHP等を活用するなどして、大変優れた分析をし、探究活動に対して主体的かつ積極的な態度で取り組んでいる。	生徒は、適切な数の図書文献やHP等を活用するなどして、妥当な分析をし、探究活動に対して主体的な態度で取り組んでいる。	生徒は、適切な数の図書文献やHP等を活用するなどして、情報を収集・分析をし、探究活動に対して積極的な態度で取り組んでいる。	生徒は、図書文献やHP等を活用するなどして、情報を収集・分析し、探究活動に取り組んでいる。	生徒は、評価の観点に記された基準に達していない。
	② 目的の明示	個人的な関心や個人の進路に基づき、リサーチペーパー（論文）の明確な目的を示している（何のためにこの論文を書くのか、理由が書かれている）。	生徒は、個人的な関心や個人の進路に基づき、明確で十分納得できるリサーチペーパー作成の目的を示している。	生徒は、個人的な関心や個人の進路に基づき、明確なリサーチペーパー作成の目的を示している。	生徒は、個人的な関心や個人の進路に基づき、基本的かつ適切なリサーチペーパー作成の目的を示している。	生徒は、個人的な関心や個人の進路に基づき、リサーチペーパー作成の目的を示しているが、掘り下げや到達しやすさが限定的である。	生徒は、評価の観点に記された基準に達していない。
	③ 分析方法	研究目的を達成するために選択した研究方法にふさわしい分析方法が行われており、当該分野における一定の水準を超えている。	研究目的を達成するために、当該分野において非常に優れた情報収集・情報分析ができています。	研究目的を達成するために、当該分野において十分な情報収集・情報分析ができています。	研究目的を達成するために、当該分野において一定のレベルで情報収集・情報分析ができています。	研究目的を達成するために、当該分野において限定的ではあるが、情報収集・情報分析ができています。	生徒は、評価の観点に記された基準に達していない。
	④ 調査の内容	テーマの現状と問題点が明確になっている。また、自分の意見が論理的に述べられている。	生徒は、個人的な関心や個人の進路に基づいたテーマを設定し、そのテーマについて現状と課題を明確にし、根拠をあげ、論理的に自分の意見を述べている。	生徒は、個人的な関心や個人の進路に基づいたテーマを設定し、そのテーマについて現状と課題を明確にし、根拠をあげ、自分の意見を述べている。	生徒は、個人的な関心や個人の進路に基づいたテーマを設定し、そのテーマについて現状と課題を明確にし、自分の意見を述べている。	生徒は、個人的な関心や個人の進路に基づいたテーマを設定し、そのテーマについて課題を明確にし、自分の意見を述べている。	生徒は、評価の観点に記された基準に達していない。
成果	⑤ 提出状況	振り返りシート、成果物等の提出物が期限を守って提出がされている。	全ての振り返りシート、成果物等の提出物が期限を守って提出されている。また、成果物が十分な条件を満たした状態で記述されている。	ほとんどの振り返りシート、成果物等の提出物が期限を守って提出されている。また、成果物が一定の条件を満たした状態で記述されている。	振り返りシート、成果物等の提出物が期限を守って提出されている。また、成果物が条件を満たした状態で記述されている。	全ての振り返りシート、成果物等の提出物が期限を守って提出されている。また、成果物が限定的ではあるが、条件を満たした状態で記述されている。	生徒は、評価の観点に記された基準に達していない。

※補足：「主体的」とは、「自分の考えや判断によって行動している様子」
「積極的」とは、「自ら進んで物事をやる様子」

※合計点を×2にして100点満点で点数をつけ、その点数をもとに評定をつけます。

④ 第5回～第6回：構想発表（中間プレゼンテーション）

前回の授業で配付した面談シートを活用し、担当教員に対してテーマ設定に関するプレゼンテーションを実施した。生徒たちはそのプレゼンテーションに対する指導・助言をもとに探究テーマの再検討、リサーチペーパー（個人論文）の内容の修正を行った。



グローバル探求Ⅲ「面談シート」

第4回 グローバル探求Ⅲ 「面談シート」		2019.5.8
3年 月 日 書 氏名		
※生徒は網掛けの部分のみ記入し、この用紙を、面談を受ける先生に提出してください。		
探究テーマ		
テーマ設定の理由		
調査内容・手順 (箇条書きで)		
教員所見		

- ⑤ 第7回～第8回：リサーチペーパー（個人論文）作成
リサーチペーパー（個人論文）完成に向けて、執筆を行った。
- ⑥ 第9回：リサーチペーパー（個人論文）完成・提出
リサーチペーパー（個人論文）の一次提出をした。
- ⑦ 第10回：リサーチペーパー（個人論文）加筆修正・完成版提出
リサーチペーパー（個人論文）の加筆修正を行い、完成版を提出した。
振り返りシートを書き、リサーチペーパー（個人論文）作成についての個人評価を行った。

（2）2学期・3学期

① 第11回：講演Ⅰ 進路実現のための自己分析「自分SWOT」

NPO法人維新隊ユネスコクラブ理事長の濱松敏廣氏を講師としてお招きし、「自分SWOT分析」のご講演を行った。生徒同士が自己紹介などを行う場面では、初対面のクラスメイトの場合、就職試験の場合など設定を変えて複数回行った。内容や言葉遣いの変化を感じるとともに、自分の弱みを強みに変えるという発想の転換が進路実現に向けてとても大切であることを学んだ。

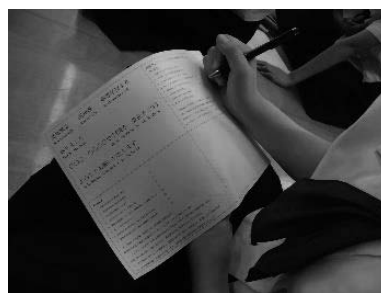


② 第12回～第14回：進路探究 ～WALKプラン～

1学期に作成したリサーチペーパー（個人論文）をもとに、それぞれの生徒が探究活動を続けた。

③ 第15回：講演Ⅱ プレゼンテーションスキル「劇団四季流 ヴォイストレーニング」

元劇団四季の清水美也子氏を講師として招き、ヴォイストレーニングを行った。印象チェックシートで各自が自分の特徴を知り、声・視線・話し方・姿勢など第一印象を良くする方法を実践形式で学んだ。振り返りシートを書き、講演の内容をまとめた。



④ 第16回：講演Ⅱ 進路講演「ココロとカラダ」

本校の生徒サポート部長、生徒指導部長、家庭科科長による講演を行った。よりよい進路実現のために、心身の健康を保つ食事の摂り方やメンタル面でのアドバイスを聞くことができた。生徒の振り返りシートでは、「しんどい時は溜めずに吐き出すことが大切であること」、「メンタルが弱いことはむしろ長所であること」、「効果的な間食の取り方があること」などが分かってよかったとの感想が多かった。

⑤ 第17回～第26回：進路探究 ～WALKプラン～

探究活動の継続を行った。振り返りシートを書き、1年間を振り返り、自身の活動内容を整理した。

4 成果と課題

(1) 成果

- ・生徒個人で探究テーマを設定し、リサーチペーパー（個人論文）の作成方法を理解することを通じて、思考のプロセスや探究活動の手順を学ぶことができた。また、リサーチペーパー（論文）の書き方や引用文献の使用法などを理解することを通して、大学等で研究を進めるうえでの基礎固めとなった。
- ・生徒自身の将来像が明確となり、探究した内容を大学や専門学校でさらに深めたいという志望を持つ生徒が70%となった。また、担当教員もリサーチペーパー作成のアドバイスや面談を通して、生徒の進路希望や適性などの把握につながった。
- ・リサーチペーパー作成の準備を2年次の終わり（春休み）から始めたことにより、短期間での作成ができるようになった。1年次からのリサーチ活動の積み重ねがあり、情報収集力も高まった。また、独自アンケートを実施したり、放課後や休日を利用して自主的に企業訪問、電話でのインタビューなどを行い、実態を調査し、分析を行うことに抵抗が少ない生徒が増えた。
- ・先述した「高知西高等学校SGH国際シンポジウム」では、学年の代表に選ばれたグループが探究の成果を発表することができた。自分たちの考えを、すべてのグループがこれまでの探究の成果として英語で堂々とプレゼンテーションをすることができた。また、中国上海から上海外国語大学附属外国語学校東高校と中国香港からルター校の高校生とのパネルディスカッションにおいても、英語を活用した活発な議論がなされた。

(2) 課題

- ・インターネットの情報のみが引用されているリサーチペーパーが多い。図書室の書籍や新聞・雑誌なども文献として利用するなど、さまざまな情報に触れることで視野を広げさせるとともに、信頼性も上げさせたい。
- ・リサーチペーパーの構成については理解できているが、8月以降の進路に関する深い探究では、それらを別物と捉えて十分には活かしてきていない。進路指導部および国語科教員と協議しながら、進路目標に沿った探究活動（小論文や志望理由作成を含む）になるよう指導に工夫を重ねる。

VI リサーチ活動及び交流活動

○ 実施リサーチ等一覧

	リサーチ・交流の種類		実施日	参加生徒数	引率教員数
1	県内	県内リサーチ	8月23日（金）	280	16
2	県外	大阪リサーチ	8月1日（木）～2日（金）	23	1
3		東京リサーチ	1月30日（木）	280	11
4	海外	シンガポールリサーチ	9月23日（月）～27日（金）	8	1
5		台湾リサーチ	9月23日（月）～27日（金）	10	1
6		タイリサーチ	10月26日（土）～29日（火）	5	1
7	交流	OCEAN's47	8月10日（土）	1	1
8		第4回高知県IYEO青少年 グローバルリーダー育成フォーラム	8月12日（月）	44	1
9		ユース育成プログラムin徳島	8月22日（木）	4	1
		食品ロス削減全国大会	10月30日（水）	3	1
10		ルター校（香港）交流	11月27日（水）	6	2
11		まつやま文化交流	12月14日（土）	14	2
12		S G H全国高校生フォーラム	12月22日（日）	5	1
13		第4回中四国高校生会議	2月8日（土）～9日（日）	4	1
14		第7回高校生「国際問題を考える日」	2月11日（火）	50	2

1 県内リサーチ

（1）日程・参加者

- ① 実施日 令和元年8月23日（金）
- ② 参加者 267名（1年生）及び引率教員16名（学年主任・ホーム正副担任・グローバル教育部）

（2）リサーチ先

訪問先	地域調査に協力してくださった皆様
龍河洞	【講師】 Café Ayam 中村大輔さん、白鳥恵利子さん 【ゲストスピーカー】 株式会社龍河洞みらい 古川陽一郎さん・塩坂望さん、公益財団法人龍河洞保存会 岡村錦一さん
久礼	【講師】 道の駅なかとさ 高橋大次さん 【ゲストスピーカー】 岩本こむぎ店 岩本拓馬さん、浜焼き海王 土居裕二さん・土居仁義さん、田中鮮魚店 田中博隆さん、四万十源流の里 青木慎也さん、地域おこし協力隊 青木貴子さん、ぜよびあ 田口瑠美さん、とみいの台所 富田明さん
梶原	【講師】 梶原町役場 立道斉さん 【ゲストスピーカー】 梶原商工会青年部 新谷正章さん、農家レストラン「くさぶき」 上田知子さん、青年団長 高橋元気さん、梶原高校の皆さん、ゆすはらジビエの里 山下翔太さん、雲の上の図書館 木村沙央里さん、しまがわSS / (株)四万川 空岡則明さん、YURURI 梶原芝田浩之さん・森山由貴さん
土佐山	【講師】 土佐山アカデミー 佐竹祐次郎 【ゲストスピーカー】 モント工房 山本堪さん、夢産地とさやま開発公社 大崎祐一さん・山本優作さん、杉本商店 杉本守さん、いっちいの木 中山久美さん、高知市農林水産部 田中俊次さん
香北	【講師】 株式会社わらびの 畠中智子さん 【ゲストスピーカー】 川上様総代会 甲藤英明さん、生涯米娘（にろうまいこ）千頭和子さん、キセツノオヤサイ葉屋 岩上隼人さん、集落活動センター美良布 村中大樹さん、茶づくりプロジェクト 五百蔵由美さん、やなせたかし記念アンパンマンミュージアム振興財団 仙波美由記さん

須崎	【講師】 有限会社丸共味噌醤油醸造場 竹中佳生子さん、特定非営利活動法人 暮らすさき 大崎緑さん 【ゲストスピーカー】 須崎市 西山雅子さん・高橋隼人さん、ねっことそら 谷和香菜さん、九石大敷組合 笹岡祐貴さん、須崎商工会議所 川上清英さん、株式会社みなみ丸 森光貴男さん、すさきまちかどギャラリー 川鍋達さん
大野見	【講師】 大野見七面鳥生産組合 松下昇平さん 【ゲストスピーカー】 高知精工 尾崎清隆さん、まちだ農園 町田真之介さん、大野見集落活動センターみなみ 岡田三枝さん・津野高興さん、家畜保健衛生所 松崎克彦さん・中西慶太さん・宮岡美樹さん、中土佐町大野見庁舎 植田恭平さん
日高	【講師】 特定非営利活動法人 日高わのわ会 安岡千春さん 【ゲストスピーカー】 日高村役場 戸梶泰彰さん・安岡周総さん、地域おこし協力隊 小野加央里さん、大阪なにわ道頓堀たこやき 戸梶和代さん、日高わのわ会 松岡飛鳥さん

(3) リサーチ先とリサーチ内容

① 県内リサーチ事前学習

7月18日（水）、県内リサーチに向けた事前学習を行った。インターネット等を利用して訪問先地域やインタビューをさせていただく方々についての情報収集および当日質問する内容について準備した。

② 県内リサーチ当日

8月23日（金）、各ホーム県内8地域を訪問した。それぞれの地域において、午前中は5月の講演で学んだことを講師の方へ発表し、意見をいただくとともに、地域の散策を行った。午後からは、地域で活躍されている方々に集まっていただき、インタビューを行い、地域の方々の想いや生活、仕事などについての情報を収集した。



③ 県内リサーチのまとめ

8月28日(水)と9月25日(水)の2回のグローバル探究の授業で、県内リサーチの訪問企業等で学んだことをグループ毎にまとめた。まとめ方は、グローバル探究Ⅰの取組内容で示したとおりである。

(4) 生徒の感想

- ・私たちは生まれも育ちも高知の人がほとんどで、移住してこられた県外の人意見を取り入れる機会がなかったので、私たちにとっても貴重な体験になりました。特に私が印象に残っているのは「高知は何もないのが魅力」という言葉です。最初に聞いた時は衝撃を受けましたが、確かにそれは事実であり、何もないからこそできることや、やるべきことを探していけばいいのかなと感じています。
- ・インタビューをさせていただいたことで、たくさんことを学びました。それは、人と人とのつながりです。私は人と人とのつながりを軽く考えていたのだと思います。ですが、今回のお話を伺って、つながりがなければ成り立たないことが多くあることを知りました。地域などでは特に、つながりが必要になってくると思いました。例えば、人とのつながりがなければ楽しく過ごせないし、店などを経営したところで誰もこないと思いました。つながりを見つける、守るために大事なことは、日々の地道な挨拶や、気配りが大切になってくると思いました。
- ・一度梶原に行ったことがあって、もっと梶原について知りたいと思い梶原に行くことに決めました。実際に梶原に行ってみて思ったことは、空気が綺麗で、周りの人はとても優しい人ばかりでした。行きたかった図書館には、行けませんでした。青年団の方や、ガソリンスタンド、ジビエの方などの話を聞いて、とても勉強になりました。青年団の方の話では、その人の人生の話や、梶原町に対する思いについて語ってくれました。とても勉強になりました。
- ・今回お話を聞いて私たちは高知県の中にも人口減少や産業の少なさなどの課題を抱えている地域があるということを知ることができました。高知県には土佐山以外にもこういった課題を抱えている地域があるので、高知県全体の活性化につなげるためにもまずは自分たちにできることを考えて行動していきたいと思います。
- ・私達が、課題を抱えている地域に行き、地元の方にお話を伺える機会は数少ないので、とても貴重な体験になりました。小さな地域の課題から大きな地域の課題まで、詳しく聞くことができ、自分達もじゃあこうすればいいのではないかな、などと積極的な意見をたくさん出すことができました。特に気になった課題は、過疎化についてです。高校などの施設や公共物の少なさが若い人や学生が少ないことの過疎化に繋がっているのだと、現地に行き気付きました。
- ・須崎に住んでいる方々は、私たちがリサーチをしている途中にも、手を振ってくださったり、言葉をかけてくださったり、温かく迎えてくださって、本当に人が温かくて優しい町だな、と思いました。そして、須崎の方々は、昔ながらの街並みを守ろうとしていらっしゃり、伝統を受け継ぐためにどうすればよいか考えていらっしゃいました。私たちは、そんな須崎の魅力を存分に引き出し、地域創生に繋がられるよう、頑張っていきたいと思っています。
- ・今回のリサーチで感じたことは、「ほのぼの大野見」というスローガンのように、とても穏やかな静かな場所で、今を受け入れて、地区の皆さんも暮らしているという印象を受けました。「無理しない」や「いいところと悪いところも考えようである」という地域の方の言葉のように、外に売る、という気質ではない大野見の特徴をどういう風に生かし、活用するかが、大切になってくるなと感じました。
- ・県内リサーチの取組でよかったことは、普段あまり行かない場所のことが知れたことや、高知の抱えている課題を肌で感じる事ができたことです。自分が今まで知らなかったことを知ることは、自分の将来や今後の高知の問題解決にも役立つと思います。次に、地域について感じたことは、思ったより過疎が進んでいることです。人を呼ぶにしても、呼び込む材料が少ないし、人も少ないので行動を起こそうにも起こしにくい環境だと思いました。このような状況にも関わらず、他にできることはないかとか、地域のためにできることを常に考えられているところが素晴らしいと思いました。地域の人もととてもあたたかく、とてもいい地域だと思いました。だから、今ある課題を解決することができれば、よりよい地域になると思います。

(5) 成果と課題

① 成果

本年度は、職業人講話と絡めて、県内リサーチを行うことができた。地域創生モデル案作成に向けて、できるだけ多くの地域の方々の情報を収集し、それを整理するというプロセスを踏ませることができた。探究力を育成する、しっかりと事実に基づいて地域創生モデル案を考えることができた。

② 課題

地域の方とのやり取りが大変煩雑であり、県内リサーチ担当者を決めて実施したほうが良い。また、グローバル探究Ⅱで地域創生をテーマに選択する生徒を増やす工夫が必要である。

2 大阪リサーチ

(1) リサーチの目的

地元高知では接する機会のない企業や大学・施設を訪問し、大局的な視点に立って活動される方々から専門的な話を聞くことで、生徒の視野を広げ、課題発見力及び創造的思考力、並びに課題解決能力等の向上を図る。

(2) 日程・参加生徒

- ① 日程 8月1日(木)～2日(金)
- ② 参加生徒 23名(1年生10名、2年生13名)

(3) リサーチ内容

- ① 高知県大阪事務所(8月1日 13:00～14:00)

高知県産品を関西圏・中部圏で売り込む高知県産品外資公社の大阪グループを訪問し、大阪事務所の方から説明を受ける。高知県産業振興計画に基づき、高知県産品をどのように付加価値をつけて販売するか、どのように販路を開拓するか、移住者や観光客をどのように拡大するかなどについて探究する。

- ② 大阪大学法学部(8月1日 15:00～16:30)

大阪大学法学部教授の北村亘先生から、日本における地方創生というテーマで、地方創生とは何かについて説明を受ける。また内閣府の地方創生事例集をもとに高知県や他県にある地域の成功例や失敗例などからより良い地方創生について探究する。

- ③ 江崎記念館GLICO MUSEUM(8月2日 9:45～11:45)

創業者江崎利一が栄養素「グリコーゲン」に出会ってから今年で100周年の江崎グリコで、会社や商品の歴史について知り、企業理念や経営方法について探究する。

- ④ 日本IBM大阪事務所(8月2日 13:00～15:00)

コンピュータ関連製品およびサービスを提供する、世界170カ国以上で展開するIBMの職員から学ぶ。昨年、ビジネスのイノベーションを促進する「アジャイル・オフィス」に生まれ変わった大阪事務所では、どのような仕事をしており、どのようにしてイノベーションを起こそうとしているのかなどについて探究する。

(4) 成果と課題

- ①成果：本年度は、窓口となっていたいただいていた方が転勤となり、サントリーの訪問は叶わなかったが、代わりに江崎グリコとのつながりができ、本年度も1日目は県外での高知県の取組、地方の状況を、2日目は時代の先端に行く企業の取組等を学習することができた。

- ②課題：どうしてもタイトなリサーチ時間設定になってしまうことや、帰着時間が遅くなってしまうこともあり、大阪に行かなければ出来ない取組に精選したり、行った際のリサーチ活動をより有意義なものにするための事前学習の充実などを図っていきたい。

高知県
大阪事務所



大阪大学
模擬法廷





江崎記念館GLICO MUSEUM



日本IBM大阪事務

3 東京リサーチ

(1) 趣旨及び目的

国際人として大局的な視点に立って行動できる人間の育成を到達目標とし、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成を図る。食を活かした地域創生モデル案を作成するにあたり、さらに探究能力を高めるための調査研究を実施する。

(2) 日程・参加者

- ① 実施日 令和2年1月30日(木)
- ② 参加者 276名(1年生、58グループ)

(3) リサーチ実施企業(五十音順)

フタムラ化学株式会社	株式会社C I Jネクスト	東洋水産株式会社
兼松株式会社	マルトモ株式会社	公益財団法人 味の素食文化センター
株式会社ゼンショーホールディングス	株式会社TATSUMI	株式会社アイレップ
株式会社DDホールディングス	トモシアホールディングス株式会社	Yakitori&Wine Shinori
株式会社シジシージャパン	バイオジェニック株式会社	オリザ油化株式会社
J A全農ミートフーズ株式会社	株式会社世田谷自然食品	キリンホールディングス株式会社
大塚製菓株式会社	7&iホールディングス伊藤研修センター	株式会社ファームランドトレーディング
アクトインディ株式会社	ステップアップ塾	株式会社ロボット
三愛石油株式会社	株式会社味香り戦略研究所	楽天株式会社
アクサ損害保険株式会社	ヤフー株式会社	e-Janネットワークス
アニコム損害保険株式会社	東京映画社	株式会社SHIFT
伊藤忠食品株式会社		

(4) 内容

① 事前学習

訪問先企業に関する調べ学習を行い、インタビュー項目を作成し事前に訪問先へ送付した。また、行程表を作成し、当日の発表用プレゼンテーション資料を作成した。

② リサーチ内容

訪問企業の取組等の説明を受けるとともに、1年をかけて作成してきた高知県の「地域創生モデル案」のプレゼンテーションを行った。担当の方々からいろいろとアドバイスをいただき、成果発表会に向けて大変意味のある学びを得ることができた。



e-Janネットワークス



株式会社アイレップ



株式会社C I Jネクスト



アクサ損害保険株式会社



伊藤忠食品株式会社



兼松株式会社

(5) 生徒の感想より

- ・私たちがマルトモさんに質問をしたときの回答からです。マルトモさんはベルマーク運動として、食育活動を、主に小学生を対象に行っているそうなのですが、小学生相手には座学ばかりではなく、試食や実習などの活動を入れて、飽きさせないようにしているそうです。私はこのことから、プレゼンをする時は、自分たちが伝えたいことだけを考えるのではなく、聞き手の立場によって伝え方を工夫することも大切なのだと気付くことができました。
- ・改めて、人の目の前で自分たちの案を発表するという難しさを感じました。「なぜなぜなぜ」の三段階を論破出来るようにしなさいと言われ、今後意識したいと思います。また、街中でも内容を広げることができるような観察もするべきだと思いました。
- ・私はこれまで、東京は働き手に困ることがなく、逆に働き手が充実しすぎて就職難になるくらいだと思っていたのですが、東京でも働き手不足は課題としてあるということが分かりました。また、人にその地域の良さを知ってもらいたいなら、自分がその地域に住みたいと思えるにはどうすればいいかを考えてみるのもいいかもしれないと言われて、確かにその通りだなと、新たな発見をすることも出来ました。
- ・今回の訪問を通して発表の仕方や伝え方、どのようにDDDホールディングスさんが企業活動をしているかを知ることが出来たのがとても良かったと思います。そこからどのようなイベントに参加したらいいのか、高知をいい場所だと思ってもらうためにはどのようなことが出来るのか、みんなが興味のあることにどのように変換することが出来るのかなど自分たちの地域創生案に置き換えて考えることが出来ました。たくさんのヒントの中から、様々な方法があり考え方ひとつで180度内容を変えることができることも分かりました。これを機に自分たちのプレゼンで曖昧だったところをよりハッキリさせたいものにしたいです。

(6) 成果と課題

東京リサーチには、二つの学びの側面がある。一つは、キャリア学習の側面である。日本各地や世界各地で幅広く活動している企業や社会の課題を解決しようと取り組んでいる企業など、現在注目されている企業を訪問し、そこでの取組を学習することによって、生徒が社会やそこでの自身のキャリアについて理解を深めることである。

もう一つは、リサーチ力向上の側面である。高知を知らずかつ社会の第一線で活躍している大人に「地域創生モデル案」をプレゼンテーションすることによって、内容のブラッシュアップやスキルの向上が望めるということである。上の生徒たちの感想でその両方をしっかりと学べていることが読み取れる。

また、企業の方々からも「大変興味深く聞かせてもらった。来年も機会があれば来てもらいたい。」「生徒の発表を聞かせてもらったが、内容が非常に具体的で、私たちにとっても新たな学びとなる発表だったと感じている。」といった良いご意見をいただいた。

課題としては、昨年度から引き続き東京リサーチでの訪問先が、生徒の探究テーマと乖離している状況を少しでも解消できるように、新たな訪問先の開拓を随時行う必要がある。また、企業側とのやり取りが煩雑であり、担当者を決めて実施していくことが重要である。

4 シンガポール・リサーチ

(1) 趣旨及び目的

マレーシアから独立して54年という若い小国家ながら経済発展著しく、一人当たりの国民所得が日本を抜いてアジア第一位であるシンガポールは、独立後も安定した長期政権下で、英語教育を軸としたエリート教育を行い、人材育成に国家として力を入れている。また、日本やアメリカなどの先進国企業の国際加工基地として、また、東南アジアの金融センターとして現在も発展し続けている。日本からの出店や、高知県産品の輸出も多く、現地には高知県事務所があり、私たちの活動に関する様々な援助を得つつ、海外企業や現地大学におけるリサーチ活動を行うことができる。また現地の高校生との意見交換も可能であり、企業および教育機関の両側面から活動することができる。以上より、海外リサーチを実施する場所の一つとして選定している。グローバルな視点から様々な事柄を調査し、「世界の諸問題への持続可能な解決策の提案」のヒントとする。また、日本人としてのアイデンティティを身に付けたグローバル人材の育成を行う。



(2) 日程

	月日	曜	活動	時刻	交通機関	摘要
1	9/23	月	高知空港発 羽田空港着 羽田空港発 シンガポール着	7:10 8:20 11:30 17:35	JL490 JL37	到着後、国際線ターミナルへ移動 入国後、地下鉄にてホテルへ
2	9/24	火	シンガポール	9:00-12:30 14:30 - 18:00 19:00 -	地下鉄 地下鉄・バス タクシー	A★STAR 訪問、井上雅文先生講後 fusion world で先端技術を見学 昼食、移動 Jurong Bird park 見学、動物看護師 渡辺恵子さんに取材 市内レストランにて、井上雅文先生、 資生堂シンガポール支社アジア チーフマネージャー松元有羽子さんに 取材、夕食
3	9/25	水	シンガポール	10:30-12:00 15:00-17:00	地下鉄 地下鉄・バス	三菱商事シンガポール支店訪問、会 社概要説明と、シンガポール支店リ ン タイフィインさんらに取材 ブギス駅周辺で昼食、見学 マリーナバレーで水に関する学習 施設を見学 マリーナベイサンズ周辺で夕食
4	9/26	木	シンガポール シンガポール発	9:00-10:30 10:30-15:30 17:30 21:50	バス 地下鉄 JL36	JETRO シンガポールにて講義、取材 昼食自由見学(チャイナタウンなど) チャンギ空港着 チャンギ空港発
5	9/27	金	羽田空港着 羽田空港発 高知空港着	5:50 9:25 10:50	JL491	入国後、国内線ターミナルへ移動 解散

(3) 実施日・参加者

- ① 実施日 令和元年9月23日(月)～27日(金)
- ② 参加者 8名(2年生)、引率教員1名

(4) 実施内容

① 事前学習

- ・グループ探究の課題決定に向けた調べ学習からグループ探究の課題決定

昨年度のシンガポールリサーチのテーマからは一度離れ、日本の義務教育における英語教育の問題と、少子高齢化の進む日本やシンガポールの高齢者の生き方について調査し、日本は今後どのように展開していけばよいかを考えることとした。

- ・課題設定に向けた高知県内の諸所へのリサーチ活動

日本の義務教育における英語教育の問題を探究するグループは、シンガポールの英語教育に造詣の深い、高知大学人文社会科学部 今井典子教授へ聞き取り調査を行い、また、高齢者の生き方について探究するグループは、高知県地域福祉部高齢者福祉課 河原一郎さん、障害保険支援課 朝比奈青里花さんへ、また高知県立大学看護学部老人看護学 竹崎久美子教授、地域看護学 小澤若菜講師へ聞き取り調査を行った。また、高知市役所への聞き取り調査や、地域で定期的に開かれる百歳体操へ参加し、参加高齢者に聞き取りを行った。

- ・英語によるインタビュー内容の事前作成

三菱商事でインタビューを行うための英語の質問作成と、ジョロンバードパーク、ジェットロシンガポールでインタビューを行うための質問内容の整理を行った。

- ・プレゼンテーション資料作成

渡航前の事前調査の内容を整理するために、プレゼンテーション資料を作り、発表した。

- ・個人探究のテーマ設定

グループ探究以外に個人で興味のある内容を調べるための簡単なテーマを設定した。

- ・一昨年度の参加者との意見交換

- ・シンガポールの訪問先についての事前調査

インターネットや文献を用いて事前調査し、旅のしおりを作成した。

② 訪問先

9月24日

- ・Agency for Science, Technology and Research (A★STAR)

A★STAR 研究所のバイオポリスマトリックスビルの講義室で、井上雅文先生のご経歴と、世界中に流行してきた感染症、その感染症に合わせた井上先生の開発技術について、説明をいただいた。今まで行ってこられたプロジェクトは、SARS、HIMIのような飛沫感染による感染症や、ジカウイルス、デング熱などのように蚊によって媒介される感染症にかかった時に、短時間で感染を判断できる方法を世界で初めて開発し、莫大な利益をシンガポール政府にもたらした。その大きな貢献が新聞にも取り上げられるような大変有能な科学者である。また、シンガポール自体についてのご説明もいただいた。



世界競争力は2019年に、日本が30位なのに対して、シンガポールは1位と大きな経済競争力を持っている。立地条件が圧倒的によく、周辺各国（アジアやオーストラリアなど）との距離が飛行機で6～7時間以内という有利な場所にある。また、知的財産の保護がしっかりなされ、公用語が英語、税負担が軽く、高額所得者でも15%程度など、住みやすい環境があるなど、条件が揃っている。Agency for Science, Technology and Research (A★STAR)は、将来の経済発展と、生活の向上のための革新的なテクノロジーと科学の発展を目指している。また、科学や技術革新における世界のグローバル・リーダーとなるミッションを持ち、研究を推進している。特に、井上先生のチームは治療と診断の分野を研究されている。診断がいち早くなされると、治療にもいち早く取り組みられ重症化を抑えることができる。死亡率を下げることも重要であると同時に、重症化による労働者の労働活動が停止することによる経済損失も防ぐことができる。また、動物を殺す最も多い生物は、蚊であり、蚊による感染症対



策を行うことが、世界中の死者を減らす重要なポイントである。そのために、シンガポールは蚊の研究も行い、また駆除も徹底的に行っている。最後に海外にいる井上先生から、今日本がどうしなければならないか、高校生がどうするべきかお話いただいた。「国際化、経済発展、科学技術の発展のためには語学（日本語と英語）は必須条件である。言葉を一つ習得すると門が一つ開く。高校生は、いま、全ての教科を学び、勉強し頭脳を徹底的に鍛えよ。また、将来自分がどうなりたいかを頭に描こう。外に出てたくさんの人と出会い、たくさんのチャンスを得よう。勉強にも研究にも体力が必要で、体力を鍛えよう。また、やり抜いて達成感を得る、ポジティブになって脳をよく機能させよう。」大変な競争社会で、成功した井上先生の言葉は、とても説得力があった。その後、フュージョンワールドへ移動し、井上先生のご発明以外にも、シンガポール政府が力を入れている各分野における最先端発明技術を見学させていただいた。

・ Jurong Birdpark

午後は、400 種 5,000 以上の鳥が集められているアジア最大のバードパーク、ジョロンバードパークを見学に行った。20.2 ヘクタールという広大な公園内には鳥の種別ごとの展示、加えて1日に数回ショーイベントがある。園内には中南米を原産とする不思議な形をした熱帯植物ヘリコニアが108種あり、その内60種がヘリコニアウォークに植えられていた。頭の羽根が繊細なカンムリバトやエサによって赤い羽根になっているショウジョウトキや、スプーンようなくちばしのベニヘラサギなど、なんとなく馴染みのある姿の鳥や、南米のボリビア、ペルー、ブラジル、アルゼンチン、パラグアイのみに生息しているオニオオハシのカラフルで大きくくちばしがとても面白い鳥まで見て回れないほどの多種の鳥がいた。ショーでは、高度に訓練されたオウムが、飛翔しながら小さな輪をくぐったり、玉入れ競争をしたり、トリの頭脳の高さを実感した。17時から、園内のカフェテリアで、動物看護師の渡辺恵子さんに、シンガポールで動物看護師としてお勤めになるまでのお話をお伺いした。ご出身は静岡の沼津市で高校生の時にハワイへの短期留学をした時から、海外で働こうと思い立ったそうだ。短大卒業後、アメリカやカナダへ留学し、アメリカで動物看護師が資格を必要とする一つの職業として存在することを知り、小さい頃から動物に関わるのが夢だったため動物看護師を目指し、カレッジに学び直しに行った。その後、水族館職員の募集のあったシンガポールを受け、落とされたものの諦めずに1年越しで採用されたそうだ。自分でやろうと思ったことなら、遠回りをするかもしれないが、絶対にかなう、求め続けることが大切だと教えてくださった。その後の質疑応答では、渡辺さんの2人の子供が通っている学校の様子や、シンガポールの語学教育の具体的な現状を教えていただいた。やはり、学力競争が激しいが、上位ではないクラスでは授業に取り組む態度など日本と同じような問題が存在することも分かった。学力偏重によるひずみも出てきていることが分かった。

9月25日

・三菱商事 シンガポール支店

三菱商事シンガポール支店では、地域戦略部のリンタン・フインさんとクリンセン・ソさんに会社概要や関連会社の説明を英語でプレゼンテーションしていただいた。三菱商事は投資、貿易事業だけでなく、各段階で顧客のニーズに応じ必要なところに機能を供給する総合商社へ変化を遂げている。従業員は本社から、子会社と関連会社に派遣され1～5年で駐在する。地域戦略部は、未来の事業涉外提携を見据え、政府機関や、貿易機関、大手企業や教育機関（大学）やシンクタンクとネ



ットワークを構築している。シンガポールにおける事業投資先の活動報告を聞いたり、シンガポールやASEANに影響する政治経済や、技術の傾向の取材や分析を行い、情報を蓄積し、その地域における戦略を考えていく。特に、政府との関係は最も重要で、政府の方針によって会社の方針も随時変更するそうである。また、一次産業は安定しないので、その代わり、川下領域(直接顧客に具体的なサービスを提供する部分)とサービス分野に力を入れることで、安定性の高い事業展開を行う。ビジネスにおいて、一つ失敗したら、一つを必ず成功させるようにしているそうである。シンガポールを拠点として、消費財分野において、パートナー（例えば、東洋タイヤ、ダイオー製紙、日清やキューピーなど）との製造、販売事業サポート、新規市場開発、マーケティング支援も行っている。また、小売り、流通産業における社会的課題の解決を目指し、小売実店舗網を展開し、より確実に商品が流通することを実現化する。また、現実とデジタルの融合を通して、消費者にとって利用しやすい、価値の高い小売、物流の形態を構築することを目指している。複合的に都市開発にも関わり、リースなどの新規開発事業、有力パートナーの発掘を行いながら、アジアを中心に非公開株をもつ有望企業を中長期的に支援し、企業価値を高めるミッションを行っている。自動車分野においては、インドネシア、タイで生産された車両の新興市場への販売、マーケティング活動に注力している。デジタル化やCASE（接続性、自動運転、シェアリング、電動化）の伸展による業界の構造変化をとらえて、三菱のビジネス基盤をいかし、ヒトやモノの移動に関する課題を解決するビジネスモデルの構築を目指している。また、シンガポール国内の交通システム、発電所、水処理プラント工事、プラント向けコンプレッサー納入などのEPC事業（企画から施工、試運転まで）を展開している。天然ガスや石油化学事業、鉄鋼、機能素材に関しても事業を展開している。このように、自社の経営成長のみならず、ASEANの社会的、経済的発展にも大きく影響力を持つ、大企業であることが分かった。質疑応答の時間では、各探究グループに分かれ、質問を行った。

・マリーナ・バラージ

マリーナベイからシンガポール海峡に注ぐシンガポール島の端にあるマリーナバラージを訪問した。マリーナベイの水量をコントロールするダム施設で、2階には、施設的环境に対する取組や施設の仕組みなどを楽しく体験できるサステイナブル シンガポール ギャラリーがあり、そこで水や環境について学んだ。マリーナバラージの屋上は天然芝で屋上緑化されており、シンガポール緑化政策の好見本となっている。例えばソーラー・パークに設置されているソーラーパネルは、

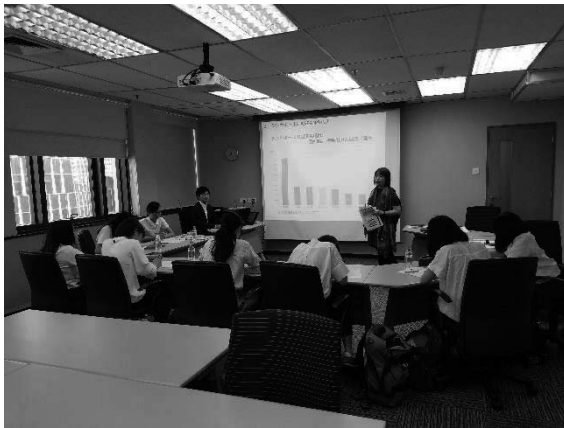


シンガポール最大規模のもので、400枚を超えるパネルが、バラージで日中の照明に必要な電気を供給している。シンガポールは、使用する水をマレーシアから買うしかなく、政治的にも大きく利用されてきたが、シンガポール政府の様々な政策や技術開発の推進による再生水の利用や、貯水施設の増設、海水の淡水化などで、今や水自給率は70%まで上がっている。しかし、それでも、水自然を大切に使うための取組を行っている。

水需要を管理するための水の希少価値を反映した価格設定や水効率のラベル付け、水効率の最低基準の設置などを行っている。また民間とも協力して、啓もう教育や節水を促すポスターを町中に貼っている。今や、水の問題だけにとどまらず、シンガポールはエネルギーの効率化を目指し、様々な開発を行っている。水再生プラントとは廃棄物管理施設を併置することで、エネルギーと資源の回収を最大限にして全体的な環境フットプリントを最小限に抑えている。また、輸送部門での炭素ガス削減効率の向上のため、公共交通機関の利用の促進や、自動車利用人口の増加抑制、自動電気自動車の試験運転の推進を進めている。そのためシンガポールでは、2015年から2030年までに、自動車リース移動事業を355kmから700km以上に拡大する。また、MRTを拡大し、朝のピーク時の公共交通機関利用率を2015年の66%から2050年には85%まで増やすことを目標としている。個々の家庭でもスマートホームテクノロジーを取り入れ、居住者に効率的エネルギー使用を行わせることで、エネルギー消費を抑えようとしている。限られた土地に、外国人労働者の受け入れによって、人口増加が起こり、それによる生活資源を巡る問題や、エネルギー消費の問題が起こっている。この都市の人口問題を解決する方法を、シンガポールは模索し、その手法を他国へ売り出すことを考えている。そのために、どこよりも早く技術の開発が必要であり、どこよりも早い事業展開が必要となる。現在のシンガポールの経済発展の理由はここにもあると思った。

9月26日

・JETRO Singapore



アナリストの本田智津絵さんとリサーチャーの安野亮太さんにシンガポール全般についてのお話をお伺いした。シンガポールは、719 km²の東京 23 区よりやや大きい面積(高知県の10 分の 1)を持ち、人口 561 万人の国(高知県の人口の8 倍)で、高知県の人口密度の 80 倍である。民族的には、中国系 74%、マレー系 13%、インド系 9%、その他の国も混ざった多国籍民族が集合した国家である。言語は英語が第一母国語で、中国語、マレー語、タミル語が第二母国語である。宗教は、仏教、イスラム教、ヒンドゥー教、キリスト教など多様である。

る。GDPは3,239 億ドルで、一人当たりGDPは57,713 ドル(2017 年)である。シンガポールでは、近代的な都市なのに緑溢れるイメージを大切にするために、町中にたくさんの街路樹を植えるというイメージ戦略を政府が取り、他国からの観光客の誘致や、ハイソサイエティな人材の移住に成功した。資源の少ない小さな島国で、食糧の9割以上を輸入に依存し(自給できているものは卵27%、魚10%など)、発電燃料のほぼ100%が輸入に依存している。水の需要も3割が輸入で、あとは貯水池利用でしのいでいる。埋め立てを続け、5年で、1.2 倍の国土を拡大し、2030 年までには、722 km²から760 km²まで拡大する予定だそう。シンガポールの経済発展は、独立わずか50 年にして急成長し、特に1990 年のエレクトロニクス、化学の高付加価値製造業の誘致強化から、2000 年には知識集約的な産業誘致、バイオメディカル産業の振興、R&D活動誘致の政府の方向性で、GDPは一人当たり57,713 ドルにまで成長した。日本は、38,440 ドルで、シンガポールには追い抜かれている。シンガポールはASEANのハブで、シンガポールに支店を置く日系企業は、今後ASEANの人口や、GDPの急成長ぶり(2030 年には人口の3 分の2以上が中間所得層に移行すると言われていいる)から、日系企業はASEANに注目している。6 年という短いスパンでシンガポール政府は、経済政策を見直し転換していくフィードバックの早さと、優秀な人材の育成が急成長を支えている。国費のうち、教育への投資は、国防、輸送に続き3 位で132 億ドル(2019 年)である。そのため受験競争も激しく、小学校卒業試験で、大学に行くコースか、職業訓練学校に行くコースかが決定される。また、大学進学コースでも、うち3 割の生徒しか地元大学に進学できない大変厳しい学力社会となっている。世界大学ランキング23 位のシンガポール大学は、シンガポールのエリートしか進学できない上に、中国や他国からの更なるエリートを就学資金を提供する形で、シンガポール大学へ誘致し、まさに世界の高知能な人材をシンガポールに集めることに成功している。日本企業も、世界経済危機以降、シンガポールへの進出が加速しており、世界企業的にみても、シンガポールをASEANの地域統括拠点として活用したり、市場向け研究開発拠点としても活用している。ショーウィンドウ効果が期待できる市場なのである。シンガポールの経済の大きな柱は、貿易で輸出の半分は積み替え輸出である。最大の貿易相手国は、中国である。また、サービス業が7 割以上を占めている。和食が近年はブームで、1,176 店舗も存在するが、そこに使われる食品の日本からの輸入は2.9%にとどまっている。しかし、共働き世帯が多く、食費に占める外食の比率は6 割以上と高い。また、日本はシンガポール人にとって人気の旅行先である。シンガポールは、日系企業だけでなく、欧米の統括拠点となってきており、ダイソンは本社をシンガポールに移したそうである。また、税が安く、事業を始める手続きもオンラインで行えるため、スタートアップの支援を行い、様々な国からのシンガポールでの起業を助けている。しかし、一方課題もある。ビジネスを行うにおいて、土地代や人件費が高く、かつ人材が獲得できない点が大きな課題である。また、世界でも生活費が高い。そのような環境のもと、子どもを産み育てることより、現在の生活の質を維持することを選択する人も多く、少子高齢化が急速に進んでいる。シンガポールの経済の急成長を支えた要因の一つに、外国人労働者の存在があり、国に占める外国人労働者が2010 年で大きく増えた。職種としては、建設労働者が一番多いが、次が家事代行業となっている。しかし、その人口増が、国民の仕事を圧迫したり、政治問題になりつつある。リーシェンロン首相が、2014 年11 月24 日の

スマートネーション構想開始発表を行い、シンガポールが目指す未来について言及した。シームレスなテクノロジーによって全ての人に刺激的な機会をもたらし、意味のある充実した生活ができる国を目指すというものである。しかし、その目的の中には、現在外国人労働者が行っている、バスの運転や単純労働について、AI化自動化で効率化を進め外国人労働者を減少させようとするものである。人口増加によって、住宅の不足や、物価の上昇を招いているため、低賃金で生活しているシンガポリアンの生活を圧迫し、外国人労働者の移入に不満が集まっている現状がある。今後は、日々の生活においてセンサーのネットワークやスマートデバイスによって快適でサステナブルに暮らすことができる、そしてテクノロジーによってコミュニケーションの中の人々が互いに簡単に、密接に通じ合うことができることも目指す。すでに、現実化されている部分もあり、例えば、キャッシュレスを目指し、携帯電話番号が分れば簡単に送金できるサービスを開始したり、ホーカーセンターで電子支払いしたりすることが可能になった。また、国土全土にセンサーを設置し、国内街灯全11万本に監視カメラとセンサー設置を行い、治安監視、交通データ、気象情報などの収集解析を行っている。また、自動運転車の公道での実証実験や、公共輸送に無人自動車の導入を計画、金融センターとしての地位強化に、フィンテック導入促進を進める。国家デジタル身分証明書導入を行い、スマートネーション国家を目指していくようである。今後も急速に変化を遂げることが予測される。

③ 事後学習

- ・国内リサーチ活動

日本の義務教育における英語教育の問題を探究するグループは、帰国後、自分たちの立てた仮説を確認するために、母校である小中学校6校の児童と教員にアンケート調査を行った。また、高齢者の生き方について探究するグループは、「WWL・SGH×探究甲子園 2020」のポスター発表の応募に向けた校内選考を経て、発表枠を勝ち取った。

- ・12月22日（土）「2019年度全国高校生フォーラム」での英語でのポスター発表

東京国際フォーラムで開催された2019年スーパーグローバルハイスクール全校高校生フォーラムに参加し、「シンガポールに学ぶ日本の英語教育改善策」について5名が英語によるポスター発表を行った。

- ・2月13日（木）令和元年度SGH成果発表会での口頭発表

本校のSGH成果発表会で、「シンガポールの高齢者の寿命を延ばそう」について探究したグループが代表として選出され、それぞれ4名が15分のプレゼンテーションを行った。

(5) 生徒の感想より

- ・言語、特に英語というものがシンガポールにおいて仕事、学業の基盤であるということがよく分かった。しかし同時にバイリンガル教育制度というのは、完璧な実現が難しく、現状は、母国語（親のルーツの言語）と英語の両方がペラペラに話せるシンガポリアンは、少数という課題がある。言語に限らず教育に国があげて力を入れているシンガポール（国家予算の投入額は防衛費について二番目に多い）でも、2言語話者としての人材が少ないことを考えると、日本で2言語政策を行うことは難しいと思う。Agency for Science, Technology and Research (A★STAR) 井上先生の講義で、若い世代の日本人が海外に留学や渡航することが少ない傾向にあるお話を聞いた時、日本人の性格として内向的であることがあげられるので、その性格そのものが海外とのつながりや言語への意欲の低さにあらわれているのではないかと思った。ただし、日本、海外関係なく言語（英語）は武器というよりはツールであるので、一概に「英語を使えること」と「グローバル人材」を結び付けることはできないのではないかと感じた。JETROシンガポールでは、公立高校入学後、勉強についていけず退学してしまう人が多数いる。シンガポール国内では、数少ない大学の一つである国立シンガポール大学は、世界大学ランキングで23位（東京大学42位 2019年）という難関さである。その大学に進むためには小学5年の共通試験で選抜された進学コースを実施している公立中学、公立高校とへ進学して勉強する必要がある。その勉強についていけず公立高校を退学したあとは、私立高校に再入学したり、職業訓練学校に入学したりすることが多い。エリートとそうではない人との格差は目に見えているより大きいと思った。
- ・多民族国家というものをまず最初に感じた。ホテルやMRT（地下鉄）、デパートいたるところでそれを感じた。人口の7割が中華系の人ということもあり、現地の人の会話は英語より中国語を話す人が多いように感じた。また飲食店も、中華料理が多く、私たちは一日の中で一食は中華だった。料

理は美味しかったが、野菜がなく、色どりが乏しく健康的な食事がとれていなかった。シンガポールは水が貴重なため、レストランや屋台に水はなく買わなければならなかった。食の面では日本の方が健康的であり良いと感じた。相当の先進国であるということだ。いたるところ高層ビルが立ち、街路樹がたくさん植えられた街並みが整備され、きれいで圧倒された。政府が「庭園の中の都市」づくりを推進し、街路樹を増やし公共交通を利用させるために路線を広げるなど、エネルギー効率化政策も推進するなど、環境に配慮した取組が行われている。小学校卒業時、12歳で受ける PSLE というテストでこれからの人生が既に決まってしまうことやバイリンガル、トリリンガルは当たり前ということに驚いた。日本との学習に対する熱意や、重要性が大きく違っていた。三菱商事では、説明が全て英語で聞き取ることはできたが、理解するのが難しかった。単語すら分からない所があり、もっと勉強しないといけないと思ったので、これからの英語の授業に対するやる気が出た。

(6) 成果と課題

① 成果

- ・井上雅文先生のおかげで、三菱商事の社員の方にお話をお聞きできる貴重な時間を設けていただけ、世界的な企業で働く方たちを実際に間近で見ることができた。通常の高校生が体験することができない本当に貴重な体験をさせていただけた。
- ・訪問先で英語が話せないと重要な情報を聞き取れないという悔しい経験をしたので、体験的に世界における英会話の必要性をはっきりと認識することができた。
- ・井上先生のお話のおかげで、英語はツールで、語学力はもちろんのこと、自分の専門性を持つことの重要性を認識できた。

② 課題

- ・訪問先の決定に関して、昨年度までお世話になった日立アジア、インターナショナルスクールからのお断わりが相次いだ。また、その断わりの返事が出発3週間ほど前まで来ず、その後、慌てて訪問先を再度探さなければならなくなった。それ以外にも、自殺相談を行っている NPO や卒業生の ALT に紹介してもらった公立小学校の教員にも訪問の連絡を取ったが、断られる、もしくは最終的な返事がもらえなかった。今回、A★STAR の井上雅文先生のお声掛けで、三菱商事に今回一回きりという条件で訪問を受け入れていただいたことと、動物看護師の渡辺恵子さんにインタビューの時間を作っていただいたことは、大変助かった。しかし、井上先生が当たってくださった探究調査先の一般老人ホームの訪問依頼は2件とも断られた。一昨年もそうであったが、シンガポールでは、観光施設は大変充実しており、ビジネスか観光には最適な場所であるが、地域の国民の生活や公共施設に調査に行くには、大変苦勞する場所である。シンガポールに在住するシンガポリアンの紹介なくしては、どこも受け入れてはもらえない。シンガポールにおいてある程度の地位を持つ、シンガポリアンと繋がらないと訪問は難しい。出発直前まで訪問先の調整に時間を取られ、かつ行先が二転三転したことで、生徒へ出せる指示もギリギリとなり、生徒の質問の英作の準備もギリギリ、行先の下調べも十分でなかった。そのような状況で、引率教員、生徒ともに、精神的負担や時間的負担が多く、研修に関する指導も不十分となった。もう少し、強い伝手のある国を再度検討する必要があるのではないか。
- ・生徒の英語力の差

一定の英語力がないと、訪問先での聞き取りやインタビューが十分できず調査活動が行えないばかりか、現地の人との日常的な会話にすら加われない。英語科の英語に長けた生徒と普通科の生徒では大きな差が生まれる。グループが選考されて決まった段階から、普通科の生徒には、英語学習や英語検定などを意識させて行わせる必要がある。

5 台湾リサーチ

(1) 目的及び場所選定理由

台湾交流協会にて現地の状況や日本との関係の歴史を学び、実践大学、延平高級中學の訪問では同世代へのインタビューを実施する。延平高級中學では、高知県の文化や歴史、食についてのプレゼンテーションを行い、台湾の文化や歴史、食との情報交流を深める。また、同校にはホームステイを受け入れていただき、同世代の台湾の一般家庭の生活や食についてのリサーチや交流を更に深める。さらに、今年度は、台湾の企業である牛軋糖創意博物館を訪問し、台湾の食文化について深く学ぶ。

台湾は日本と良好な関係にあり、高知県も高知県産業振興計画に位置付けられた「海外への地産外商」および「国際観光」を推進するため、経済・観光・文化面において台湾と様々な交流を行っている。日本から近距離かつ治安も安定しており、比較的無理なく海外企業におけるリサーチ活動を行うことができる。以上により、スーパーグローバルハイスクール事業の海外リサーチを実施する場所の一つとして選定した。

(2) 実施日・参加者

①実施日 9月23日(月)～9月27日(金)

②参加者 10名(1年生)、引率教員1名

③日程

	月日	曜	活動	現地時刻	摘要	備考	朝食	昼食	夕食
1	9月23日	月	高知空港集合 高知空港発 羽田空港着 羽田空港発 台北松山空港着 台北市	10:30 11:40 12:55 18:15 20:55	各自で空港集合 JL494便 到着後国際線ターミナルに移動 JL099便 入国審査後、ホテルへ 地下鉄「松山機場站」→「台北車站(台北駅)」 ホテル着 ホテルにてミーティング	空港内にて昼食夕食可(軽食)・外貨換金可 フライト時間3時間25分 花華大飯店 (フローラホテル)100台北市中正區復興路30號(02-2312-3811)	×	羽田空港	機内軽食
2	9月24日	火	台北市	7:00 9:00 10:00 12:00 13:00 視察(バスにて移動) 視察(夕食) 19:00 20:30 21:00	朝食ミーティング ホテルロビー集合 地下鉄「台北車站(台北駅)」 →「南京復興站(7番出口)」 台湾交流協会訪問 昼食 視察 (バスにて移動) 視察(夕食) バス 九份→「忠孝復興站」 地下鉄「忠孝復興站」→「台北車站(台北駅)」 ホテルにて振り返り及び打ち合わせ	台湾交流協会 (文化室主任:正岡和也様) 台北市慶城街28号通泰商業ビル(02-2713-8000) 昼食(遠東SOGO百貨) 九份視察 夜市視察 ホテルへ 花華大飯店 (フローラホテル)100台北市中正區復興路30號(02-2312-3811)	○	遠東SOGO百貨	九份
3	9月25日	水	台北市	7:00 8:00 9:20 10:00 11:30 12:00 13:00 16:30 17:00	朝食ミーティング ホテルロビー集合 地下鉄「台北車站(台北駅)」→「永寧站」+タクシー 企業訪問 街並み視察・昼食 地下鉄「永寧站」→「東門駅」 地下鉄「東門駅」→「西門駅」 地下鉄「西門駅」→「劍潭駅」 士林周辺散策 ホテルで振り返り及び打ち合わせ	牛軋糖創意博物館 ガイドによる館内説明(40min.)+DIY(90min.) 新北市土城區自強松街31-2號(02-2268-0601) 永康街 (東門駅5番出口すぐ) 西門街 (西門駅6番出口すぐ) 士林視察 花華大飯店 (フローラホテル)100台北市中正區復興路30號(02-2312-3811)	○	台北市内	士林周辺
4	9月26日	木	台北市	7:00 8:00 8:00 9:00 12:00 13:00 14:00 18:00	朝食ミーティング ホテルロビー集合 実践大学へ 地下鉄「台北車站(台北駅)」→「大直站」 大学訪問 昼食後 延平高級中学へ 地下鉄「大直站」→「大安森林公園站」 高校訪問 ホームステイ	実践大学訪問(宋正宏先生) 台北市中山區大直街70号(02-2538-1111 *6610 *6628) 延平高級中学訪問 台北市大安區建国南路一段275号(02-2707-1478) ホームステイ	○	実践大学	ホストファミリー
5	9月27日	金	台北市 台北松山空港 台北松山空港発 羽田空港着 羽田空港発 高知空港着	7:30 8:00 9:10 13:10 16:55 18:15	空港集合 出国審査 JL096便 入国後、国内線ターミナルに移動 JL497便	台北松山空港へ(ホストが空港まで送迎) 空路、直行便で羽田へ 空港内にて昼食可(軽食) 空港解散	ホストファミリー	機内軽食	ー

(3) 実施内容

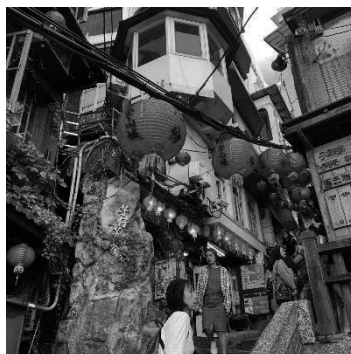
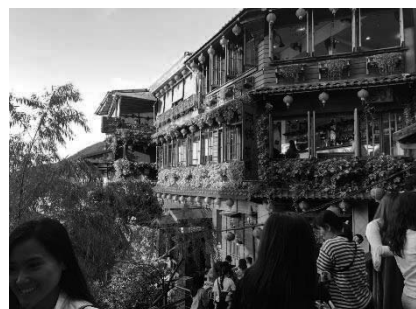
① (公財) 日本台湾交流協会訪問

初日は、移動のみで終わり、台湾滞在2日目は、午前中に日本台湾交流協会台北事務所を訪問。ここでは、文化室主任の正岡和也氏より、台湾の現状、台湾の歴史、日本との関係等について詳しく説明をしていただいたあと、生徒の質疑応答の時間をとっていただいた。台湾の食や暮らしについて、日本との相違を含め丁寧に紹介していただいただけでなく、台湾文化の成り立ちについても知ることができ、生徒たちは多くの学びや気づきを得た。



② 九份視察

日本台湾交流協会台北事務所訪問後、午後より、生徒の自主研修「九份」視察。地下鉄、路線バス(約90分)を乗り継いで現地へ。観光地の食や文化をリサーチ。夕刻には多くの観光客が訪れていた。到着した時間帯は、観光客もまばらであったが、日が落ちるにつれ、多くの観光客でごった返してきた。生徒たちは幻想的な空間を楽しむとともに、独特の雰囲気、においのする通りを散策した。観光地での「気づき」を模索しながら、良い時間を過ごした。



③ 牛軋糖創意博物館訪問

台湾滞在3日目の午前中は、台北駐大阪経済文化辦事處陳浩明様の紹介により「牛軋糖創意博物館」に訪問した。ここは台湾のヌガー制作会社で、台湾のヌガーの歴史や製造過程を学ぶことのできる企業である。台湾ではヌガーは婚礼や正月などのめでたい行事の際にプレゼントとして贈られ、多くの台湾人に食されるお菓子である。ヌガーという日本ではあまり馴染みのないお菓子を知ることができ、生徒たちは、台湾のお菓子と日本のお菓子の違いや共通点を学んだ。



④ 永康街・西門街視察

企業訪問後、午後から、台湾の流行・日本に対する認知度を学ぶため永康街・西門街に訪問した。日本の文化が多く浸透している街で、日本の多くの企業がこの街に出店していた。生徒たちは、台湾で流行しているものや台湾と日本との関係について深く学んだ。



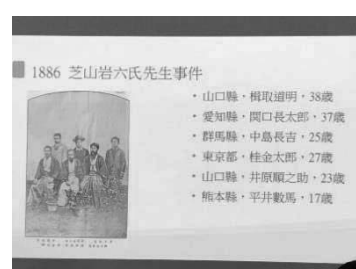
⑤ 士林夜市視察

高知の「ひろめ市場」のおおもとになった市場（夜市）。夜市の名が示すように夕方になると様々な屋台が出店し、多くの来客で賑わう。日本人観光客も多く訪れることから、多くの店では日本語が通じ、日本語のメニューも用意してある。「ひろめ市場」のおおもとになっただけあり、様相は「ひろめ市場」と変わらない場所であった。観光客も多い場所なので、このような飲食する場を観光スポットとして確立することは、高知県の地域活性化の一つの手立てに参考になると感じた。店舗数や規模をどのように確保するのかを考える良い機会を得たと生徒たちも感じている。



⑥ 實踐大學訪問

台湾滞在4日目の午前中は、實踐大學に訪問させていただいた。同大学は、台北と高雄にキャンパスを持つ五つの学部からなる総合大学で、台北市にある民生学部の餐飲管理學系は台湾でも実績と伝統があり、多くの卒業生が国内の重要なポジションで活躍している。音楽学科専任准教授兼学科主任の宋正宏先生より、台湾の歴史や文化、食の成り立ちについて講義をしていただいた。生徒たちは、台湾の食がこれまでの植民地時代や、中国からの移民によって大きな影響を受けていることを学んだ。同大学の授業内容や施設についての説明を受けた後、学内で開かれている実習やサークル、フリーマーケットなどを視察。台湾の大学生の様子を知ることができた。また、同大学に進学をしている日本人学生の話も聞くことができ、海外の大学事情を知ることができた。



⑦ 延平高級中學訪問

實踐大學訪問後は午後に延平高級中學を訪問した。同校では、校長をはじめとする管理職員の先生

方が同席してくださっての歓迎セレモニーの後、双方の生徒が準備した「学校紹介」・「食」について、英語でプレゼンテーションおよびディスカッションを実施。その後、文化交流を実施。延平の男子生徒による中国笛の歓迎演奏を受けた。ディスカッション後は、同校英語教諭タイラー先生による英会話の授業に参加。この授業においても、台湾の食文化、年行事について学ぶことができた。生徒たちは、延平高級中學の生徒たちと英語・日本語を活用してのコミュニケーションが積極的に取れていた。授業後、生徒たちはホストファミリーに迎えられ、各家庭でホームステイを行った。

同校には全生徒のホームステイも受け入れていただき、一般家庭の生活や食についてのリサーチ、同世代間の交流を更に深めることができた。生徒は帰国後も SNS 等で連絡を取り合い、継続した付き合いをさせていただいているようである。



(4) 生徒による報告レポートより（抜粋）

①（公財）日本台湾交流協会訪問

日本台湾交流協会では、台湾について詳しく知ることができた。台湾は、数多くの民族が共存しており、様々な文化や伝統が入ってきて、今の台湾があることが分かった。また、印象的な話としては、台湾北部では観光客が多いが、南部まで足を運ぶ観光客が少ないという課題があることだ。このことは日本でも同じことが言える。地方でも魅力的なものはたくさんあるが、やはり都市部に人が偏ってしまうという状態は台湾との共通点だと思った。

② 九份視察

台北市内から離れている（路線バスで約 90 分）にもかかわらず、多くの観光客がいた。ここでしか味わうことのできない独特の雰囲気や街並みに価値があることを実感した。行く目的が「雰囲気を楽しむ」ことで成り立っていることに驚いた。街並みは、漢方や香辛料のにおいで充満しており、好みの差が分かれるところだった。観光スポットということもあり、多言語を習得している店員が多いと感じた。このように、観光客を受け入れる体制づくりが大切だと感じた。



③ 牛軋糖創意博物館訪問

台湾の有名なお菓子の一つであるヌガーについて知ることができた。主に中年世代の人々に好まれているものだが、若い世代にも人気が出るように、味のレパートリーを増やしたり、地域の子供も達に体験活動を行っていた。台湾ではマンゴーやパイナップルなどの柑橘系の果物が多いので、高知の柚子とのコラボができるのではないかと感じた。そのためにも、台湾人に人気な味、におい、パッケージのデザインなどについてより知る必要があると感じた。



④ 永康街・西門街視察

台湾の若者が多く、観光客も多い日本の新宿・原宿のような街だった。日本人観光客への対応も慣れているようだった。店舗についても日本製の商品が多くあり、日本と台湾との生産流通が整っていることを実感した。また、多くの店舗では日本語を含む多言語の表記のメニューがあった。観光客を受け入れる体制が整っている街だと感じた。



⑤ 士林夜市視察

ここでは、「ひろめ市場」のもとになっている地下街へ行くことができた。高知の「ひろめ市場」は大人がお酒を飲む場として有名であるが、士林では様々な店が並んでおり、高知との違いを感じた。飲食店だけでなく、観光客向けの多くのお土産屋さんが立ち並んでいた。手軽に「台湾」を感じることもできる場所であると感じた。



⑥ 実践大學訪問

音楽学科専任准教授兼学科主任の宋正宏先生から、台湾の歴史と食文化について学んだ。台湾には、先住民、福老人、客家人、外省人、新住民の五つの種族があって、種族ごとに食べる料理が違うことを知った。また、台湾はこれまでにいろんな国に統治されており、これらの影響で、様々な食文化が生まれたことを知った。料理の中には“精進料理”と言う健康を意識した料理が台湾人に好まれることを知り、日本食もこの視点から見ると、もっと台湾にとって身近な料理になりうるものだと感じた。その場所の人々のニーズに合わせた食のプランが大切だということに気が付いた。



実践大學では同大学に進学している日本人学生からも話を聞くことができた。台湾は日本に比べ、香辛料の匂いが町中で強く、また、空気についても日本のほうがきれいだということを教えていただいた。日本をPRするものとして、この部分も活用できるのではないかと思った。

⑦ 延平高級中學訪問

校門から多くの生徒たちに歓迎され戸惑いました。ここでの文化交流を通して、台湾の伝統的な祭りである“Moon Festival”という日本でいう、お月見のような祭りがあることを知った。そこで食べさせてもらった“ムーンケーキ”は中身が、意外なものが多く、日本ではあまり考えられないものばかりでした。また、フルーツも食べさせてもらった。味だけでなく、食感も土佐文旦に似たものだった。土佐文旦も台湾ではきっと人気が出るフルーツになるだろうと思った。



ホームステイでは、台湾の家庭料理を食べることができた。台湾の食事方法で、おかずを全てご飯の上にのせて食べることが興味深かった。また、日本の朝食は自宅で作ったものを食べることが多いけれど、台湾の朝食は、屋台で食べることが多いことを知った。屋台料理は安く、食べやすいものだったので、日本でもこのような朝食屋台市場を設置したら面白いと思った。ホストファミリーと過ごす時間はわずか一日だったが、多くの台湾の風習や生活様式を学ぶことができた。

⑧ 終わりに

私が一番印象に残ったことは、台湾の人たちの優しさです。お店の人への伝え方が分からず困っていると、日本語で話しかけてくれる人がたくさんいました。また、お土産を買おうか迷っていると、試食をたくさんさせてくれました。士林の夜市では、高知県の土曜市のよう、ゲームや雑貨屋、フルーツジュースの店など、ご飯以外の屋台がたくさんありまし



た。広さもアーケード3つ分くらいあり、多くの人でにぎわっていました。高知県の“ひろめ市場”とは違った雰囲気でした。

台湾の観光地を視察して思ったことは、どこも景観を大切にしていることだと思った。九份では、特にそれがよく表れていて、観光客が思わず写真を撮ってしまうような景観の美しさがあり、さらにそこで台湾の伝統料理を食べることができる場所であった。リピーターを増やす工夫がされているように感じた。

(5) 成果と課題

① 成果

- ・事前学習を定期的実施した（合計12回）ので、出発のための準備をしっかりと整えることができた。
- ・今年度も、移動時間も考慮して、台北地区のみのリサーチを行った。そのため、台北の主要な場所を時間のゆとりをもってじっくりと視察することができた。
- ・昨年に引き続き、企業訪問が台北市内で実施できた。台北駐大阪経済文化辦事處の陳浩明様からいくつかの企業を紹介していただくことができた。次年度も、企業訪問の際、相談にのっていただくとよいと思う。
- ・延平高級中學でのプレゼンテーション（日本の食～高知～、学校紹介）も生徒が主体的に取り組み、昨年以上の内容の発表、意見交換ができ、生徒間の交流を更に深めることができた。
- ・探究テーマの設定を台湾出発前に行うことで、目的意識をもって、現地でのリサーチ活動ができた。それに伴い、各訪問場所での質問（場所により日本語や英語で）も十分できた。またリサーチ活動後も、この体験を活かして、各グループが探究活動を比較的主体的に進めることができた。

② 課題

- ・各訪問場所で、台湾についての講演・交流を通して、文化や食などについて、一通り学ぶことができた。しかし、歴史を学ぶことに関しては、訪問場所が今回はなく、実地リサーチが不十分であった。台湾の発展に尽力した人物に関する博物館や、台湾の発展が見て取れる史跡などに足を運ぶ必要がある。
- ・生徒の感想を見ると、九份視察が単なる観光になってしまったのではないかと感じる。「なぜ、この場所が長く観光名所となっているのか」、「この場所の魅力は何か」、「高知県をこのような場所にするためのヒントは何か」、というような探究目的を明確にして、視察を行う必要がある。このように、各訪問場所において、“何を目的としてこの場所を訪問するのか”という意識を生徒に明確に持たせることが必要である。
- ・生徒の感想が昨年に比べ薄いものであった。訪問場所ごとに、“視察の目的”、“見るポイント”を生徒に明確に示したうえで、視察をする必要がある。
- ・今回のリサーチ活動の日程を月曜日～金曜日（木曜日延平高級中學訪問）に設定した。このことによって、昨年参加させていただいた延平高級中學での部活動への参加がかなわなく、さらには、ホームステイ翌日の金曜日の朝、かなり時間がタイトな日程となってしまった。同校の担当教諭 Pamela Peng 先生との打ち合わせの結果、台湾リサーチは火曜日～土曜日（金曜日同校訪問）の日程がベストであるとの結論に至った。次年度以降は、この点に注意すべきである。

6 タイリサーチ

(1) 趣旨及び目的

四国銀行主催で、四国内のホテル・旅館・観光協会等が参加する「四国インバウンド商談会 in バンコク」に参加し、「食と観光」についてグループが設定したテーマのもと、実際の誘致活動を学ぶことや、現地で調査等を行い、帰国後の探究活動に資することを目的とする。以上の理由から、スーパーグローバルハイスクール事業の海外リサーチを実施する場所の一つとして選定した。

(2) 日程

	月日	曜	活動	現地時刻	摘要	備考	朝食	昼食	夕食
1	10月26日	土	高知空港集合 高知空港発 羽田空港着 羽田空港発 スワンナブーム空港着	6:15 7:15 8:25 11:20 16:20 18:30 19:00	各自で空港集合(JALカウンター前) JL490便 9:15羽田第1ターミナル1F到着ロビー「出会いの広場・南」集合 JL031便 入国審査後、ホテルへ ホテル着 ホテル周辺散策(夕食) ホテルにてミーティング・就寝	空港内外貨換金可 フライト時間約7時間 専用車にてホテルへ S31 Sukhumvit Hotel S31 Sukhumvit Hotel	×	機内軽食	ホテル周辺
2	10月27日	日	バンコク	7:00 8:00 12:00 13:00 15:00 17:00 18:00 19:00	朝食ミーティング ホテルロビー集合 「スクムウィット駅」→「ファラムポーン駅」(MRT)→ →ワット・ポー、ワット・プラケオ(トゥクトゥク) ワット・ポー、ワット・プラケオ(トゥクトゥク)→ 「ファラムポーン駅」→「サヤーム駅」(MRT) 「サヤーム駅」→「カムベーン・ベツ駅」(MRT) 「カムベーン・ベツ駅」→「スクムウィット駅」(MRT) ホテル着 ホテル周辺散策(夕食) ホテルにてミーティング・就寝	ワット・ポー、ワット・プラケオ視察 サヤーム駅周辺 で昼食 ウイークエンド・マーケット 視察 ホテルへ S31 Sukhumvit Hotel S31 Sukhumvit Hotel	○	サヤーム駅周辺	ホテル周辺
3	10月28日	月	バンコク	7:00 9:30 10:00 12:00 12:30 18:00	朝食ミーティング ホテルロビー集合 ホテル→ターミナル21(徒歩) ホテル着 タイ(バンコク)商談会 タイ人に向けてのリサーチ活動 ホテル周辺散策(夕食) ホテルにてミーティング・就寝	ターミナル21視察 S31 Sukhumvit Hotel S31 Sukhumvit Hotel BallRoom 1 S31 Sukhumvit Hotel	○	ターミナル21	ホテル周辺
4	10月29日	火	ロビー集合 ホテル発 スワンナブーム空港着 スワンナブーム空港発 羽田空港着 羽田空港発 高知空港着	6:40 7:00 7:55 9:55 17:30 18:55 20:25	空港着・出国手続き JL032便 入国後、国内線ターミナルに移動 JL499便 空路、高知龍馬空港へ 空港解散	スワンナブーム空港へ(専用車にて) フライト時間約5時間35分 空港解散	朝食BOX	機内軽食	—

(3) 実施日・参加者

- ① 実施日 10月26日(土)～29日(火)
- ② 参加者 5名(2年生)、引率教員1名
- ③ 参加企業(21事業所)

高知県：(有) ホテル高砂、新ロイヤルホテル四万十、(公財) 高知県観光コンベンション協会、四国銀行

徳島県：(一社) イーストとくしま観光推進機構、(一財) 徳島県観光協会、阿波観光ホテル、徳島県海外誘客室

香川県：株式会社琴平グランドホテル、香川県庁、夕風の湯 HOTEL 花樹海、琴平バス株式会社、東交バス株式会社、小豆島観光開発株式会社

愛媛県：(一社) 愛媛県観光物産協会、(株) レスパスコポーレーション

四 国：四国八十八か所霊場会青年部会、四国旅客鉄道株式会社、四国ツーリズム創造機構、S.M.I. TRAVEL CO., LTD/WENDY TOUR、株式会社 J T B 徳島支店

(4) 実施内容

① 事前学習

ア グループの探究テーマ設定

「高知の郷土料理×祭りによるインバウンド誘致～タイ人を高知に呼び込むために～」

イ 日本・高知県のインバウンドの現状調査（インターネット、資料、インタビュー）

ウ タイの事前調査（タイ人留学生と高知大学岩佐和幸教授等からの聞き取り）

エ 探究テーマに合わせた調査内容・調査場所の選定・準備、旅程の確定等

・“高知県産のお茶”の嗜好調査

・“高知県の祭り”の関心度調査

② ワット・プラケーオ、ワット・ポー視察（タイ文化の見学）

27日（日）午前中はMRT（地下鉄）、トゥクトゥクを利用して、王宮、ワット・プラケーオ、ワット・ポーを見学した。ワット・プラケーオはタイで最も格式が高い王室寺院であり、タイの伝統的建築様式と華麗さを実感した。王宮、ワット・プラケーオは広大な同一敷地内にあり、当日は気温が35℃あったため、全体を歩いて見学するにはかなり暑かった。

ワット・ポーは大寝釈迦仏が有名で、生徒達もその巨大さに圧倒されていた。日本と同じ仏教国であるが、タイは日本以上に仏教に対する信仰が深く、観光客以外の地元民も多くこの場所に参拝に来ていた。ワット・プラケーオ内は、王宮の一部であり、仏教国ということもあって、肌の露出に関して、警備員のもと入場規制が厳しく敷かれていた（右写真参照）。

バンコクは800万人の人口があるが、MRT（地下鉄）は2路線、BTS（スカイトレイン）も2路線である。BTSは時刻表がなく、平日の15時頃でもかなり混雑していた。生徒の希望が高かったトゥクトゥクは、年中渋滞しているバンコクの町をすり抜けるオート三輪として有名である。軽トラックの荷台に乗っている感じで、スピード感がかなりあった。



③ ウィークエンド・マーケット視察

27日（日）午後からは、週末のみ開催しているウィークエンド・マーケットを視察した。高知県でいう“日曜市”のような市場だが、規模がかなり大きく、さらに市場の通りも入り組んでおり、地図を持っても道に迷うような場所であった。ここでは、タイの伝統工芸品やお土産が安く手に入る場所であった。品数もかなりの数で、観光客も多くにぎわっていた。高知県の地域活性化の一つとして、このような規模のフリーマーケットの開催も一つの手立てになるのではないかと感じた。



④ アソーク地区（ターミナル21）視察

ターミナル21はアソーク地区にある若者に人気のショッピングセンターである。ここでは、28日（月）午前中に調査を実施した。

空港をコンセプトにしており、各階には都市名がついている。空港のターミナルをイメージして建てられた地下1階、地上6階のショッピングセンター。フロアごとに東京、サンフランシスコ、パリ、ローマなど各都市名が付けられ、その国のイメージに合った内装を施された店舗が軒を連ねる。各フロアのエレベーターやエスカレーターには出発と到着と書かれたサインがあり、バンコクにいながらにして世界各都市を飛び回っているかのような、世界一周旅行気分が味わえる。フードコートでは、タイ料理の店も立ち並び、買い物も食事も楽しめるバンコクのニューフェイス。タイ国内初のニューコンセプトの空間である。外国人観光客誘致のために、このような工夫されたコンセプトを持った商業施設を考えることも大切であると感じた。



⑤ 「四国インバウンド商談会 in バンコク」

28 日（月）の午後は、S31 Sukhumvit Hotel BallRoom 1 で開催された商談会に参加した。

開会挨拶の後、JNTO（日本政府観光局）バンコク事務所長小沼英悟による「タイの訪日旅行市場と JNTO バンコク事務所の取組」についての講演があった。内容としては、タイからの訪日観光客は、2014 年頃から急速に増加し、2018 年には初の 100 万人突破を達成しており、今後も増加していく見込みである。希望する訪日先は、関東・近畿・北海道が多く、訪日客は他の東南アジア諸国と比較してリピーターが多い。また、スノースポーツ・アクティビティーが人気であるとのことだった。

その後、タイの旅行会社に向けた商談会が実施された。各事業所に商談テーブルが用意され、タイの旅行会社が順次各事業所のテーブルを回る方式で、一つの商談会の時間は 10 分間、前・後半合わせて 14 回実施する形式であった。生徒達はまず、高知県の 8 事業所に全員がローテーションを組んですべての事業所に同席し、その後他の事業所に許可を得て同席させていただいた。「各事業所が少ない時間で、いかにアピールしているか。どのような方法でアピールすることがインパクトが強いのか。タイの旅行会社からはどのような質問や要望がでるか。」に注目しながら見学することを中心にしっかりと商談の様子を見させていただくように話をしていたが、生徒達は緊張しながらも、メモを取りながら熱心に見学していた。

高知県をはじめ、すべての参加事業所、各銀行関係者の皆様が重要な商談会への高校生の同席を快く受け入れてくださり、いろいろと配慮していただいたことで、普通の高校生活では決して得られない貴重な経験をすることができた。



⑥ タイ人へのリサーチ

タイ人観光客を高知県に誘致するため、タイ人に対して、“高知県産のお茶”の嗜好調査、“高知県の祭り”の関心度調査を実施した。そこで、高知県の代表的なお茶を持参し、「四国インバウンド商談会 in バンコク」が開催されていた会場のブースをお借りして、「どれが 1 番おいしいか」の調査を実施した。持参したお茶は、沢渡茶、碁石茶、土佐茶、玄米茶（霧山茶）の 4 種類だった。結果は、1 番人気は玄米茶（霧山茶）、2 番人気は土佐茶、3 番が沢渡茶、4 番が碁石茶だった。玄米茶（霧山茶）や土佐茶はタイのお茶に似ていると感じた人もいたため、人気が高かった。この調査を経て、タイ人は甘いお茶を好み、苦いお茶は好まないことが分かった。またタイ人の話によると普段は「お茶に砂糖やミルクを入れる。」「温かいお茶をあまり飲まない。」といった人がいた。そのため、酸味と苦みが強い、碁石茶はタイ人の口に合わなかった。

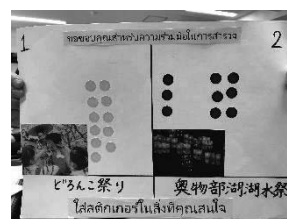
もう一つの調査である“高知県の祭り”の関心度調査については、どろんこ祭り、奥物部湖湖水祭、よさこい、流鏝馬の四つの祭り動画を視聴していただき、どの祭りがタイ人にとって興味深いのかを調査した。結果は、1 番人気はよさこい、2 番人気はどろんこ祭り、3 番が流鏝馬、奥物部湖湖水祭だった。この調査に関しては、タイ人は参加できるお祭りを好み、見るだけのお祭りは好まないこと、賑やかなお祭りを好むことが分かった。流鏝馬に関しては、興味を持つ人はいたが見ることしかできなく、参加することができないため人気は低かった。逆に、参加をすることが可能なよさこいやどろんこ祭りへの人気は高かった。

この探究調査を通して、生徒たちは高知県にタイ人観光客を誘致するためのヒントを得たようだった。





(高知県のお茶の試飲調査結果)



(高知県の祭りの関心度調査結果)



⑦ 事後学習

帰国後、この調査結果をもとに探究活動を進め、タイ人観光客を高知県に誘致するための対策として探究論文を作成した(巻末参照)。また、「高知西高等学校SGH成果発表会」で学年代表5グループの一つに選出され、発表した。(令和元年2月13日)

(5) 生徒の感想より

- ・ワット・プラケーオ、ワット・ポーでは、建物一つ一つの装飾が細かくされており、美しかったです。また、敷地内ではお経を読んでいる人がたくさんいて、仏教色の強い国であることを実感しました。観光パンフレットも多く言語で作成されており、観光客誘致のための対策がとられていました。
- ・ターミナル 21 や他の施設の入り口には、セキュリティチェックボックスがありました。日本(高知県)にはない設備なので驚きました。治安維持のための対策が厳しい国だと感じました。ターミナル 21 の中は、空港内をイメージした作りになっていて、フロアごとに多くの国々の街並みを再現していました。このようなコンセプトは観光客にとってとても面白いと感じました。
- ・商談会で得られたことは、タイ人には全体的に抹茶茶の人气がなかったが、中には「特別な味がする」と言って気に入ってくれる人もいた。また、タイ人は「よさこい」のような参加型のお祭りに興味があるようだった。日本の伝統的な「流鏝馬」についても全体的に人气はなかったが、タイにはないものなので、珍しく思ってもらえた。この「特別感」や「珍しさ」を高知県のブランドにしたら観光客に関心を持ってもらえるかも、と思った。

(6) 成果と課題

① 成果

- ・昨年度までの探究成果を受けて、今年度はより具体的なインバウンド政策を探究テーマにして活動を進めることができた。タイリサーチに参加する生徒たちは、リサーチ内容の性質上、探究テーマが「インバウンド」になる。過去の探究内容をよりブラッシュアップしたものにできるように継続探究することが大切だと思う。今後も、過去の探究内容を参考にすることを心掛けたい。
- ・タイ人観光客を誘致する対策を考える上で、タイリサーチを経て、タイと日本の違いや相違点を知ることができた。このことによって、外国人をターゲットにする上でのポイントを知ることができた。
- ・通常の高校生活では決して得られない実際の商談会で、10以上の事業所の商談に同席させていただいた。10分間という限られた時間内で各事業所がいかにタイ旅行会社の方々の興味や関心を引き、今後の商談に繋げていくかを考えたプレゼンテーションを実施していた。生徒達は実際の商談を目の当たりにしたことだけでなく、どのようなプレゼンテーションが相手の興味・関心を引くのに有効かを知り、その重要性を認識することができた。
- ・現地でのリサーチ活動、特に生徒達自身がタイの人達に直接声掛けして実施する活動を計画した。このアンケート調査は、生徒達自身が積極的に取り組まざるを得ないので、積極的に会話をするようになった。また、「百聞は一見に如かず」で、現地で初めて実感したり、理解することが多かった。

② 課題

- ・企業の商談会の企画に参加するため、他の海外リサーチと比べ、実施時期や詳細が決定するの、どうしても遅くなる。今年度は昨年度より実施日程が早く10月下旬だったため、昨年度よりはタイトなスケジュールにならなかったが、次年度の日程は不明である。対応策としては、担当をしてくださっている四国銀行及び四国ツーリズム創造機構との密な連携が必要である。また、過去のリサーチ活動の内容を活用して、国内で可能な探究を早めに進めておくことが必

要である。県内の大学や、外国人留学生、その他専門機関等へのインタビュー調査などのアクションプランの計画を充実させることが大切であろう。

- ・海外リサーチ班は、事前のリサーチ活動だけでなく、事後に成果発表会や県外のプレゼンテーション大会での発表のため、授業時間以外に準備する必要がある。それを行う最大のモチベーションは、探究活動をやりたいという意欲である。参加者を募集、選考する時点で、探究活動への意欲・関心の重視が必要である。

7 OCEAN' s 47

(1) 趣旨及び目的

主催者の「にこにこ一般財団法人」のホームページには本取組の趣旨を以下のように示している。

「OCEAN' s 47」は「地球子どもサミット2019」と「海と日本PROJECT」のコラボプロジェクトです。「海のごみ拾い」や「海洋汚染問題に関する勉強会」を開催し、全国の小中学生・高校生と一緒に「日本の海を守るために、子どもたちができること」を、考えていきます。

(2) 実施日・場所・参加者

- ① 日 時 令和元年8月8日(木) 10:00~17:00
- ② 場 所 衆議院第一議員会館 多目的ホール
- ③ 参加者 1名(3年生)、引率教員1名

(3) 主催・共催・後援

主催：にこにこ一般財団法人、共催：日本財団、後援：文部文科省

(4) 当日の内容

① 当日の流れ

10:00~12:00 いろんな専門家に海の話进行こう！

- 1 東京大学大学院教育学研究科附属海洋教育センター 主幹研究員 及川幸彦 氏
- 2 GODACインタープリター 澤野健三郎 氏
- 3 ライフセービング協会 飯沼誠二 氏
- 4 舞浜倶楽部 グスタフ・ストランドル 氏

13:00~15:00 「地球子どもサミット2019」の傍聴(一般傍聴席(多目的ホール)での傍聴)

15:00~16:00 サミットふりかえりと自己紹介

16:00~17:00 閉会、子ども特使同士のフリー交流

② 参加内容

会場は、各県1名の子ども特使席が用意されており、参加生徒はそちらに座った。

午前は、マイクロプラスチックによって引き起こされる海洋汚染について、汚染の実態、汚染が引き起こされるメカニズム、汚染防止のための組織・企業の取組などの講演を聞き、それに対して質疑応答が行われた。

午後は子どもサミットを傍聴し、それについての感想を述べあうとともに、参加者全員での自己紹介を行った。サミットに参加していた子供たちと合流した後は、フリーの交流会となり、各自が作成してきた名刺を交換し合い、情報交換などを行った。

参加生徒も、最後まで交流を行っていた。参加した感想を聞くと、各県から学びに対する意識の高い人たちが集まってきている今回のような会で学べるとすごく勉強になる。もっと、このようなチャンスにみんなが参加したらよいのにと、言っていた。



8 第4回高知県 I Y E O 青少年グローバルリーダー育成フォーラム ～人生を変える 深める 豊かにする国際交流～

(1) 日程・参加者

- ① 実施日 令和元年8月12日(月)
- ② 参加者 高知西高校生徒31名、高知国際中学校生徒13名、その他高知県内の中学生、高校生、大学生、外国人、社会人合わせて223名
- ③ 場所 高知市文化プラザかるぼーと



(2) フォーラム参加の趣旨および内容

このフォーラムの趣旨は、参加者が国際交流を通じて多様な価値観・考え方を学び、次代の青少年リーダーとして活躍するために必要なスキルやそのためのヒントを得ることである。

- ① 全体会でウォーミングアップ
- ② 分科会に分かれ、国際的なテーマについてディスカッション
＜本校生徒が参加した分科会の例＞

A国際ボランティア B南米日系社会の今を考えよう C日本人のidentityを考えよう
D世界地図を開いて青春の夢を描こう Eアンパンマンに学ぶ愛と正義と勇気 Fベジタリアン調理教室へようこそ G地球市民&異文化共生社会

- ③ 再び全体会でみんなと意見や体験をシェア

(3) 成果と生徒たちの感想

① 成果

高知県内に居ながらにして多くの外国人と交流ができ、県内他校の同世代の友人たちとも様々な意見交換をして世界についての幅広い視野を得られたことは、大変貴重な体験であっただろう。普段学校で勉強している授業内容やグローバル探究における学習が、「世界とつながった」と感じられる瞬間が何度かあったのではないだろうか。この日初めて出会う多くの人とコミュニケーションを取らなければならないという負担はあったと思うが、それぞれが自分の殻を破るべく、時には英語を使って積極的に他者と交流して楽しみながら見聞を広めている様子がうかがえた。

② 生徒たちの感想

- ・自分が「貧しい」と思っていた国の人たちはみんな優しく温かい心をもって、物がなくてもほかの物で代用するなど、発想が自分にはないもので驚いた。また根本解決につながる国際支援が必要だと思った。
- ・いろんなことに自分のアンテナをはり、たくさんの知識や情報を得ることが、また違った新しい見方を与えてくれて、様々な解決のkeyとなる。「知ること」の大切さを学んだ。
- ・パラグアイの日系人は日本文化を守るために日本語の勉強をしたりお祭りを開催したりと、日本人としてのアイデンティティが保たれていることを知った。実際にパラグアイに行き、日系社会を見てみたい。
- ・自分の好きなことや続けてきたことが今の自分や将来のアイデンティティをつくることなど、私にはとても新鮮だった。ピアノ演奏も聴くことができ、本当に貴重な時間となった。
- ・自分の夢に対して様々な文化背景を有する人から意見をもらえて素晴らしい体験をした。人とは違う体験をした人は自分に自信があるし、大きく成長していた。具体的な夢を考えようと思うきっかけになった。
- ・貧困に関して話し合った時、人それぞれ考え方が違っていた。一つの問題で意見がこれだけ異なるなら、その解決策も様々なので、周囲の人の意見も聞きながら視野を広げていきたい。
- ・難しい評決を迫られる法案審議だった。根拠と責任を持って社会問題を考えることが大切だと思った。周りの人の意見を踏まえ、自分の意見を振り返ることで、本当の自分の意見が見つかると思う。

9-1 ユース世代等取組交流会 ～減らそう！食品ロス 学ぼう！SDGs～

(1) 日程・参加者

- ① 実施日 令和元年8月22日(木) 10:00～16:00
- ② 参加者 4名(2年生)
- ③ 場 所 とくぎんトモニプラザ

(2) 交流会の趣旨および内容

本校を含む四国県内の高校および専門学校生7チームによる食品ロスに関する発表会に参加することで、食品ロスへの現在の取組と課題について意見交換をしながら知識を広げ、新しいアイディアを得る。

- ① 7チームによる発表(パワーポイントやパネル、模造紙等を使用)
- ② ワークショップ ①
一般参加者も含め、全体でSDGsについて学ぶ。様々な学校の混合グループとする。

- ③ ワークショップ ②
ワークショップ ①を踏まえ、チーム毎に現在の取組のこれからについて考える。

考えたことを模造紙にして発表し、その内容は後日「第3回食品ロス削減全国大会 徳島大会(10月30日/徳島市内)」で展示した。

(3) 成果と課題

食品ロスに興味のある生徒たちによって急遽編成されたメンバーであったが、この交流会に参加して実に多くのことを得た。食品ロスについての知識はもちろんのこと、同世代の他校生たちが力を入れて食品ロス削減に取り組んでいる様子が大変刺激になったようだ。また、具体的なリサーチ法やデータ収集法も知れ、今後の自分たちの研究に直結する内容を得られて喜んでいて、本校が力を入れて取り組んでいるグローバル探究の授業でも、食品ロスをテーマに深く探究していくことが決定した。10月の全国大会参加にも自ら手を挙げた。



9-2 食品ロス削減 全国大会 in 徳島

(1) 日程・参加者

- ① 実施日 令和元年10月30日(水) 13:00～16:30
- ② 参加者 3名(2年生)
- ③ 場 所 徳島グランヴィリオホテル

(2) 交流会の趣旨および内容

8月のユース交流会に参加したメンバーを中心に全国大会に参加した。今回は、現在の日本社会でどのくらいまたどのように食品ロス削減に取り組んでいるのかを知る貴重な機会となった。様々な企業や非営利団体に所属する方々の考え方や取り組み方を聞け、食品ロスに関する知識・関心がさらに深まり、自分たちの研究に対する意欲と情熱も一層高まったようだ。

- ① 基調講演「マルチステークホルダーで取り組むエシカル消費と食品ロス削減」
- ② トークセッション「ICTを活用した食品ロス削減」(コーディネーター1名、パネリスト5名)

(3) 参加生徒たちの感想

- ・食品ロス削減プレ交流会そして全国大会を通して自分達で商品ロスのために出来ることについて真剣に考えるようになったこの機会に感謝しているし、自分たちが作成したパンフレットがより沢山の人の意識改善に繋がってほしい。
- ・様々な地域や企業が行っている食品ロス対策が学べた。私たち自身の研究の糧にもなり、とてもよい体験となった。
- ・徳島での全国大会、プレイベントを通して、自分がやりたいことを探究する楽しさを知ることができた。食品ロスを削減したいという目標を持って活動していると様々な新しい知識に触れることもでき、充実した毎日を送れている。全てのきっかけをくれたこのイベントにとっても感謝している。



10 ルター校（香港）交流

（１）趣旨及び目的

グローバルな視点から様々な事例を学び、持続可能性の高い「食を活かした地域創生」を考察する活動を海外で体験する。日本人としてのアイデンティティを身に付けたグローバル人材の育成を行う。

香港はアジアの流通のハブとして、活発な商取引が行われている。比較的近距離で、高知県産品の輸出も多い。また、高知県のインバウンド事業の対象としてもふさわしく、比較的無理なくリサーチ活動を行う事ができる。以上より、海外リサーチを実施する場所の一つとして選定している。

（２）実施予定日・参加予定者

① 実施予定日 令和元年9月23日（月）～9月27日（金）

② 参加予定者 6名（1年生）、引率教員1名

（３）リサーチ活動中止までの経緯

事前学習として、リサーチテーマを決定するとともに、ルター校での高知県や高知西高校についてのプレゼンテーション資料を作成するところまで行っていた。ところが、香港でのデモによる政情不安が落ち着く兆しが見えず、生徒の安全が確保できないという理由から、8月末にリサーチを一旦断念した。その後も9月末まで香港の政情を伺ったものの、好転する様子がなく、本年度のリサーチは中止となった。

（４）リサーチ活動中止後の取組

リサーチ活動は中止になったものの、生徒からプレゼンテーション資料を作成しているので、テレビミーティングでルター校の生徒にプレゼンテーション資料を発表することや、情報交換などの交流を行いたいという希望が出てきた。そこで、ルター校の先生とメールでのやり取りを行い、令和元年11月27日（水）の16：00から1時間半程度スカイプミーティングをルター校の生徒と行った。

互いに地元と学校のことについてパワーポイント資料を用いてプレゼンテーションをした後、互いの地域で流行っているものや、好きな歌手や俳優などについて情報交換を行い、交流を行った。

はじめは、英語のみの交流で緊張をしていたが、好きな俳優など共通の話題が出始めると、だんだん生徒たちも慣れ始め、積極的に質問を行う姿が見られた。生徒の中には、またやりたいという生徒もあり、今後の取組に期待が持てる交流であった。



11 まつやま文化交流

（１）日程・参加者

① 実施日 令和元年11月14日（土）

② 参加者 本校生徒14名（1年生）

島根県立隠岐島前高等学校生徒5名・愛媛県立松山南高等学校生徒5名
済美平成中等教育学校生徒5名・愛媛県立松山西中等教育学校生徒5名

③ 場 所 本校本館3階大会議室

（２）交流の趣旨および内容

交流会の趣旨は、参加者が地元の魅力を再発見し、他県の方へ発信することで、主に次の三つを養うことであった。

①地元の文化を知り、地元への愛着を深める

②自分の考えや意見を他者へ伝えるスキルを磨く

③自分と他人の「違い」があることを知り、その事実を受け入れることの大切さを学ぶ

初めに、各学校代表生徒より自己紹介を行い、次に各校の探究成果発表を実施した。隠岐島前高等学校の生徒とは、Skypeを活用したTV会議で実施した。各校の探究成果発表ののち、質疑応答の機会を設け、それを意見交流の場とした。各校の発表内容は下記の通り。

本校生徒：「山間部に賑わいを！」

「須崎＋SNS ～高齢者×高校生～」

「Regain: 0から始める龍河洞開発プロジェクト」

愛媛県生徒：「正岡子規について」「松山城」「道後温泉」

隠岐島前高校生徒：「隠岐島前高校の取組について」

(3) 成果と課題

① 成果

本校生徒にとっては、校外へ探究成果を発表する最初の機会となった。グローバル探究Ⅰの進捗状況の都合上、探究途中までの成果を他校の生徒たちに発信した形になったが、他校の生徒たちから、多くの質問・意見等をもらうことができ、生徒たちにとって、探究を進めていく上での、新たな視点を得る良い機会となった。

② 課題

開催時期が、本校生徒にとって探究の途中段階であったので、発表内容が中間発表の内容になってしまった。中間発表として、探究の進捗状況をまとめるパワーポイント作りをさせる必要があった。

他校の生徒との交流の機会は大切だと思うので、次回このような機会が設定できるのであれば、地域課題を一つテーマとして設定し、その原因究明や解決策を議論しあうようなディスカッションの機会を生徒たちに与えたいと思う。



12 SGH 全国高校生フォーラム

SGH Tokyo Poster Presentation Report

Saturday, December 21st

I met the students at Kochi airport at about 8:30. We traveled together to Tokyo and arrived at Haneda at about noon. From there we took a bus to Tokyo train station and walked to our hotel to drop off our luggage. The students wanted to do some sightseeing so we grabbed lunch at a soba shop near the hotel before heading off.

We took the subway to Takeshi street where the students did a little shopping. After that we went to the Line store and then headed to see the Star Wars Christmas installations and illumination near Tokyo station. Following which, we found a popular okonomiyaki shop near the station and ate dinner. We returned to the hotel at around 8 pm and checked in. Before heading to bed we had an evening meeting to practice the students presentation for an hour.

Sunday, December 22nd

I woke up early and met the students in the breakfast area. Upon meeting them, I discovered that one student had forgotten her white collared shirt! We quickly finished our breakfast and checked out of the hotel. We went to Tokyo station where there is a Uniqlo. We walked around for about a half your before discover that you have to buy a train ticket in order to access the area where the stores are. The



student bought a ticket and quickly went to buy a shirt.

The contest

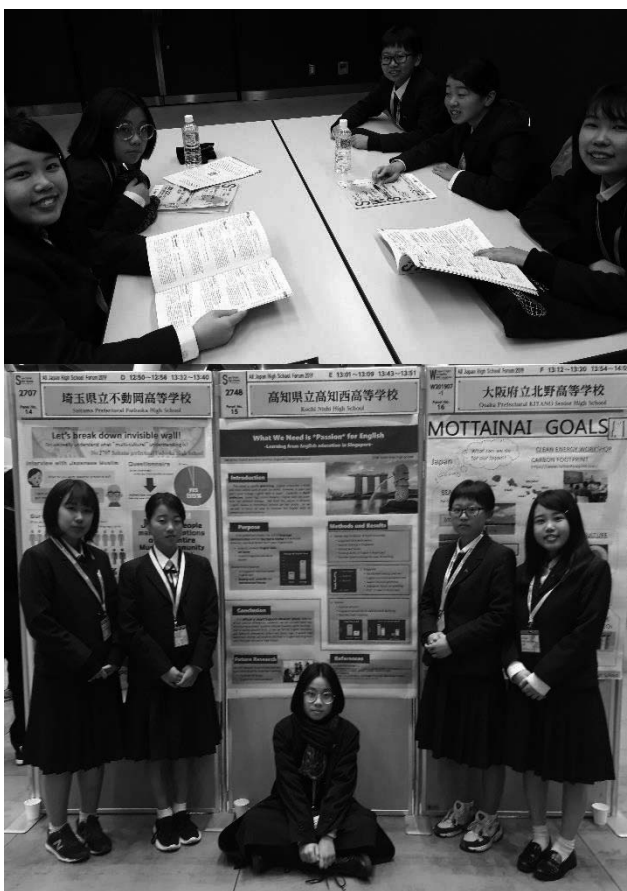
We arrived at the International Forum at approximately 9:30, a half an hour later than we intended. The students set up their poster and practiced their presentation a couple of times. Mr. Ishimaru from the board of education was also there and assisted students with helpful feedback and advice.

After the opening ceremony, the students headed up stairs for the group discussion. Professor Sabastian Maslow from Tokyo University lead the discussion on gender equality and education. After the first 15 minutes, I left to walk around and looked at many of the poster and presentations in the main hall. The workshop was about an hour and a half. After that we all met up for lunch everyone had lunch. We headed back a little early so students could practice one more time before they would be judged. Students gave their presentations twice, once in the beginning of the afternoon session and once about halfway through. After the afternoon session there was a speech and the 3 finalists presented on the stage. The final judging started and students took down their posters.

It was at this time that we left so we could catch our bus in the rain. We got to the station with 10 minutes to spare before we the bus left for Haneda. The commute back to Kochi was uneventful. At the airport I greeted some of the parents and once everyone started to leave, I returned home.

Impressions

I think this was an interesting and worthwhile event. I was very fortunate to have a group of committed hardworking students who took the time to come and meet with me to prepare months before the presentation. Unfortunately, clubs, tests, homeroom counseling, and other engagements made it very difficult for students to meet. I would love to see and “academics club” for students that are interested in doing these kinds of competitions throughout the year. I find it’s the same students that are interested in doing these kinds of things.



13 中四国高校生会議

(1) 実施日及び参加者

- ① 実施日 令和2年2月8日(土) 13:00~21:00、9日(日) 8:30~15:00
- ② 参加者 3名(1年生)、引率教員1名

(2) 実施内容

愛媛県立松山東高等学校主催で、今年4年目を迎えた中四国高校生会議。今年は岡山県立岡山城東高校・高知県立高知西高校・愛媛県立松山北高校・愛媛県立松山中央高校・愛媛県立宇和島南中等学校・愛媛県立松山東高校の6校が集まった。2日間の主な活動は、アクティビティとディスカッションの二つに大きく分けられ、詳細は以下の通りである。

【アクティビティ】

即興英語ディベートを行った。グループに分かれて、3対3で行うパーラディベートというスタイルのディベートを実施。まずは日本語で練習を行い、その後英語での練習。いくつかのお題で練習試合のようなものを行い、二日目にはトーナメント方式で試合を実施。優勝チームが決まった。

【ディスカッション】

「SDGsから見た、世界と日本と中四国の課題について」というテーマのもと、グループに分かれディスカッションを行った。切り口として、トレードオフの解消と課題解決への取組が設けられ、それぞれのグループで話し合い、まとめた。2日目にはグループでまとめたものを、課題解決への私たちの提言として発表した。

(3) 活動の様子



←各校 10 分での学校紹介。学校行事や特色等について説明があった。本校は英語で発表。



↑ SDGs に関するディスカッションのまとめとして、グループからの提言を行う様子。発表方法にも工夫があった。

→ 3対3のチーム対抗で即興ディベートを行っている。お題は、「高校生はアルバイトをするべきか」



14 第7回高校生「国際問題を考える日」

(1) 日程・参加者

- ① 実施日 令和2年2月11日(火)
- ② 参加者 49名(2年生23名、1年生26名)、教員2名
- ③ 場所 神戸ファッションマート

(2) 実施内容

兵庫県教育委員会、大阪大学、WHO神戸センター主催で開催された、第7回高校生「国際問題を考える日」に参加。

午前には基調講演およびパネルディスカッションに参加。基調講演については、「国際的な視点から見る東京2020オリンピック・パラリンピック大会」をテーマに、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会 PRセクレタリー 河村 裕美 氏による講演であった。パネルディスカッションについては、「オリンピック・パラリンピックと国際問題」をテーマに、WHO健康開発総

合研究センター 医官 茅野 龍馬 氏と3名の高校生によるものであった。

午後からは参加校の高校生によるポスターセッションが行われた。1セットが発表10分間、質疑応答5分間の15分間で構成されており、各グループ2セット行った。

(3) 生徒の感想

- ・ポスターセッションでは他の学生の発表を聞いてとても凝っていたので、劣等感を抱いた。しっかりと自分の意思を持って発表・質疑していた。また、現実味を帯びているような解決策だったりSDGsにあった発表が出来ていた。この機会に抱いた劣等感をプラスに考えて次回の発表の機会では観衆を惹きつけるような発表内容やポスターにしたい。この貴重な経験を活かしてこれからの学校生活を頑張りたい。また自分の意思をしっかりと持ち先入観を持たずものを見ていきたいと思う。
- ・他校の参加生徒は全員と言っていいほど自信に溢れていてキラキラしていました。普段話す態度や発表以外の場面では私たちと同じように幼くても、発表が始まった瞬間に切り替わり、大人が演説をするように説明する人が多かったです。今回私が一番思ったことは、西高生は探究だけでなく勉強でもそれらを義務、やらなければいけないこととしてしか認識していないことです。今回出会った他校の生徒たちは、このような活動に対して「やりたい」「解決したい」「伝えたい」という思いが強かったです。私も今回をきっかけに勉強にも全ての活動にも意欲をもって取り組みたいと思いました。
- ・兵庫県は探究活動が盛んに行われていて、高知と比べたら比べ物にならないくらいレベルが高いところが多かった。そこから、私たちは大学受験などで戦っていかないといけない人達に現段階で負けていてどうするんだと思ったので、探究活動を来年度も頑張ろうと思った。

(4) 成果と課題

他のSGH校や探究活動に取り組んでいる生徒たちと意見交流をおこなったことは、生徒にとって他校の情報や取組を知るだけでなく、自分たちの探究活動の課題を知るきっかけとなり、大きな刺激を受けた活動となった。



Ⅶ 英語授業における取組

「英語運用能力を磨く」ことは、本校SGH事業の2本柱のひとつである。1年次に十分な量のインプットとアウトプットを重視し、その後の英語による探究活動の基礎力の向上を目指し、2年次にはサブテーマに基づいた英語の探究活動と、「グローバル探究Ⅱ」で行う日本語による探究活動との融合を図りながら、3年次の英語による国際シンポジウムに向けて、英語運用能力の向上を目指した。3年次には、英語による国際シンポジウム及び英文エッセイ作成を通じて、英語の4技能運用能力の向上を目指した。

パフォーマンステストやその実施に向けた準備の授業でも、生徒の全体的な英語使用量の増加を意識してきた。各技能のパフォーマンステストを取り入れることはもちろん、多読、多聴、多話、多書にも取り組み、それらの評価方法を検討することにより指導方法を改善してきた。

多読やプレゼンテーション、スピーチ、ディベートなどの取組では、タブレットを活用して探究活動を進めており、生徒は情報収集や整理が容易にできるようになった。またプレゼンテーションを行う機会を増やしたことで、発表態度が全般的に改善された。

1 英語課題研究の目的

(1) 英語活用力の育成（オールイングリッシュで探究活動）

以下により、探究活動を深化させるとともに、実践的な英語活用力の育成、向上を図る。

- ① 1年次 <実践的英語力養成>（課題研究外）
 - ア 多読・多聴・多話・多書によるバランスの取れた4技能の伸長
 - イ 海外の高校生と「食」をテーマとするディベートやディスカッション
- ② 2年次 <英語で世界を探究>（課題研究）
 - ア 「英語表現Ⅱ」「グローバル・エデュケーションⅠ」において、「信念／信仰と食」「食とフェアトレード」「言語／習慣と食文化」のサブテーマに基づいた探究活動
 - イ 海外の高校生とインターネット等を活用したディスカッション
- ③ 3年次 <英語で世界に発信>（課題研究）
 - ア 「英語課題探究」「グローバル・エデュケーションⅡ」において、2年次作成リサーチペーパーの修正
 - イ 国際シンポジウムでの発表及びディスカッション
 - ウ 英文エッセイ作成、クラス内プレゼンテーション及びディスカッション

2 各学年の取組

(1) 多読

1年次の多読授業では、オンラインシステムM-Readerを使用し、生徒の進捗状況がオンラインで随時管理できるように工夫している。このシステムでは本を読みながら英語のクイズに答えていくため、50分間読書に集中できるメリットがある。

またM-Readerのテストは全て英問英答であるため、英問英答形式の読解問題を抵抗なく解くことができる。M-Readerに切り替えてから、多読授業中の生徒の集中力が持続するようになっている。例年1、2年生（普通科）は週1時間程度を、英語科は、授業（年間10時間程度）や休み時間、放課後および休日を利用しての活動としているが、本年度についてはシステムを使わずに、1年生の英語科を対象に行った。



図書を選ぶ生徒



レベルごとに整理されている図書

	目標語数	0-24%	25-49%	50-74%	75-99%	100%
PE I (英) 40人中	下表のレベル によって設定	0人	0人	1人	1人	38人

2学期末の多読目標達成率

M-Reader レベル	0	1	2	3	4	5	6
目標語数	10,000	15,000	20,000	30,000	40,000	50,000	60,000

※ 達成率は、生徒個人の読むレベル（M-Reader レベル）に合わせて目標語数を設定し、その目標をどの程度達成したかを示している。

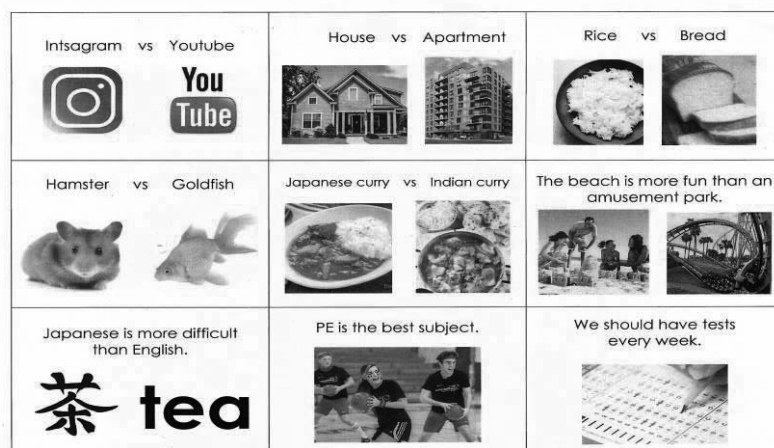
(2) 探究活動

3年生は、「英語課題探究」（普通科選択）では、3月に選択者を数回集め、テーマ決めを行った後、1学期には、国際シンポジウムに向けて、内容の調査、論理の組み立て、内容の精査、データ更新、論理の修正、原稿の英訳、英文原稿の修正、パワーポイント作成、プレゼンテーション練習を行った。2学期の「英語課題探究」では、英文エッセイ作成として、英文パラグラフの書き方、テーマ決定、テーマに沿ってリサーチ、エッセイ修正・完成、エッセイ内容のプレゼンテーション用資料を作成し、プレゼンテーション及び英語による質疑応答を行った。

「グローバル・エデュケーションⅡ」（英語科）では、クラス全員が関わるように、発表班（2グループ）、パネルディスカッション班（意見発表・日本語要約）、司会班、パンフレット作成班に分かれて、「英語課題探究」と同様の活動を行った。2学期前半では、英文エッセイのテーマを決定し、論理の吟味をしながら、アウトラインの作成を行った。後半では、「英語課題探究」と同様に英文パラグラフの書き方、テーマ決定、テーマに沿ってリサーチ、エッセイ修正・完成、エッセイ内容のプレゼンテーション用資料パワーポイントを作成し、プレゼンテーション及び英語による質疑応答を行った。

2年生は、「英語表現Ⅱ」（普通科）及び「グローバル・エデュケーションⅠ」（英語科）で、「信念／信仰と食」「食とフェアトレード」「言語／習慣と食文化」のサブテーマに基づき、グループで英語による探究活動を実施した。また、探究結果をクラスでプレゼンテーション、質疑応答を行った。昨年度に引き続き、今年度も従来のグローバル課題の学習に加え、食に関する内容を各テーマに盛り込んだ。宗教の場面ではイスラム教のハラールフードに代表される各宗教の食を取り扱ったり、貧困の場面では発展途上国における主要作物がどのような役割を果たしているかなどを学んだ。授業は、各テーマについて最初に命題を与え、それに対して賛成か反対かを示し、その根拠を二つ述べるというフォーマットを提示して、1学期はグループ発表を行った。また2学期には、別の命題について個人で探究し発表した。個人発表の際には、発表の機会を少しでも多くするために生徒を4グループに分け、全員が4回ずつ発表する機会を与えるように設定した。また、本校は以前から多くの外部講師を招いて授業を行っている。

1年生は、サブテーマ学習を予定していなかったが、英語による探究入門という位置付けで、調べた内容のプレゼンテーションを行うことや、自分の意見を理由とセットにして練習を行うことで、次年度に向けた学習の素地作りに努めた。



普通科1年生の授業で使ったパフォーマンステストの資料



普通科2年生がプレゼンテーションを行った際の資料（一部）

(3) 多聴・多話・多書

リスニングとライティング、スピーキングとライティングを組み合わせた活動を多く実施した。帯活動として、ペアで3分間話した内容を次の5分間で50語以上書くという活動を組み入れ、継続して行った。一昨年度より1、2年生の普通科でも取り入れたディベート活動は、与えられた論題について、読む、書く、話す、聞く活動が必要で、4技能向上を意識して指導した。言いたいことがあってもうまく伝えられないことに歯がゆさを感じ、それが英語学習へのモチベーションになっている。

次に示す表は、普通科2年生の「英語表現Ⅱ」「コミュニケーション英語Ⅱ」における授業内容の構成である。英語科は、これに加え、「グローバル・エデュケーションⅠ」「パワー・イングリッシュ」で、それぞれの言語活動をより多く行っている。すべての授業で少人数講座を編成しており、常にアクティブな姿勢での活動が要求される状況をつくっている。

1年生は、ネイティブのみによる授業が週1回あり、授業そのものが多聴活動になっている。

	Listening	Reading	Speaking	Writing
授業での活動	● リスニングテキスト (週1回) ● Pair Work (毎回) ● Debate (年7時間)	● Pair reading (毎回)	● Debate (年7時間) ● Presentation (年10時間) ● Speech (年2時間)	● レッスンごとの表現活動 (週1回) ● Debate Speech ● Presentation / Speech Script
定期試験	● Listening Test (年5回)	● Reading Test (年5回)	● Presentation (年2回) ● Speech (年3回)	● Writing Test (年5回)
家庭学習	● 週末課題 (毎週)	● 週末課題 (毎週)		● 週末課題 (毎週)

3 変容から見る成果

(1) 生徒の変容

① 英語検定取得率（本年度 第2回までの結果）[]はGTEC 結果

学年	学科	準1級	2級 [GTEC A2. 2-B1. 2]	準2級以上[GTEC A2. 1 以上]
		取得率	取得率	取得率
1年	普通科	0%	0.4%	8.3%
	英語科	0%	5.0%	45.0%
2年	普通科	0% [0%]	4.6% [35.0%]	47.3% [82.1%]
	英語科	0% [2.6%]	35.0% [89.5%]	90.0% [97.4%]
3年	普通科	0%	17.2%	80.0%
	英語科	12.5%	80.0%	97.5%

昨年度までは1、2年生は英語検定を全員受検としていたが、本年度はGTECを全員受験とした。（1年生の結果は3月末の予定）。1年生普通科における準2級取得率は、SGH開始前の平成26年度は25.8%、SGH1年目28.4%、SGH2年目37.9%、SGH3年目67.1%、SGH4年目の本年度は60%、最終年度は45%（本年度においては第2回までの結果）となっている。また3年生5名（英語科）が準1級に合格するなど、全体的に英語力の底上げが確認できる。1年生においては一昨年度までの指導に加え、本年度もネイティブによるライティング指導を取り入れたことでライティング力を強化することができている。また例年普通科では、英検の二次試験で行われるスピーキング指導に苦勞していたが、授業中に音読や意見を述べる経験を重ねてきたことで、多くの生徒が個人の意見を述べる設問に対応する力を身に付けた。

② 生徒の英語の質的变化

- ア 多書活動では、間違いを恐れずどんどん書ける生徒が増えてきている。英検2級のライティング問題にもスムーズに取り組むことができている。
- イ 理解できないような英文を書く生徒がほとんどいない。些細な間違いはあるが、ネイティブスピーカーにも理解される程度の自然な文章が書ける。
- ウ 緊張しながらも英語でのプレゼンテーションを堂々で行えるようになった。発表態度・聴く態度共に向上し、英語での応答も何とかできている。
- エ 書籍やタブレットを利用して論拠を精選していく過程で、グループとして協力しながら探究活動が行えている。
- オ 3年生普通科のSGH対象生徒として、「国際シンポジウム」に主体的に参加したことやクラス内発表を複数回経験したことにより、英語プレゼンテーション能力が向上した。
- カ 英文エッセイの完成は普通科生徒にとっては初の取組であり、英語の論理展開や論拠の挙げ方の基礎を習得した。
- キ 英文エッセイについて、英語での質疑を行った際、質問の正確な聞き取りや応答ができるようになった。

③ 全国模擬試験における平均点偏差値向上

- ア 表現力の得点率が全国平均に近づいてきた。
- イ 長文読解（特に小説）の得点率が全国平均に近づいてきた。
- ウ リスニングの得点率が全国平均に近づいてきた。

④ 積極性の獲得

- ア 海外リサーチは、昨年同様、探究テーマの絞り込みの時間の確保のため、募集時期を1か月早め、選考は、日本語によるプレゼンテーションと英語の質問に一つ答えることを課していたが、希望者全員が、熱意をもって面接に臨んだ。
- イ SGH高校生フォーラムには2年生4名が参加し、国内外の国際色豊かな会議の場で、発表

や質疑応答をすることが、英語学習への強い動機付けとなっている。(本年度はシンガポール大学で行われる「グローバルリンク・シンガポール 2019」のポスターセッションの部への参加はなかった。)

ウ 高知県の英語ディベート大会に、英語科から校内選考を経て2年生1チーム、普通科から2年生及び1年生各1チームが、また各種スピーチ大会やプレゼンテーション大会にも28名が非常に熱心に取り組み、そのうち6組が賞を勝ち取るなど成果を上げた。

エ 国際シンポジウムでは、堂々とした姿勢でプレゼンテーションを行い、英文エッセイは、全員がより良いものにするための努力を惜しまず、分かりやすい発表を行った。積極的に英語を使おうとする姿勢が見られた。

(2) 授業の変容

① 外国人講師の増加に伴う授業担当の変更および特徴

ア 普通科1年生の「英語表現Ⅰ」を1単位増単して3単位とし、そのうち1単位を外国人講師による単独授業とした。従来から英語科はネイティブのみの授業を設定していたが、平成29年度からそれを普通科にも広げ、英語を使わざるを得ない環境を作った。ペアやグループでのディスカッション、ディベート入門、グループでのプレゼンテーションなど、指示から評価まですべてを英語で行った。年度当初は戸惑いも見られ、生徒間で日本語を使用する場面も見られたが、徐々に授業形態に慣れ、英語を使用することへの抵抗感は薄らいでいる。

イ 普通科2年生の「英語表現Ⅱ」(2単位)に、ALTとのティームティーチングを取り入れた。サブテーマに基づく探究活動、ディベート、プレゼンテーションなどは、日本人教員とのティームティーチングとしたことで英語を使って意見を発表する場面が格段に増加した。

ウ 英語科2年生の学校設定科目「パワー・イングリッシュⅡ」(2単位)の少人数講座を継続し、外国人講師とALTのティームティーチングとした。サブテーマに基づく探究活動、ディベート、プレゼンテーションなど、より充実した英語表現活動を可能にした。

② 授業内容の変更および特徴

ア サブテーマに基づく英語探究活動の実施

英語科2年生の学校設定科目「グローバル・エデュケーションⅠ」で行っていた英語による探究活動を、SGHのサブテーマに基づく内容とするとともに、普通科にも広げ、時間的な制限はあるものの同様の授業を展開した。従来から扱っていたグローバル課題を、全体で一貫したテーマに基づいて考えるようにしたことで、問題をより多角的にとらえた教材作成、授業構成に繋がった。

イ 英語絶対量の増加

普通科1年生及び2年生の「英語表現」で、ディベート活動を取り入れたことにより、「読む」「聞く」「話す」「書く」のすべての活動量が増加した。また、意図的に、多書活動を組み込んだことにより、生徒は大きな抵抗を持つことなく、英語に触れる機会が増えている。

ウ 活動内容の充実

普通科におけるディベートやプレゼンテーションなど、今まで十分にできていなかった活動を学年で統一して取り入れた。

(3) 評価の変容

① パフォーマンステスト

ア プレゼンテーションを年5回評価に組み込んだ。

イ 会話を持続させる形のインタビューを年5回実施した。

② 定期テスト

ア 読解テストの英文の内容に関する考えを述べる形式を取り入れた。

イ リスニングテスト及びライティングテストを必ず一定量組み合わせることとした。

③ 平常評価

ア 週末課題として課す英文日記(1週につき5日分)を評価に加えた。

イ リスニング課題を毎週与え、評価に加えた。

ウ 長文読解課題を与え、評価に加えた。

エ 毎週ネイティブによるライティング課題を与え、評価に加えた。

(4) その他の変容

ア 学校内外に、普通科の生徒においても英語のプレゼンテーション及び英語での質疑応答ができることを証明し教員や生徒が持っている学習のシーリングを上げることに貢献した。

イ 国際シンポジウムの参加者から、発表内容に対して活発な意見や質問が出ていたため、世界の諸問題について関心を持たせ、またSGHとしての取組の幅広さを伝えることができた。

4 課題と次年度の取組

(1) 探究過程における日本語の使用

本年度も情報収集やグループ内での情報整理の際に、日本語を使用する傾向が見られた。英語の原稿を作り、英語で発表するまでの過程において、ほとんど日本語で探究し、日本語で話し合っているため、英語の絶対量が少ないという課題がある。

日本語でのリサーチを止めるのは現実的でないため、リサーチは授業外で行い、授業ではできるだけ英語でまとめたり、発表したりする時間に充てるような仕掛けを考えていく必要がある。

(2) 課題研究に要求される語彙の不足

昨年度行った食をテーマとした3つの探究学習では、生徒にとってはなじみのない概念が多く、自分達が探究したもの異なる分野で他グループが発表した場合に、その内容を理解できない場面があったため、今年度は、即興性を重視したShow&Tellの形式でプレゼンテーションを行った。専門的な内容をいかに平易な英語で分かりやすく伝えるかは課題であるが、昨年度からは一定改善された。今後は英語で質疑応答ができる力を身につけることについて力を入れていきたい。

来年度も、聞き手を意識したプレゼンテーションをすることを目標とするために、visual aid等の工夫をして、語彙を共有したうえで、分かりやすく自分の言葉で伝えるプレゼンテーションを心掛けるようにする指導を継続していきたい。同時に多読・多聴・多話・多書の活動を一層充実させることで、基礎的な語彙力を強化させる必要がある。SGHとして、探究と英語の一体化を目指すためには、より高い英語力を習得させるためのプログラムを考える必要がある。

(3) 日本語で行うグループ探究との内容の乖離

生徒たちは「グローバル探究」において、グループで探究活動を行い、リサーチペーパー（論文）を作成しているが、そこで扱う内容と英語授業で扱うサブテーマに基づく探究を別物と捉える傾向が強い。

本校SGHテーマである「食を活かした地域創生」案を展開するには、世界に目を広げる必要があり、そのためには、世界の食事情を育む文化、宗教、流通に関する理解が不可欠であることを伝える必要がある。それと同時に、「グローバル探究」においても、グローバル・アウェアネスを喚起する指導が求められる。「グローバル探究」を指導する教員と英語科教員が、目的と方法を共有しつつ授業を行えるように、定期的に話し合いの場を設ける必要がある。

(4) 2年次のグローバル探究Ⅱから3年次への接続

3年次の「グローバル・エデュケーションⅡ」及び「英語課題探究」は、7月の国際シンポジウムに向けた限られた時間の中で、2年次の「グローバル探究Ⅱ」においてグループで作成したリサーチペーパーの内容の再検討（リサーチが必要な部分の洗い出しなど）にかなりの時間を要したため、内容の深化が難しかったという昨年度までの反省から、本年度も、3月に選択者を数回集め、テーマを決め、必要なリサーチ内容の検討を行う予定である。来年度も、内容充実を図るために、より早い時点でグループとテーマが決定できるよう、2年次から3年次へ連続した指導計画を作成しておくことが望ましい。

VIII 成果発表会

○高知西高校SGH国際シンポジウム

1 目的

生徒の思考力・判断力・表現力の育成と英語運用能力の向上を目指して取り組んできた探究成果を県内外に発表し、SGH活動の成果を広めるとともに、地域創生や世界の課題解決に取り組んでいる海外の高校生をシンポジストとして招き、討論することを通して、今後のSGHにおける探究活動に資する。

2 日時 令和元年7月4日(木) 8:30-15:00

3 会場 高知市文化プラザ かるぽーと
高知市九反田2番1号 TEL 088-883-5011

4 日程

9:00-9:30 来賓・保護者受付

9:25 映像放映

9:30-9:40 開会行事(竹村 謙 学校長)

9:40-9:50 来賓挨拶(高野 和幸 高等学校振興課長)

9:50-11:35 3年生研究発表(使用言語:英語)及び質疑応答

9:50-10:05 「It Starts With Us!~ How Can We Create a Disaster-Resistant School~」(3年普通科 英語課題探究)

10:05-10:20 「MOTTAINAI」(3年普通科 英語課題探究)

10:20-10:35 (休憩15分)

10:35-11:05 「OPEN THE DOOR」(3年英語科 GEⅡ)

11:05-11:35 「Understand Me!!」(3年英語科 GEⅡ)

11:35-11:50 (休憩15分)

11:50-12:30 基調講演(40分)

講師 木村 拓也 氏(九州大学 人間環境学研究院 准教授)

演題「世界のフラッグシップ(旗艦)大学が目指す
グローバル・イノベーション人材養成の要諦」

12:35-13:30 (昼休憩55分)

13:30-14:30 国際シンポジウム(60分)

テーマ:「What can we, high school students do to revitalize our community?」

登壇者:基督教香港信義會元朗信義中學(The ELCHK Yuen Long Lutheran Secondary School)生徒(香港)・上海外国語大学附属外国語学校東校生徒(上海)・高知西高校生徒

14:30-14:50 講評(近森 憲助 氏 鳴門教育大学名誉教授)

14:50-15:00 閉会行事(森 隆彦 副校長)

5 内容

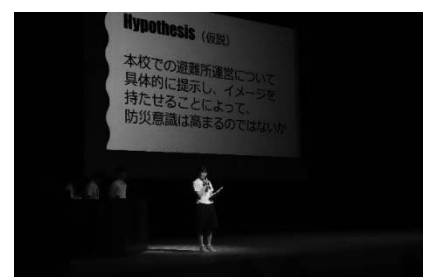
○ 3年生研究発表(使用言語:英語)及び質疑応答 9:50-11:35

① 「It Starts With Us! ~How Can We Create a Disaster-Resistant School~
(私たちから始めよう!災害に負けない学校づくり)」

発表者:岡村凜香 小松風流 平ほのか 村岡茜(3年普通科)

本校は、災害時に指定避難所となっている。私たちは、逃げるまでの訓練には慣れているが、避難後の行動についてあまり知識がないのではと考え、本校生徒対象にアンケート調査を行った。その結果、「災害時、何かをするべきであると考えているが、具体的に何をすべきか分からない」と回答した生徒が多数いることが分かった。

防災について現状や課題を学ぶために高知市地域防災推進



課を訪問し、そこで本年度本校の避難所マニュアルを作成する予定であることを知った。私たちは既に作成されている西部中学校の避難所マニュアルを参考に、高校生として何ができるのか自分達の目線で考えた西高校生用アクションプランを考えることで、本校生徒が、いざというときに自信をもって行動するきっかけになるような提案をしていきたい。

② 「MOTTAINAI (MOTTAINAI! ～食材からのSOS～)」

発表者：浦本愛 門田奈々花 谷日菜子 田村哲生 中山亜久理 三谷ひらり（3年普通科）

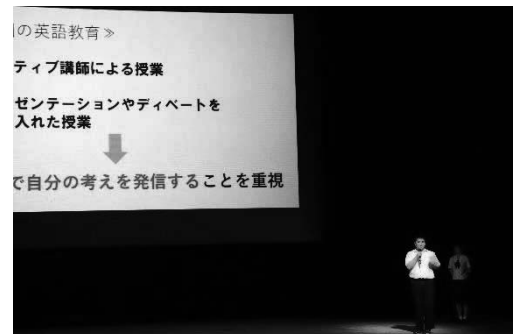
日本では、年間2,842万トンの食品廃棄物等が出されている。このうち約646万トンが、まだ食べられるのに廃棄される食品で、いわゆる「食品ロス」と呼ばれている。これは、世界中で飢餓に苦しむ人々に向けた世界の食糧援助量の約2倍に相当する。近年、これらの食品ロスを削減する動きが急速に高まっており、国会で食品ロス削減法が可決されたほか、スーパーやコンビニ、飲食店では食品ロスを減らす取組が多く行われている。一方で、廃棄量の約半分を占める家庭での取組はまだ十分とはいえない。そこで、私たちは高知西高校生を対象にしたアンケートや、先行事例をもとに家庭での食品ロスを減らす方法を提案したい。



③ 「Open the Door（日本人の英語との向き合い方）」

発表者：久保健太 島村夕愛 西岡柚月 久川末結 船井柊希 大和琉聖（3年英語科）

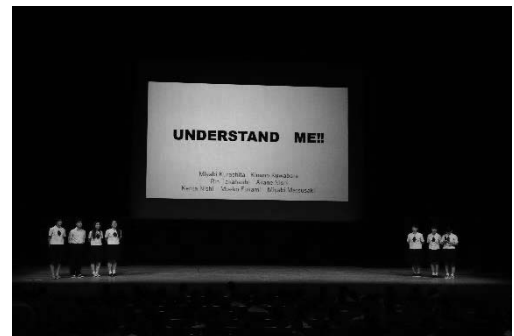
これからグローバル化が進んでいく社会では、英語はなくてはならないものになってきている。実際に日本語を母国語としない人たちと会話をしたり、外資系の企業と仕事をしたりする場面では、英語というコミュニケーションツールはこの先必要不可欠になってきている。しかし、日本人の英語力をアジアの先進国と比較したとき、読む力があっても話す力が低いという現状にあることが分かった。日本人の英語の話す力を向上させるにはどうすればいいのか、同じアジアの先進国である韓国と中国の英語教育との比較検討を通し、国民性、英語教育、英語を使う機会、という3点に着目し探究を進めてきた。



④ 「Understand Me!（異文化理解の必要性）」

発表者：藏下雅 桑原絹乃 高橋凜 西映音 西健汰 深見萌子 松崎雅（3年英語科）

現在の日本は労働力不足である。私たちは昨年、労働力不足解決を解決するためには外国人労働者を単純労働の場で受け入れるのがよいと考え、探究を進めてきた。その結果、人権問題が次の課題として浮き彫りになった。しかし、人権問題は法律で解決できる問題ではなく意識を変えていく必要がある。そこで意識を変えていくために必要なのは異文化理解の教育ではないかと考えた。海外経験を通して異文化理解力を身に付けることはできるが経済的に厳しい。そのため、今年は海外経験なしで異文化理解力を身に付けることは可能なのかという点に注目し探究を進めてきた。



○ 基調講演 11:50-12:30

講師：木村 拓也 氏（九州大学 人間環境学研究院 准教授）

演題：「世界のフラッグシップ（旗艦）大学を目指すグローバル・イノベーション人材養成の要諦」
要旨：

皆さんは、自己紹介が得意ですか。私は自己紹介が苦手ですが、芸能人と同性同名のため数年に一度、テレビ番組へのオファーがあります。また、得したことは、どんな人にも一発で名前を覚えてもらえ、外国人とも仲良くなれることです。

今日は、国際化と言われている中で、大学が何のために国際化を行おうとしているか、世界や日本の大学で何が起きているか、どういう人材が活躍できるのか についてお話したいと思います。

初めに、九州大学について紹介すると、九州大学は留学生数が日本で5位の大学です。国際化の評価指標で言うと、九州大学、東京工業大学は国立大学の中で国際化の評価が高い大学です。大学構内にはハラール料理（イスラム法で許された調理法で調理された料理）のお店があり、イスラムの格好をしている人も多くいます。

大学が目指しているのは「蘊奥（うんおう）の考察」、つまり学問の極意を研究することです。未知の研究分野と遭遇し、世界でオンリーワンの研究を行っています。このため、大学では、「正解がない、既存の手法が通用しない、教科書が存在しない」テーマを扱うこととなります。近年、AIの登場で、職業のあり方が変わるといわれています。それと同様に、研究にも流行り廃りがあります。10年単位で新しいイノベーションが起これ、新しい研究にとって変わられます。これは、昔からあることです。イノベーションの例として、機械工学分野の人が車を作ってきましたが、科学分野の人が一緒になって開発し、ハイブリットカーが誕生しました。自分の分野に固執することはよい商品作りに繋がらず、他の分野の人と意思疎通する必要があります。

このようなイノベーションを起こすため、世界や日本の大学が変わってゆこうとしています。九州大学では、教授が一方的に話をする講義形式が少なくなり、プロジェクト学習が多くあります。これは、学生自らが、チャレンジしたいことの企画書を書き、プレゼンを行うことで、出資金をまかなえたり、留学のチャンスをつかむことができます。現在の大学は、企画とアイデア次第で、授業料以上の資金援助が受けられるチャンスが多くあります。大学の授業内容も、プレゼンテーション力、問題解決力、グループディスカッション力の育成を重視しています。また、英語の授業は目的や伸ばしたい能力に応じて選択できるカリキュラムとなり、学内留学（留学生対象の講座に参加）や海外サマースクール（短期留学）、学生寮での留学生2名と日本人2名でルームシェアが可能となるなど変化しています。

このように大学が国際化しているのは、チャンスをつかんでいる人が、他者の話を聞くことができる人（謙虚さ・素直さ）であり、自分の価値観を相対化できる勇気のある人だからです。このような人は、自分一人ではできないことを他の人と協働してできる人になります。つまり、他人の力を使って限界を突破できる能力、それが適応力です。この適応力を手っ取り早く身に付けるのが、グローバル化、国際化なのです。世界のフラッグシップ（旗艦）大学である、メルボルン大学やスタンフォード大学でも、人と話す機会を設け、環境適応する心構えを養う留学を推奨しています。本日、みなさんにお伝えしたいのは、英語を学ぶことが国際化ではなく、どんな環境であってもその環境への適応力を身に付けてチャレンジしてみる度量や動じない感覚が大事だということです。



○ パネルディスカッション 13:30~14:30

テーマ：「高校生の私たちがコミュニティを活性化させるためには何ができるか？」

登壇者：上海外国語大学附属外国語学校東校（上海）生徒（4名）

基督教香港信義會元朗信義中學（香港）生徒（4名）

高知西高校生徒（5名）



昨年度に続き今年度も連携校を招聘して、「高校生の私たちがコミュニティを活性化させるためには何ができるのか？」をテーマにパネルディスカッションを行った。今年度は、上海外国語大学附属外国語学校東校（上海）の生徒と、基督教香港信義會元朗信義中學（香港）の生徒を招聘した。ともに英語を母語としない生徒たちが、英語を活用して、ディスカッションを行った。一部、上海の生徒が日本語を活用して、本校生徒とディスカッションする場面も見られ、昨年度とは違った形で意義のあるパネルディスカッションとなった。実施に向けては、早くから両校生徒でテーマを何にするか等の意見交換をし、準備をしてきた。

それぞれの学校の代表者は、学校の特色や学校生活の紹介をした後、“高校生が果たすコミュニティでの役割”について意見交換をした。その中で、それぞれの生徒たちは、その国の伝統を次世代に伝えていくことや、地方と都市部の経済格差をなくすために地域に貢献することなどが、高校生ができる役割であるという意見が出た。これらの意見交換を受けて、本テーマの「高校生の私たちがコミュニティを活性化させるためには何ができるのか？」について生徒たちができることは、香港の高校生は“高齢者の家を訪問することを通して、地域に貢献し問題意識を高める”、上海の高校生は“高校生が地域の伝統文化に触れる”、本校生徒は“高校生がボランティアで訪日外国人へのツアーを行う”ことが高校生の私たちにできる地域活性化への第一歩ではないかと結論付けた。

このディスカッションでは、サマリー役の生徒を配置して日本語による補足説明を行ったり、スクリーンに英語と日本語を併記することで、討論の内容を聴衆に理解してもらえるように工夫した。生徒たちにとっては、このディスカッションを通して、互いの地域が抱える課題や、その解決策について模索する良い機会になった。

○ 講評 鳴門教育大学 近森 憲助 氏（鳴門教育大学名誉教授） 14：30－14：50

私は、西高校のSGHの計画段階からお話をいただき、現在は運営指導委員として5年間関わっています。今日の4グループの発表は、5年間の積み重ねが結晶化した素晴らしい発表だと思います。

4グループのテーマは違っていますが、共通して言えることは自分たちの問題として捉えられていることです。テーマを決定する際には、SGDsを参考に、学校の課題として第三者的に捉えがちです。しかし、本日の発表は、自分の問題として捉え、自分たちはどう思うのか、どのような解決策を探っていくのかを真剣に素直に述べられていたと感じます。



また、4グループがすべて英語の発表でしたが、私自身も読むこと、書くことはなんとかできますが、聞くことが難しいです。このため、「日本人の英語との向き合い方」の発表には身につまされました。本日の発表スタイルは、英語を使用しながら日本語のスライドを合わせていますが、とても自然で発表が洗練された印象があります。青・黄色のカードで参加型の聴衆を巻き込んだプレゼンテーションも板についてきたと思います。これらは、5年間に培われてきた先輩たちの姿を目にしてきた皆さんの集大成だと感じます。

「私たちから始めよう！災害に負けない学校づくり」の発表は、地震や津波災害が起こったとき、学校がどのような役割を果たせるか、自分たちがどう関わっていけるか真剣に取り組み、語ったことに大きな価値があると思います。強調すべきことは、考えることの重要性です。避難所の中でトラブルを考える上で、異文化理解とも関わりがでてくることだと思います。

「食材からのSOS」では、食品ロスに対してフードドライブの解決策が提示されていました。私は、南アフリカのワークショップに行ってきたのですが、冷蔵庫がないために貯蔵できずに廃棄する状況となり、発展途上国でも食品ロスの問題は起こっています。そして、貯蔵装置のある先進国でも食品ロスの問題が起こる、ここに私は関心を持っています。食品ロスが起こる構造となっているのかは、文化的な習慣が奥底にあることも意識的に探究するのも興味深いと思います。

「異文化理解の必要性」については、私は1,000人いれば1,000の異文化があると思っています。他者理解について、フランス人哲学者レヴィナスの言葉では、「一体我々は他者と出会っているのか。

自分が自分の考えをもとにして捉えた他者と出会っているだけで、本来的な意味で他者では出会っていないのではないか」という哲学的な議論もあります。私がみなさんをお願いしたいのは、異文化の異だけに注目するのではなく、共通している点にも目を向けてほしいということです。

午前中の木村先生のお話は、大学進学を考える高校生にとって大事なお話でした。私がお話から学んだことは、「問いを立てること」の重要性です。問いの質が良ければ良いほど、良い探究の成果ができます。みなさんが問いを立てられるときにはじっくりと吟味して、調査を進め、うまくいかない時には問いに帰ってくるということを考えてみてください。

最後に、午後のパネルディスカッションでは、三つの地域の高校生が集まって語り合いました。日本とは互いに深い歴史があり、中には悲しい歴史もある地域や国です。今、政治的な問題を抱えている国もあり、テロリズムや国際紛争が起こっています。このような時期に、このような機会を持ち、語り合った高校生が世界の平和に大きな貢献してくれることを願っています。

6 成果と課題

(1) アンケート結果

- ・3年生の発表は研究する事柄について、解決策を具体的に考えており、私たちにできることが挙げられているのですごく分かりやすかった。メリットとデメリットもはっきりしていた。また、発表の仕方ただ原稿を読むだけでなく、相手に語りかけているように感じた。
- ・午前中の発表会では、内容に加えて、発表者の話し方に注目して聞いた。英語でのスピーチを聞きなれていない私でも聞き取りやすかったのは、意味の区切れで区切って話し、かつ丁寧に発音してくれたからだ。これは、英語のスピーチだけでなく、今後の面接やプレゼンテーションでも意識しないといけないことだと思った。私もいつか英語でスピーチできるようになりたい。
- ・九州大学の変化を知って、自分たちの周りには多くの機会があふれており、それにどんどんチャレンジしていくことが大切だと分かった。国際化は、英語が話せるようになるかではなく、価値観を相対化できるようになることだ。度胸があればチャンスが広がることが分かったので、経験値や価値観を多様化していきたい。
- ・これから大学入試を迎える私に、とても参考になった。大学は自分の学びたいことを自分から勉強すべき場所で、チャンスをいかせるかどうかは自分次第だと思った。
- ・大学とは何かが少し分かった。私は、将来、数学の教師になりたいと思っているが、大学で生活をしている中で、新しくやりたいことが見つかるかもしれない。自分にも何か見つかるかもしれないと期待したい。
- ・香港の学校では、英語で歴史や理科の授業を行っていることに驚いた。日本人の私たちは、英語の授業を受けるだけでも大変だと思っている人が多いはずだ。日本と外国の英語レベルの違いがよく分かる事例だった。外国の高校生の質問力は特に素晴らしかった。
- ・生徒の実生活に近い内容が多く、できればオリジナルな提案をしてくれたらと惜しく思いました。
- ・発表に至るまでの準備、勉強、考察、いろいろな努力をされてきたことも伝わりました。特に関心したのは、質問に対する答えを、その場で英語で答えたところです。内容も深く、自分の考えをしっかりと言えていて、素晴らしいと思いました。
- ・テーマの選び方、掘り下げ方、プレゼン能力、質問への対応、すべてが年々素晴らしく向上していると思います。その努力が進路に生かされますように。

(2) 成果

- ・昨年度実施した際に課題として挙げられた「英語での発表」と「聴衆の内容理解」の両立を図るため、今年度は研究発表のパワーポイントを日本語表記とし、パンフレットにも発表内容の概要を日本語と英語で記載した。また、午後のパネルディスカッションでは、サマリー役の生徒を配置し、ポイントごとに内容を聴衆に伝えることにしたため、聴衆の内容理解度が向上し、校内、校外を問わず好評であった。
- ・聴衆全員が参加できるシンポジウムを目標とし、各研究発表やパネルディスカッションに聴衆が答えられるような簡単な質問を必ず入れるようにした。そして、聴衆はその質問に黄色と青色のカードを使用して答えるようにした。この工夫の成果は、まず聴衆が「ただ聞く人」から発表やディスカッションに「参加する人」になったことで、昨年よりも「自分事」として参加できた点である。

また、発表者、聴衆ともに視覚的に質問に対する回答の状況を把握することができた。加えて予想と異なる結果については、その後の発表内容の改善にも繋がった。

- ・今年度は海外連携校である上海外国語大学附属外国語学校東校（上海）の生徒（4名）と基督教香港信義會元朗信義中學（香港）の生徒（4名）が来校し、パネルディスカッションを実施することができた。事前にディスカッションテーマを決めたり、メールでやり取りするなど、国際シンポジウムに向けて、両校で協力しながら取り組めたことは、今後の両校の関係を強めるものとなった。また、互いに英語を母語としない生徒で構成されたパネルディスカッションは、双方にとって、普段から学んでいる英語がどのくらい活用できるのかを試す良い機会となった。



(3) 課題

- ・研究発表者やパネルディスカッション参加者は、3年になってからの短時間で国際シンポジウム発表に取り組んだ。特に、普通科の「英語課題探究」選択者は、所属するクラスが異なっていたため、授業が2クラス・別時間に分かれており、全員で取り組む時間がなかなか取れない状況のなかで、頑張っていた。
来年度については、春休みやランチミーティングの活用、授業が2クラス・別時間授業になった場合にも各授業内容の共有がしっかりできる指導体制を構築する必要がある。
- ・パネルディスカッションではサマリー役の配置は有効だったが、さらに聴衆も参加できるような工夫が必要である。
- ・現在の姉妹校や連携校だけでなく、更に国内外の高校との連携を拡大していく必要がある。
- ・今年度は会場の容量の関係上、国際中学校の生徒の参加ができなかった。次年度は、会場を大きくし、中学生の参加を促したい。

○高知西高校SGH成果発表会

1 目的

『食を活かした地域創生』をテーマにしたグローバル人材の育成のテーマのもと、1年生は高知県の地域創生モデル案の作成、2年生はSDGsを基にした世界の地域課題解決案や高知と世界を結び付けた地域課題解決案等の作成に取り組んできた成果を県内外に発表し、SGH活動の成果を広める。



2 日時 令和2年2月13日（木） 9:00～15:25

3 会場 高知西高等学校体育館2階アリーナ、1階トレーニング室

4 日程

8:30－9:00 来賓・保護者受付（体育館入口 1年生G探委員各クラス1名ずつ）

8:40－8:50 SH・生徒移動

9:00－9:25 開会行事

演劇：「かわいそうなタピオカと環境」（15分）

学校長挨拶（10分）

9:25－11:20 2年生探究成果発表（発表15分、入れ替わり5分）

①「エチオピアの教育状況の改善」（405班 4名）

②「高知の郷土料理×祭りによるインバウンド誘致
～タイ人を高知に呼び込むために～」（タイ班 5名）

③「各県の現状から見た高知県の水害対策の良さと如何に」
(203班 4名)

④「シンガポールの高齢者の健康寿命を延ばそう」
(シンガポールA班 4名)

⑤「広報活動による食品ロスの削減の提案」（706班 3名）

- 11:20-11:50 質疑応答
 11:50-12:10 講評 高知学園短期大学参与・教授 近森 憲助 氏
 12:10-13:00 (昼食休憩)
 13:00-14:45 1年生探究成果発表(全58グループによるポスターセッション)
 13:00-13:45 前半〔(発表8分、質疑応答4分、移動3分)×3回〕
 13:45-14:00 (入れ替え・移動)
 14:00-14:45 後半〔(発表8分、質疑応答4分、移動3分)×3回〕
 14:45-15:00 移動(体育館2階アリーナへ)
 15:00-15:20 講評 大阪大学大学院高等司法研究科教授 谷口 勢津夫 氏
 15:20-15:25 閉会行事

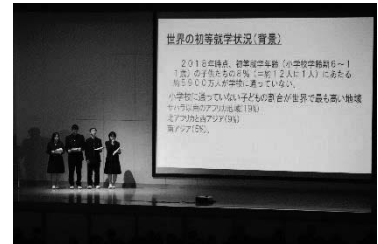
5 内容

○ 2年生学年代表5グループによる探究成果発表 9:25-11:20

① 「エチオピアの教育状況の改善」405班4名

発表者：掛水友凱 高橋香乃 中石樹 弘田恋

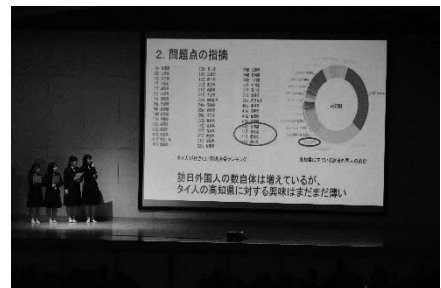
要旨：SGHの探究活動を行うに当たって、私たちは世界にはどのような解決すべき課題があるのかを調べた。すると、貧困問題や飢餓問題が様々な世界問題の中でも主要なものであることに気が付いた。そこで私たちは、貧困問題や飢餓問題は原因に少なからず教育の不足が関係していると考えたため、連鎖性のある教育問題を解決すべく本研究を進めることとした。また、近年技術の発達により遠隔授業が現実的なものとなっている。私たちは、その技術をエチオピアの通常教育に導入できないか考えた。



② 「高知の郷土料理×祭りによるインバウンド誘致～タイ人を高知に呼び込むために～」タイ班5名

発表者：岡崎凜 工藤璃夢 中野輝 中野葉月 戸田妃葵

要旨：現在、インバウンドによる訪日外国人旅行者数は増加傾向にあり、2015年に初めて訪日外国人旅行者が海外旅行者数を上回った。高知県の訪日外国人旅行者数も増加傾向にあるが、他県と比べて高知県の訪日外国人旅行者数は少ない。また、高知県への興味関心も薄い。そこで、私たちは東南アジアの中で、訪日外国人の割合が最も高いタイ人を呼び込むことを考え、タイ人を高知県へ誘致するための政策を提案した。



結論として、高知県のタイ人旅行者数が現状の約800人から高知県の韓国人旅行者数と同様の約3,500人に近づけるために、誰でも参加できる体験型の祭りへの勧誘と高知の有名な郷土料理や私たちがおすすめする郷土料理とお茶の掛け合わせを考えた。また、交通手段としては、LCC(格安航空)の直行便を利用したルートを提案した。

③ 「各県の現状から見た高知県の水害対策の良さととは如何に」203班4名

発表者：北村光希 森下誉祥 松田翔馬 大川智也

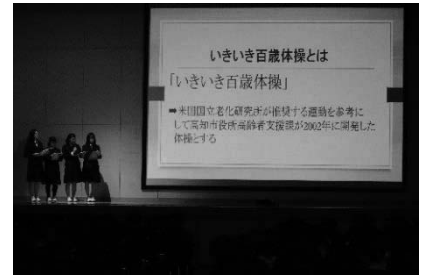
要旨：現在、異常気象や台風による深刻な水害が多発している。河川の氾濫や家屋の倒壊など、生活区域を脅かしている事例も増えてきた。2019年9月、10月に上陸した台風15、19号による浸水によって避難や引っ越しを強いられた人がたくさんいることも記憶に新しい。しかし、高知県は降水量が多いにも関わらず大した被害を受けていない。どこでその違いが出てくるのだろうか疑問に思った。そこで、本論文では、なぜ高知県と他の県で違いが出てくるのか、ということをも明らかにしたい。そのために、高知県の対策と、他県の対策を比較し、何が違いを生んでいるのか、また高知県の長所を他県に推進できないか考察を行った。



④ 「シンガポールの高齢者の健康寿命を延ばそう」シンガポールリサーチA班4名

発表者：長岡遥佳 長家美岬 小松真緒 田中亜海

要旨：現在シンガポールでは、高齢者が年々増加している。また、このような背景の中で高齢者の自殺率が増加しており、2017年時点でシンガポール全体の自殺者数の36%が高齢者が占めている。この原因として、シンガポールには日本のように手厚い保障がないことやメンタルヘルスの悪化といった状態が挙げられていた。そこで、本論文では、高齢者が体づくりとコミュニティづくりをすることで、高齢者が社会的孤立・身体の高齢化を感じることがなくなるのではないかと、またそうすることで元気に働くことができる高齢者が増え、手厚い保障制度が不要になるのではないかと考えた。そのために、私たちは高知市役所が作成したプロジェクトである「いきいき百歳体操」に目を付けた。「いきいき百歳体操」とは高知市役所がアメリカ国立老化研究所の運動を参考に作った体操である。10段階に設定されたおもりを手首、足首につけ既定の運動を行うことにより筋力とバランス能力を鍛えることができる。またコミュニティを作ることにより高齢者が社会的孤立を感じにくくなるという利点もある。



これらの理由から、私たちはシンガポールでこの「いきいき百歳体操」を行ってもらうことでこれらの問題を解決できるのではないかと考えた。更に、この仮説が立証された場合「いきいき百歳体操」が海外でも通用し成果を出せることが分かる。このことから、高齢化の進むアジアにとって「いきいき百歳体操」が、働くことのできる高齢者を増やす有効な手段となるのではないかと考察した。

⑤ 「広報活動による食品ロスの削減の提案」706班3名

発表者：松田花奈 福留ほのか 本田愛海

要旨：今日の食品飽和社会では本来食べられる食品を捨てる『食品ロス』が大きな問題となっている。筆者らは、この問題を解決するために、個人単位での食への意識改善が必要だと考えた。介入方法として、パンフレットを活用した広報活動を行うことを取り決めた。そしてパンフレット自体にどれほどの流布効果があるのかを証明するために、高知国際中学校の生徒91名に協力していただき、「食のありがたみ」、「食事をすることの意義・大切さ」をテーマとしたパンフレットを中学生に配付、そしてパンフレットに対するアンケートを行った。したがって、本論文は、食品ロス削減のためのパンフレットの活用について検証した結果を報告するものである。



○質疑応答 11:20~11:50

五つの代表グループに対して、SGH運営指導委員や来賓の方々、生徒からそれぞれの発表内容等についてのご質問、ご意見、ご感想等をいただきました。



- ・(大阪大学・谷口教授) シンガポールA班に対して：「いきいき百歳体操」というのはどういったものなのか教えてください。
→身体に重りをつけて、椅子に座った状態で手足を動かす体操です。
- ・(高知県産業振興推進部・合田課長) 203班に対して：高知県の水害対策の良さについて補足説明をしてください。
→これまでの経験に基づいて、対策をしているところ。50年ほど前から事前投資を行いつつ水害対策がなされているところです。

- ・(とさはちきんねっと・坂本事務局長) タイ班に対して: タイに訪れた際に、タイにおける四国・高知の認知度・印象について感じたことを教えてください。
- 四国、特に高知についてはその存在を知らないタイ人がほとんどだった。これを受けて、高知県のPR活動と知名度を上げる必要性を強く感じました。
- ・(高知西高校校友会・岡崎会長) 405 班に対して: 教育を受けた人たちが、将来どのような職業・役割を担ってほしいと考えているのか教えてください。
- 教員や地域貢献できる人になってほしいと考えています。
- ・(他高校・教員) 706 班に対して: 消費者向けのパンフレットについて考えられていたのですが、業者に向けたものについては同様のものを考えましたか。
- 消費者の目線から考えることについて探究を進めていたもので、業者向けについては考えることはできていません。今後の参考にさせていただきたいと思います。
- ・(高知西高校・PTA会長濱田さん) シンガポールA班に対して: 高齢者自殺者数に着目した理由を教えてください。
- 最初、医療の方面から探究をしていくことを考えていて、高知県と比較したところ、高齢化についての類似点が見つかった。そこで高齢者の自殺者数の問題にスポットを当ててみることにしました。
- ・(2年・生徒) 405 班に対して: ホームスクーリングなどの活用が、教員の給与問題解決につながるかと考えているのでしょうか。
- 問題解決にはつながらないと考えます。今後の新たな課題にもなると思いますので、このことについてはさらに深めた探究を進めていきたいと思います。

○講評 高知学園短期大学参与・教授 近森 憲助 氏 11:50-12:10

要旨: 今日は五つの発表を聞かせていただきました。全てのグループが聴きごたえのあるプレゼンテーションになっていたと思います。

この事業が始まってもう5年目になります。5年間見続けてきて感じたことは、どのグループもプレゼンテーションの仕方がかなり上達してきたことです。また、どのグループもきちんとした道筋を立てて、論を展開できていたと感じました。そして、今回発表した五つのグループ以外の探究内容も見てみたいと思いました。皆さんが3年生になった時も、より良い探究活動を進めてくれることが期待できる内容になっていたと思います。



今回の五つのグループの共通点としては、多角的な要因のある課題を探究テーマとして取り扱っている点でした。物事には多角的な視点を持つことが大切で、特に課題解決においては、この視点を持つことが大切であるということを知っておいてほしいと思います。それは具体的に言うと、自身の関心のある視点のみを検証するのではなく、関心の外にある視点も課題解決には必要であるということです。多くの視点をもって、仮説を立て、検証していくことが大切です。社会に出た時にも、課題に対して、このような考え方、見方を持つことで、より良い決定をもたらしていくことが可能になると思います。このグローバル探究で活動していく中で、この感覚を養ってほしいと思います。

今年度でSGH事業は終わってしまいましたが、この活動が皆さんの心の中に残って、皆さんの人生を素晴らしいものへと導いてくれる活動になると信じています。

○1年生探究成果発表(全58グループによるポスターセッション) 13:00-14:45

高知県地域創生モデル案発表(発表8分、質疑4分、移動3分)

今年度は昨年度の反省にたち、58グループを二つに分け、アリーナとトレーニング室の2か所でポスターセッションを実施した。1年生は1グループ前半・後半それぞれ発表3回、視聴3回の計6回の発表と視聴を行った。2年生は前半・後半で場所をかえて6回視聴し、来賓の方々や保護者の皆様は自由に視聴できることとした。1回の発表時間は昨年度の6分から8分に延長したため、前半では発表終了時間前に早く終わるグループが多かったが、後半ではプレゼンテーション方法を工夫し、発表時間が長くなったグループが多かった。聴衆側はそれぞれの発表から学んだことや気付いたこと、疑問に思ったことなどをプログラムのメモ欄に記入し、質疑応答に臨んだ。ポスターセッション終了後、メモをもとに視聴した中で一番良かったグループに投票した。



○講評 大阪大学大学院高等司法研究科教授 谷口勢津夫 氏 15:20—15:40

要旨：1年生のポスターセッションは58組もありました。本当にバラエティー富んだ内容のポスターセッションでした。昨年は、ほとんどのグループがSWOT分析を活用して、解決策を提案する発表が多かったです。ところが、今年度は、土佐山や梶原町、大野見、日高村、須崎などのような地域に訪問して、その特徴や課題、問題点を洗い出していく、フィールドワークを中心としたものとなっていました。この活動は、今後の活動にも広がりを見せるものだと思います。高校時には身近な地域でのフィールドワークを行い、そして、そこで得たものを分析していく手法を大学等では学んでもらいたいと思います。まずは、地域のことを知り、そこで得た情報をもとに世界の問題を考えることが大切であると思います。



探究内容については、全体的により俯瞰的に物事を見ることができるようになり、多角的な視点で探究ができるようになってもらいたいと思いました。今回のポスターセッションで、特に着眼点が面白い班の発表は、303班の「梶原病院に科を増やそう」というものでした。多くの班が地域創生のために産業分野の活性化に目を向けている中、この班は地域の方の幸せのための方策を提案しており、特徴のあるものだったと思います。その他、「ジンジャエールでみんなにエールを」についてのポスターセッションをした班は、クイズ形式で発表しており、発表方法に工夫がされておりました。5年目を迎えたSGHの取組は本当にバラエティーに富んだものになったと感じました。

SGH事業の指定は今年度で終わりますが、この活動は本当に意義のある探究活動なので、ぜひ今後も続けて行っていただきたいと切に願っています。

Ⅸ 事業評価

1 生徒の変容

- ・グローバル探究で学んだ手法が、授業や部活動・学校行事にも活かされ、これまで以上に生徒が主体的に取り組むようになり、部活動の上位入賞や生徒会行事のスムーズな運営につながった。また、探究活動を実施する中で、対外的な調整や部活動との両立などスケジュール管理のスキルが身につくとともに、放課後や休日を活用した自主的な調査・探究を行う生徒が増えるなど、学校全体がより活性化された。
- ・成果発表会や国際シンポジウムを重ねる中で、生徒のプレゼンテーション能力は目に見えて向上している。特に、上級生が英語による発表やステージ上で堂々とディスカッションする様子は、1年生には憧れの存在ともなっており、生徒の成長の大きな原動力となっている。
- ・1年次は人前で発表することに慣れていない生徒も、3年次には全ての生徒が一定のプレゼンテーション能力を得ている。その成果はAOや推薦入試だけでなく、一般の2次試験や就職試験でも役立っている。
- ・生徒はグローバル探究に取り組むことから、学際的、教科横断型の思考をするようになった。

(1)「グローバル探究Ⅰ」における成果

- ・職業人講話・県内リサーチの位置付けについて
職業人講話及び県内リサーチの実施により、地域創生モデル案を考えるために必要な地域に関する情報の収集や情報の整理をしっかりと行うことができた。また、マッピングを通じて地域での人々のつながりや地域の課題との関係性が明らかになった。
- ・中間発表について
本年度は、地域の方の講話のまとめ、講話からインタビューまでのまとめ、プレゼン資料完成の三つの時期で、中間発表を行った。それぞれ、クラスの生徒、中学1年生、担当教員を対象として発表をし、どのような対象に対しても対応するような発表を心掛けさせるようにした。
また発表に関しては、パフォーマンス評価を取り入れ、どのように発表すればよいのかに関しても、生徒にしっかりと意識をさせて発表させることができたため、多くの班で事実に基づく論理的な説明やパフォーマンスのできる発表ができた。
- ・成果発表会について
各地域で講師をしていただいた方々をお招きし、各発表にコメントをいただいた。発表の中から今後、地域で活動したら面白くなりそうな地域創生モデル案を選んでいただいた。

(2)「グローバル探究Ⅱ」における成果

- ・昨年度より、環境問題や、医療、生物の多様性に関するテーマに取り組む理系の生徒が増えた。
- ・3回による大学教員による指導において、環境問題や飢餓・食料問題に取り組む生徒が増えたこともあり、今年度は農学部の方に多数ご参加いただいた。連続参加が可能で継続的な助言をいただけた場合と、毎回先生が入れ替わった場合が1対2の割合であった。継続的な探究内容に対する助言や、効果的な探究方法及び発表方法の助言など、参加していただけた先生から多様な意見がいただけた。統計情報が少ない国や日本語での情報があまり公開されていない国を設定したグループは、情報収集が困難で、疑問があっても調べられない状態があることや、調べた結果をどう組み上げて、どのようなストーリーに展開していくのかを考えあぐねている様子も分かった。
- ・自分達が立てた仮説を証明する実験的活動を行い、その結果を集計するグループや、アンケート対象を目的に合わせた外部対象（本校同学年以外）で取るグループが出てきて、より本質的な探究に取り組むグループもある。それ以外でも、自ら企画、実施して調べてみるという貴重な経験になっている。調べて分かったことによって、分からないことがはっきりしたり、実際にインタビューすることで、社会的で現実的な現状を知ることができたりしていた。
- ・評価表に沿って、学術論文のルールに則り、かつ研究目的や研究方法も書けているリサーチペーパーが多数見受けられるようになった。
- ・自分が発表することで、グループの探究内容が初めて自分のものとなり、また、他グループの発表を聞き、他者の考え方の違いや論理展開の違いを知り、視野が広がった。

- ・リサーチペーパー作成時に、過去のリサーチペーパーがよく参考にされるようになった。また、過去のリサーチペーパーの内容をそのまま借用するようなグループもなく、適切な参考として使用していることが分かった。

(3)「グローバル探究Ⅲ」における成果

- ・生徒個人で探究テーマを設定し、リサーチペーパー（個人論文）の作成方法を理解することを通じて、思考のプロセスや探究活動の手順を学ぶことができた。また、リサーチペーパー（論文）の書き方や引用文献の使用方法などを理解することを通して、大学等で研究を進めるうえでの基礎固めとなった。
- ・生徒自身の将来像が明確となり、探究した内容を大学や専門学校でさらに深めたいという志望を持つ生徒が70%となった。また、担当教員もリサーチペーパー作成のアドバイスや面談を通して、生徒の進路希望や適性などの把握につながった。
- ・リサーチペーパー作成の準備を2年次の終わり（春休み）から始めたことにより、短期間での作成ができるようになった。1年次からのリサーチ活動の積み重ねがあり、情報収集力も高まった。また、独自アンケートを実施したり、放課後や休日を利用して自主的に企業訪問、電話でのインタビューなどを行ったり、実態を調査、分析を行うことに抵抗が少ない生徒が増えた。
- ・先述した「高知西高等学校SGH国際シンポジウム」では、学年の代表に選ばれたグループが探究の成果を発表することができた。すべてのグループがこれまでの探究の成果として、自分たちの考えを英語で堂々とプレゼンテーションすることができた。また、中国上海から上海外国語大学附属外国語学校東高校と中国香港からルター校の高校生とのパネルディスカッションにおいても、英語を活用した活発な議論がなされた。

(4) 進学指導上の成果

表1は、平成27年度から令和元年度までの国公立大学のAO入試・推薦入試Ⅰの結果を表したものである。平成27年度が、本校のSGH事業の1期生になるが、この事業による探究学習（グローバル探究Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）を通じたプレゼンテーション能力の向上も相まって、自分のやりたいことをしっかりと表現することが必要であるAO入試や推薦入試Ⅰに積極的にチャレンジする生徒が多くなってきた。このように、探究学習で取り組んだ内容が自分の進路に直接つながるような生徒が増えてきたことはこの事業の大きな成果の1つと言える。

受験年度	H27	H28
合格者/受験者 (合格率)	19/ 46 (41.3%)	32 / 54 (59.3%)
H29	H30	R1
39 / 70 (55.7%)	38 / 67 (56.7%)	35 / 60 (58.3%)

表1

2 事業に対する教職員の意識

5年間で教員の探究的な学習に関する指導力が高まった。当初は、新しく始めようとするグローバル探究の授業に対する教員の不安や、シラバスをゼロから策定することなど、数々の難題があったが、徐々に取組が改善され、現在ではほとんどの教員がこうした探究的な学習の取組の必要性を実感している。

評価等については、まだまだ改善の余地があり、さらに継続した研究が必要である。指定事業の終了で終わることなく、引き続き探究学習に取り組んでいきたい。

【グローバル探究の成果】				R01	H30	H29(%)	【SGH事業により伸長した資質能力】				R01	H30	H29(%)
グローバル探究に携わることで生徒理解の深まりにつながったか？	肯定	84.3	79.7	73.6	コミュニケーション能力	82.1	78.0	85.7					
	否定	15.7	20.3	26.4		リーダーシップ	62.5	42.4	31.0				
グローバル探究に携わることで自身の教科指導の充実や改善につながったか？	肯定	60.8	42.9	41.5	主体性・積極性	71.4	51.7	54.8					
	否定	39.2	57.1	58.5		自己管理能力	66.1	47.5	40.5				
					基本的な生活習慣	67.9	61.0	52.4					

昨年度以降SGH事業の活動を受けた3年生の国公立大学の推薦・AO入試における合格者が、SGH事業の指定を受ける前と比べ、30名程度から40名前後に増加し、それ以降も一定の水準を維持するなどの成功を収めたことにより、教職員がSGH事業の有用性を強く認識するようになった。本年度も、国公立大学の推薦・AO入試における合格者数は昨年度並みであったが、合格率は上がっており、改めて取組の成果を感じている。

この結果は、研究成果を発表する多くの生徒が、原稿の棒読みにならないよう工夫しながら、グループの他のメンバーと協力して、論理的な構成で研究成果を発表する姿、また多くの聴衆や参加者を前にしても、物怖じしないで発表する姿を見ることで、多くの教員が生徒の研究そのものの質的な向上、研究内容を他者に伝えるスキルとマナーの上達、そしてそれらを支える自信や自尊心の高まりを感じとっているからではないかと推察される。

3 事業に対する保護者の関心

保護者対象の学校評価アンケートの結果では、「SGH事業は充実している」と回答した保護者は今年度は80.4%と8割を超えた（昨年度78.8%）。多くの保護者にSGH事業の内容が理解され、期待を寄せていることがわかる。また、「情報発信は充実しているか」については、肯定的意見が今年度は70%を超えた（昨年度68.2%）。これは、本校が定期的に発行している「SGH通信」や各種リサーチ活動の案内文書などをClassiで生徒及び保護者へ配信したことで、割合が増えたと考えられる。

さらに、年二回（7月・2月）開催される発表会は平日開催であるにも関わらず、昨年度に比べ、参加して下さる保護者も増加した。これらより、事業に対する保護者の関心は非常に高いと推察される。

4 事業評価

（1）グローバル・リーダーとしての資質・力量の変容について

目指すグローバル・リーダー像を「郷土や我が国、国際社会の発展に貢献する志をもち、高知から世界へチャレンジできる人材、あるいは、国際社会で活躍できる人材。」と位置付け、育成すべき資質・力量を、「1. 世界の中での日本人としての文化的アイデンティティ」、「2. 幅広い知識と教養」、「3. コミュニケーション能力」、「4. リーダーシップ」、「5. 課題発見力・解決力」、「6. 社会課題に対する関心」とし、研究開発仮説である「地域課題を自己と関連付けながら探究し、課題解決モデルをグローバル展開する探究活動を行うことで、グローバル・リーダーに必要とされる力が身に付く。」（仮説1）及び「仮説1と関連付けた英語による探究型授業を行うことで、国際的な場面において世界の人と英語で対等に意見交換をすることができるコミュニケーション能力が身に付く。」（仮説2）を実証すべく取り組んできた。

実証方法として、初年度から続けている、30項目からなる意識調査「高校生の問題解決意識と行動に関するアンケート」を、1年生（63期生）280名、2年生（62期生）280名、3年生（61期生）280名を対象に令和元年6月と令和2年2月（3年生は令和元年12月）に実施した。1年生（63期生）の調査結果は令和元年6月と令和2年2月でt検定を行い、2年生（62期生）と3年生（61期生）は4回分の調査結果について多重比較を行った（表1～3参照）。その結果、2年生（62期生）は平成31年2月調査結果と令和2年2月調査結果とを比較すると、すべての因子で有意な差が見られた。これは、第2学年の探究内容が、高知県内から世界へと視点を変え、探究を行う活動に変わったことと、それに伴って地域課題について関心が高まったことが理由と考えられる。このことから、生徒たちは、学習内容に応じて意識が変容していることが伺える。3年生（61期生）においても、令和元年6月調査結果と令和元年12月調査結果とで、全ての因子で有意な差が見られた。

これらのことから、本校のSGHカリキュラムが、グローバル・リーダーとしての資質や力量の育成に有意な効果をもたらしていると考えられる。

表1（満点は7.0点 有意水準は1%）

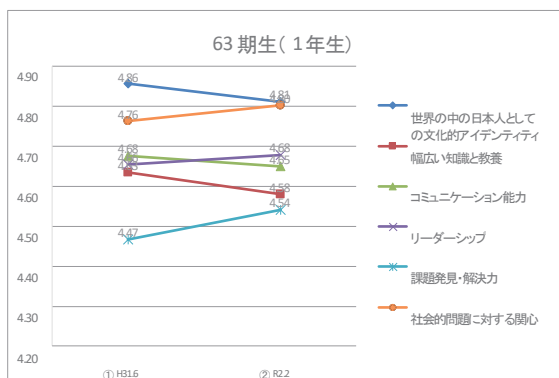


表2（満点は7.0点 有意水準は1%）

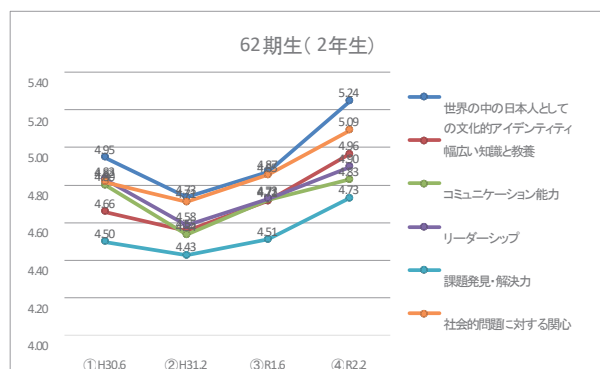
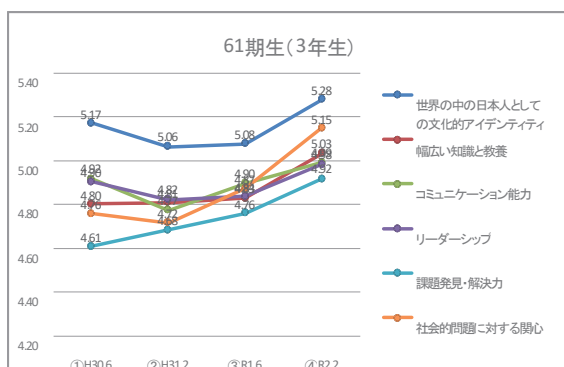


表3 (満点は7.0点 有意水準は1%)



(2) グローバル・リーダーとしての資質・力量と英語学習について

平成29年2月に、英語学習に関する項目が含まれる意識調査「高校生の問題解決意識と行動に関するアンケート」を実施し、グローバル・リーダーとしての資質や力量が英語学習にどのように作用しているか調査した。その結果、図1のように、「コミュニケーション能力」と「社会課題に対する関心」が「英語学習動機」や「英語表現の認知的方略」に一定の影響を及ぼしていることが明らかになり、「英語学習動機」が英語の学業成績に影響を及ぼしていることを確認した。

本年度においても全学年を対象に英語学習に関する項目(Q31～50)について調査した。以下は3年生(61期生)が、1年次(平成30年2月)、2年次(平成31年2月)、3年次(令和元年12月)に実施した調査結果について多重比較を行ったものである。その結果、以下のようなことが分かった。

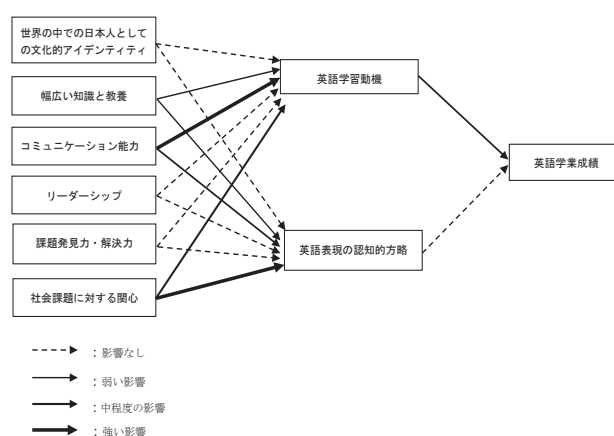
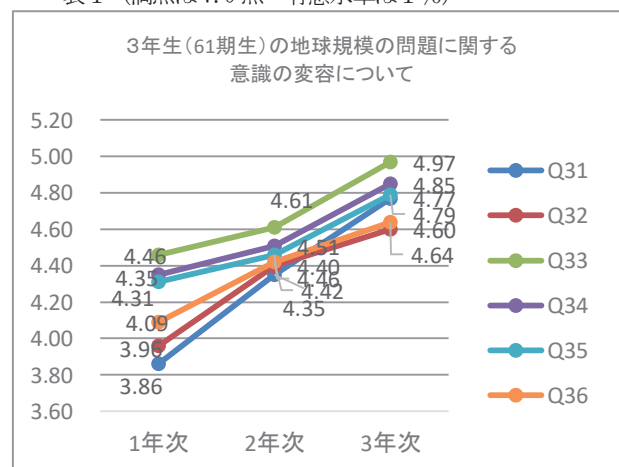


図1: 「グローバル・リーダーの資質・能力 - 英語学習 - 英語学業成績」のパス解析結果

ア 地球規模の問題に関する意識について

すべての質問項目において、学年を追うにつれて、有意な差が見られた。これは2・3年次におけるグローバル探究を中心として、英語表現やグローバルエデュケーション、また教科横断的に世界の課題について取り組んだり、他グループの発表から課題を見聞したりしたことが、視野を広げるうえで大きく作用したと考えられる。

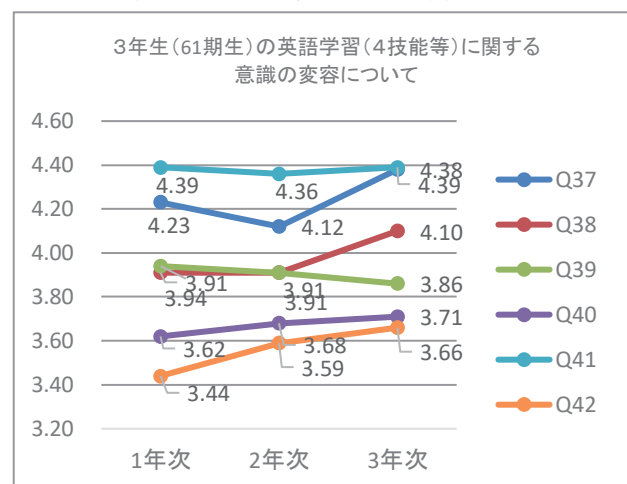
表1 (満点は7.0点 有意水準は1%)



イ 英語学習（４技能等）について

ほぼすべての質問項目において、学年を追うにつれて、有意な差が見られた。特に「Q37 読むことが得意」と「Q38 書くことが得意」については、1年次よりも自己評価がかなり高くなっていることが分かった。

表2（満点は7.0点 有意水準は1%）

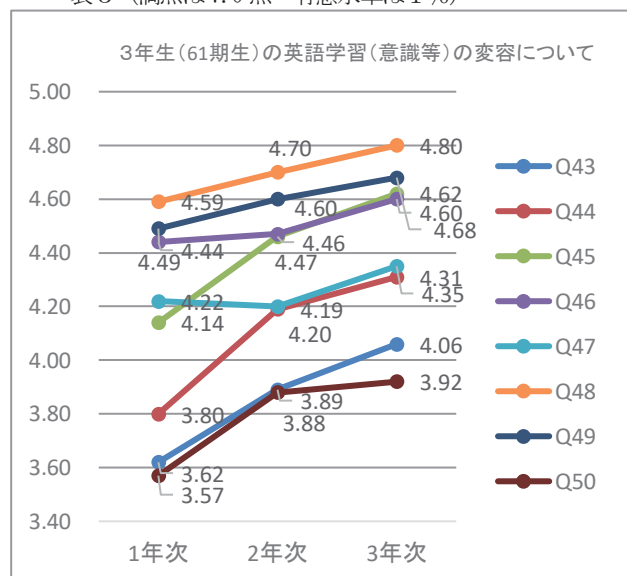


ウ 英語学習（意識等）について

表1ほど顕著ではないものの、すべての質問項目において、学年を追うにつれて、有意な差が見られた。相手を意識した言動を心掛けようとする意識が高まっていると考えられる。

以上のことから、グローバル・リーダーとしての素地ができつつあると考えられる。

表3（満点は7.0点 有意水準は1%）



※参考（英語学習に関する項目）

- Q31 私は日本と諸外国との間で生じている問題や地球規模の問題を考える際に宗教を考慮している。
- Q32 私は日本と諸外国との間で生じている問題や地球規模の問題を考える際に個人の信念や集団の好みを考慮している。
- Q33 私は日本と諸外国との間で生じている問題や地球規模の問題を考える際に地域や国の文化的背景を考慮している。
- Q34 私は日本と諸外国との間で生じている問題や地球規模の問題を考える際に、国の歴史を考慮している。
- Q35 私は日本と諸外国との間で生じている問題や地球規模の問題を考える際に、各地域の地理や気象を考慮している。
- Q36 私は日本と諸外国との間で生じている問題や地球規模の問題を考える際に、物品や人の流通を考慮している。
- Q37 私は英語を読むことが得意だ。 Q38 私は英語を書くことが得意だ。 Q39 私は英語を聞くことが得意だ。
- Q40 私は英語を話すことが得意だ。 Q41 私は英語でコミュニケーションを取ることが好きだ。 Q42 私は英語で討論することが好きだ。
- Q43 私は自分の考えを英語で表現することを通して、論理的に考えるようになった。
- Q44 私は英語で討論することを通して、自分の考えが深まっていると感じる。
- Q45 私は英語で意見を求められたとき、できるだけ即座に反応するようにしている。
- Q46 私は英語で意見を表明するとき、内容に重点を置いている。
- Q47 私は英語で表明された意見を読んだり聞いたりして、表明する際の参考にしている。
- Q48 私は英語で表現する際に、その内容を伝えるのに相応しい表現を使うように心掛けている。
- Q49 私は英語で表現する際に、読み手や聞き手の文化や価値観を考慮した表現を使うように心掛けている。
（例えば、ジョークが許されない、使ってはならない、自分の常識や思い込みを前提としない、等）
- Q50 私は英語で意見を表明することができるように、普段から世界の情報収集に努めている。

5 次年度以降の課題及び改善点

(1) 課題

① グローバル探究Ⅰ

- ・この1年間で訪問させていただいた県内8地域で、総勢62名の地域の方にお世話になった。各地域1名の方にコーディネートをしていただいたが、それでも県内リサーチの計画を立てるまでのやり取りが非常に煩雑になった。
- ・生徒のモチベーションをあげ、取組の目標の一つにするためにも、1年生のスタート当初に、どのようなプレゼンテーション大会があり、そこではどのような力を習得しておかなければならないか等をきちんと説明することが必要であると感じた。

② グローバル探究Ⅱ

- ・グループ決めの際のSDGsのターゲット目標の提示で、高知県の地域創生のテーマも選択しやすく、高知県の抱える具体例をターゲットの例を書き加えたが、1年次から探究してきた高知県の地域創生に取り組む生徒はまだ少数だった。
- ・昨年の2年生のリサーチペーパーを活用する生徒が増えた分、その内容を正しいものとしてそのまま受け入れてしまう生徒がいるので、他者の論文を批判的に読める力の育成を行う必要がある。
- ・世界や地域の諸問題の解決に対して、問題の原因に即した提案を推奨しているが、大きな問題設定から、具体的な地域の現状に行き着くまで調査が進まない班もある。調べが進むたびにパワーポイントへアウトラインとしてまとめるものの、グループ内での議論が深まっていないことが理由として挙げられる。なぜそうなるのか、そもそも正しいのか、などグループで疑問を投げかけあい、話し合う時間が少ない。教員は、担当する生徒グループが多く、生徒がどこで困っているのか、教員と班の話し合いの時間が取れない。グローバル探究の時間に、全てを担うことには無理があり、調べ事は各自で授業時間以外で行うことや、教科横断的に探究に必要な力をつけるカリキュラムマネジメントも必要である。
- ・ワードやエクセルなどのパソコン操作で苦労している部分も多く、放課後に基本操作の教授を行うことも考えたが、全員が一斉に基本知識を得ることが必要で、情報学習の時間を何時間か取り、しっかり教えることが必要である。同様に、必要な情報の調べ方も、題材を出して練習する時間が必要である。
- ・探究内容を整理するために、年間3回の発表の場を設けているが、毎年ながら協力していただく大学教員の確保も難しく、生徒も議論をするより、その準備のために時間を割かなくてはならない。各クラスの担当と議論し助言をもらう時間を充実させる必要がある。
- ・クラス代表を選出する際に、選出者が探究活動全体に対する各グループの取組や、進路を加味した選定をすることがあるため、リサーチペーパーが論理的に書かれたチームが選ばれるとは限らない。また、選考委員の評価も分かれるため、選考評価の基準を考え直す必要がある。探究成果のすぐれたグループを選ぶことができる評価表に直す。
- ・ポスターセッションや発表で、まだまだ原稿の棒読みになっている生徒が多い。しかし、聞く立場も経験するため、それでは、内容が聞きづらいことにも気付いている。今後のグローバル探究以外の授業でも発表活動を入れてもらうことで、発表する訓練を続ける。

③ グローバル探究Ⅲ

- ・インターネットの情報のみが引用されているリサーチペーパーが多い。図書室の書籍や新聞・雑誌なども文献として利用するなど、さまざまな情報に触れることで視野を広げさせるとともに、論文の信頼性も上げさせたい。
- ・リサーチペーパーの構成については理解できているが、8月以降の進路に関する深い探究では、それらを別物と捉えて十分には活かしかれていない。進路指導部および国語科教員と協議しながら、進路目標に沿った探究活動（小論文や志望理由作成を含む）になるよう指導に工夫を重ねる。

④ 英語学習

- ・ネイティブによる授業が週に1時間であるため、クラスによって時間数にばらつきがある。
- ・探究活動そのものは「グローバル探究」で慣れているが、プレゼンテーション内容が、調べ学習にとどまっていた、問題を掘り下げる力が弱い。
- ・なじみのない専門用語が多いため、メモを見ながら発表する姿が見受けられた。
- ・昨年度のグローバル探究Ⅱのグループのメンバーとは異なるため、探究内容を一から決め直す必要があった。
- ・論理的な思考を鍛える必要がある。(抽象的な概念へと考察を深めていけない。)
- ・英語の授業でありながら、英語の絶対量が少ない。
- ・昨年度の反省から、7月の国際シンポジウムに向けて時間が限られているので、3月からテーマを決め始めたが、リサーチや仮説の設定などに多くの時間を要した。

⑤ 教科・科目のSGH化（探究型学習）

- ・方法先行の授業となっており、目標設定(目指す生徒像・教室像)が不明瞭である。
- ・事象に対するグローバルの視点が欠如している。
- ・指導と評価が表裏一体であるという認識が不十分である。

⑥ 評価

- ・「振り返りシート」の活用方法が不十分であった。生徒理解のみならず、カリキュラムにフィードバックする方法を具体化する必要がある。
- ・「グローバル・リーダーの資質・力量に関する意識調査」については、昨年度に引き続き実施はできたが、依然、活用方法が不十分である。教員や生徒に対するフィードバックの方法を具体化する必要がある。

(2) 改善点

① グローバル探究全体

- ・各学年の年間指導計画について、横断的、縦断的なカリキュラム作成を行う。
- ・教員の指導力向上を図る校内研修を実施する。

② グローバル探究Ⅰ

- ・1学期前半の授業内容を精選し、タブレットの使用方法、資料の作成方法、プレゼンテーション方法などの地域創生モデル案の作成のために必要となる基本的な知識を早い段階で学習させる必要がある。
- ・探究スキルや探究プロセスの習得を1年間で行う。

③ グローバル探究Ⅱ

- ・リサーチペーパーとして、現状と課題が整理できれば良いというレベルを指導者、生徒ともにもっと浸透させていく必要がある。
- ・探究やリサーチペーパーの理解を深める教員向けの指導者講習会に、予算内でお願いできる指導者を探す。
- ・助言していただける先生方のさらなる開拓が必要である。
- ・評価と点数の間には一定幅を持たせ、達成している度合いは正しく評価するが、点数は一定得られる成績システムに作り変える。
- ・生徒が前年度の2年生のリサーチペーパーを批判的に読める力の育成を行う必要がある。
- ・個別指導をもっと取り入れる。

④ グローバル探究Ⅲ

- ・生徒の進路実現につながるリサーチペーパー（個人論文）作成
- ・リサーチペーパー（個人論文）作成の指導に際して、適切な助言ができる専門家や指導教員の配置を「チーム」で編成する必要がある。

⑤ 英語学習

- ・必要に応じて、他の英語の科目で調整をするようにする。
- ・英語に直す前に、根拠が妥当であるかチェックする時間を十分確保できるような工夫をする。
- ・簡単な表現を使って、聞き手に伝えるということを第一に考えて発表するようにする。
- ・年度末の多忙な時期であるが、3月にその時間の確保をする。
- ・日本語でのリサーチをやめるのは現実的でないため、リサーチは英語の授業外で行い、授業内はできるだけ英語でまとめたり、発表したりする時間に充てる。

⑥ 教科・科目のSGH化（探究型学習）

- ・校内SGH推進委員会を中心に、各教科での探究型学習について協議し、各教科内で共有し、授業実践を通じて探究学習を深化させる。

⑦ 評価

- ・来年度も引き続きグローバル・リーダー像の資質・力量に係るルーブリックについて、国際バカロレアのATLスキルを参考にしながら再整理する。
- ・リサーチペーパーやプレゼンテーションに係るルーブリックを改善するとともに、リサーチペーパーの到達レベルをより適切に設定する。
- ・教員の評価能力が高まるよう、「指導と評価」に関する研究者等を招聘し校内研修を実施する。
- ・「高校生の問題解決意識と行動に関するアンケート」の内容改善を行う。

X 令和元年度SGH運営指導委員会

1 委員（6名）※敬称省略、五十音順

合田 和穂（高知県産業振興推進部副部長 兼輸出振興監 兼地産地消・外商課長）
坂本 真由美（特定非営利活動法人とさはちきんねっと事務局長）
谷口 勢津夫（大阪大学大学院高等司法研究科教授）
近森 憲助（高知学園短期大学参与）
二宮 久美（高知学園短期大学参事・キャリアセンター長）
松本 茂（立教大学経営学部国際経営学科教授）

2 実施状況及び要旨

県教育委員会主催により、2回の運営指導委員会を開催した。第1回は「令和元年度SGH国際シンポジウム」の参観後、第2回は「令和元年度SGH成果発表会」の参観後に開催し、それぞれの参加を踏まえて、委員の皆様から意見をいただいた。

（1）第1回SGH運営指導委員会

- ① 日 時 令和元年7月4日（木）15：20～17：30
- ② 会 場 かるぽーと（9階特別学習室）
- ③ 出席者 委員2名、高知西高等学校12名、教育委員会事務局5名
【運営指導委員】近森会長、合田委員
【高知西高等学校】竹村校長、森副校長、中山教頭、谷内主幹教諭
白石学年主任（1年）、中内学年主任（2年）、川本学年主任（3年）
岡村グローバル教育部長・SGH研究主任、川田教諭、藤澤教諭、
西村教諭、米村教諭
【教育委員会事務局】高野課長、原課長補佐、市原チーフ、石丸指導主事、中越指導主事
- ④ 協議及び指導助言内容
ア SGH事業について
○「地域に出て具体的な情報を獲得したり、1次データを収集したりする時間が取れない」
 - ・ネットで調べることは必要だが、やはり現場へは行くべきである。
 - ・全員で1か所に行かなくても、例えば都合がつくメンバーだけで行って、調べた内容を行けなかったメンバーに伝えるということでもいいのではないか。人に伝えるには自分が理解しないといけないので、その生徒には大変力が付くことである。複数の行き先に、それぞれ都合がつくメンバーで行くということも考えられる。
 - ・ウィキペディアはあくまでこれから情報検索をするための前段階の情報に過ぎない。生徒のネットの使い方や、情報検索スキルについても教員からの指導が必要である。
 - ・1次データと2次データの両方をとらえることが必要である。
 - ・その探究テーマに沿った大学論文などを事前に読むこと。状況を一定つかんだうえで、生徒が問いを持ったうえで、現場に行くことが大切。現場の人にとっても、対応しやすくなるし、よく勉強しているな、ということにつながる。
 - ・調査・訪問企業については、食品関係であれば協力はできる。
 - ・昨年度開館した図書館「オーテピア」を活用する。司書さんに聞けば、関連図書を紹介していただける。
○「もっと容易に論文を手に入れる方法はないか」
 - ・わたしたち大学教員も検索して一発でヒットするということはなかなかない。容易でなく手間がかかることだが、その試行錯誤の過程も、生徒にとっては検索スキルを身に付けることとして大切なことである。
 - ・いきなりネットに入るのではなく、まず関連する書籍を探し出し、その巻末にある参考文献や論文を調べて読んでみるなどして参考にしよう。

- ・現在指導をいただいている大学の先生に直接聞いてみる。
- ・論文や情報の有効な入手方法や、探し方を身に付けることが、生徒の学びにもつながる。

イ 英語科の取組について

- グローバルシチズン育成セミナーのような講座の情報、海外の英語を母語としない生徒への英語教育プログラムなどの情報はないか。
- ・委員の松本茂先生をご存知ではないでしょうか。助言を求めています。
- ・韓国や中国の小学生の授業などが参考になるのではないかと。高知県でも韓国全羅南道との交流、中国安徽省からの訪問、スポーツでも今回シンガポールが来高する。そうした交流の場を活用できないか。
- ・SDG sの国連決議文である2030アジェンダがネットで原文が公開されている。この英文を読むことで、例えば貧困が冒頭に掲げられていたり、誰も置き去りにしないという文言があったりするなど、生徒が自分で取り組んでいくにあたって、背景を知ることができるのではないかと。

ウ まとめ

- ・いよいよ最終年度である。これまでの取組成果も見えてきた。一層の充実を図りたい。
- ・インターネットの有効な使い方、スキル、活用の指導が必要である。先生と生徒と一緒に探す活動があってもよいのでは。
- ・SGH事業終了後の次の事業についても、これまでの取組成果を生かしながらがんばってほしい。小学校も英語化で盛り上がっているの、いろんな方に情報を求めて生かしていただきたい。

(2) 第2回SGH運営指導委員会

- ① 日 時 令和2年2月13日(木) 16:00~17:40
- ② 会 場 高知県立高知西高等学校 会議室
- ③ 出席者 委員5名、高知西高等学校12名、教育委員会5名
【運営指導委員】 近森会長、二宮副会長、合田委員、坂本委員、谷口委員
【高知西高等学校】 竹村校長、森副校長、中山教頭、谷内主幹教諭
 白石学年主任(1年)、中内学年主任(2年)、川本学年主任(3年)
 岡村グローバル教育部長・SGH研究主任、川田教諭、藤澤教諭、
 西村教諭、米村教諭
【教育委員会事務局】 高野課長、原課長補佐、市原チーフ、石丸指導主事、中越指導主事
- ④ 協議及び指導助言内容

第2回SGH運営指導委員会を高知西高等学校主催の「令和元年度SGH成果発表会」終了後に開催し、各委員には同成果発表会において生徒による研究成果発表・ポスターセッションの様子を参観していただいたうえで、学校からの今年度の取組状況や成果と課題の報告を受けて、以下の事項について協議し助言をいただいた。

1 SGH事業の取組報告について

- ・地域の方や関係者が協力してくださって事業が実施できており、生徒も地域に関わって活動できている。
- ・今日の成果発表会もたくさん関係の方が見に来ていた。高校生がこうして地域に関心を持ってくれていることをうれしく思っているとのことだった。この事業が地域に元気を与えている。
- ・今は学習の一環で地域に来てくれているが、今後継続的に、生徒自らが意思を持って地域に関わるようになってほしい。
- ・地域創生は今どこでもやっていて、実は地域にとって受け入れで煩雑なところもある。今日発表を見に来ていた方からも、西高校生にかなりお世話をしたという話を聞いた。一方、生徒の発表を見ると、あまりに広い大きな課題をただ発表して終わっているところもあった。地域は「せっかく高校生が来たから」と一生懸命見せる。生徒も真面目だから見たこと全部を盛り込んで絞り込みがで

きない。その解消のためには、学校から地域に生徒受け入れをお願いするとき、「いろいろ見せなくていいです」とか「まずは生徒にトピックを考えさせください」など、準備段階で学校から一定の仕掛けをすることが必要である。

- ・英語の文献を読ませることを意識的に取り組まれたらよい。テーマ設定によっては英語の文献が豊富である。先生側で「この分野だったらこの本」というような見当をつけておいて勧めたらよい。
- ・教科書で与えられて読む英語に比べて、自分が探究して読もうとして読む英語は、英語力の育成という点では効果が高い。モチベーションを持って読もうとする工夫があればよい。

2 協議（グローバル探究及び英語の取組について）

- ・生徒を地域に送り出すときの、先生方による事前準備が大切である。「こういうことを学ばせたい」「こういうことを指導して欲しい」など事前に話し合いをするなど、見えないお膳立てが必要である。
- ・地域の方と先生方が一緒に話し合う場面の確保が必要である。地域の方に「これはお願いします」「これは必要ないです」くらいまで言える継続的な関係性が、学校の先生方に培われてほしい。
- ・高知県全体を考えると、高知西高校の先生だけがやっているという取組ではいけない。例えば県教育委員会が市町村と連携して学校が地域で探究できるシステムを、教育行政のなかに組み込むことも必要である。また、これまでの SGH 事業で蓄積されたノウハウを県教育委員会で持っておき、県内の他の学校がやりたいというときにそのノウハウを活用できるシステムも大切である。学校だけの取組にしてしまうと、先生方の負担も大きく、異動などで継続性の確保が難しい面があるので、教育行政で一定ベースとなる型を作ってもらうことは可能か。
- ・生徒や先生、行政の方、地域の方が協働して、お互いが持ち寄って考えることも必要ではないか。それぞれ持っているいいものを出し合いながら、お互いが学び成長し合っていく喜びを感じて欲しい。負担感だけが進んではいけない。
- ・来年度予算がどうなるかということはあるが、これまで築いた財産はあるので、予算がなくなったからやめるではいけない。
- ・環境省で行う「地域循環共生圏」というプロジェクトがある。高知県の参加者で地域の活動に詳しい方がいらっしゃると思うのでアドバイスを求めたらよい。
- ・単に先輩のリーサーチペーパーを読みなさいではなく、この論文のどこがいいのかを説明しながら良い論文を読ませることが必要である。良い論文とは筋が明快である論文である。国税庁が11月頃に行う「税の週間」で高校生が書いた論文があるが、例えばこうしたある程度しっかりした文章を読ませたらよい。
- ・今日の発表などをみると、導入から途中までは良いが、突然そこで解決策が出てくるなど、「筋が切れている」発表も多かった。論文を読ませるときに、根拠や文脈を意識した読み方をするように指導が必要である。例えば「筋が切れているところはどこか」「直すとしたらどこか」などを生徒に投げかけてみる。「筋を追う」ことができれば、良い読み方ができる。
- ・同じテーマを扱った論文をいくつか読ませることも有効である。根拠や方法、結論が比較できるので、例えば「この人はこの根拠でこういう方法でこうした結論で」と一覧表のようなものを作るなどすれば、書く力に結びつくのではないか。
- ・論文のなかでたくさん説明を書いてくる学生に、「要旨を2〜3行で書きなさい」と指導することがある。まず短く書くことで筋も明快になる。
- ・英語で論文を書くことは、英語と日本語は文章構造が違うので本当に至難の業である。生徒がくりかえし英語の先生やネイティブの先生から提案を受けながら編集校正という作業になると思う。翻訳に迷い試行錯誤しながら作成することも、生徒にとっては必要ではないか。

3 まとめ（5年間の締めくくりとして）

- ・高校時代に地域のことを知り、その子が将来遠くに行ってもその学んだことが残り、生徒のアイデンティティーの形成や、進路選択にも役立っている。この事業で学んだことは将来大学に進んで社会人になってから発揮されると思うので、この事業を経験した先輩の活動などが今の生徒にフィードバックされれば、生徒にもモチベーションになる。
- ・この5年間で生徒のプレゼンテーション能力などが飛躍的に向上している。堂々とした発表の態度

など感心している。積み重ねが大事であるので今後も継続してほしい。

- ・この事業は、高知西高校生の思考を鍛えたと考える。地域や海外のことをリサーチし、文献を調べて、課題を見つけて解決策を考える。きちんと順序立てて頭でイメージし物事を考えていくという論理的な思考力がこの事業で伸びたと思う。例えば、山田高校の作る「山田まん」や高知商業高校が城西館と組んで作るケーキなど、目に見えた成果としてできあがることも確かに大事であるが、高知西高校の SGH 事業はこれらとは少し違うと思う。5年間続けてきて様々なことをされたが、これからの流れをここで一旦整理することが必要である。地域とやるのであれば、今すでに地域にそれぞれ高校はあってそこがやり始めているから、高知西高校が入ることはともすれば邪魔になることになる。そうではなくて、高知西高校は高知西高校として、生徒にとって将来にわたって役に立つであろう頭の使い方や思考力をしっかり生かす取組を続けていってほしい。
- ・先生方にとってもこの事業に関わられたことは大きな経験である。ワンチームで、学科も教科もこえて、学校全体として全ての先生が関わっていてもらいたい。そういう意味では今日の会も全員の先生方に出席してほしい。
- ・事業が終わるので当然予算は厳しくなるだろう。しかし、そこでもう一度整理し、今までのことをやめる勇気と、新しいものを作る知恵を結集して欲しい。この5年はかなりの礎になっており、この学校でないとできなかったことをしっかり続けていただいて、地域に必要な人材を輩出することを目標に、これからも一丸となって取り組んでほしい。
- ・草の根運動が大事だと思う。卒業生が、保護者が、地域の方が「この学校を応援しよう」と展開していけるよう働きかけてほしい。事業が終わったこれからが正念場である。
- ・SGH 事業初年度の発表は商品開発の話ばかりだったことを思い出す。5年経って思うことは「product (製品・成果)」ではなく、「process (過程)」である。5年にわたって鍛えてきた思考力。物事を処理する (processing) 力がついたことを成果として、この財産を活用して、さらに発展的に取り組んでほしい。
- ・高知西高校は SGH 事業を通じて、砕氷船のような役割を担ったと思う。教育において「正解／間違い」と「うまくいった／失敗した」は全く違うものであり、これまでのような「正解と間違い」だけで評価しては生徒の成長につながらない。教育が目指すべきところはまさに今の高知西高校のような取組であって、それが今後県全体にあまねく広がってほしい。教育はすぐ成果が出るわけではなく、先を見越した教育が必要であり、それをいつ始めるのかで県の教育も変わると思うので、高知西高校の先生方は大きな事をやっていると思っていただいて、この事業を高知西高校の伝統として続けてほしい。